

福島さる鳥鵲樓にて

牙かへり山風いたくふくしまの松の音こそひまかかりけれ  
ひ月十八日雪いたくふる

霞 花とましはどをば過て草も木も冬になしふる今朝の雪かき  
朝 霞 まゝあらば春の霞に身をなして野おも山おもたち渡るべく  
夕 霞 時めかぬ心も去らで朝なく我をささびくはるがすみかき  
京より西南北方を見やりて

霞 雨やふるかすみやかゝるをしや山高根おぼろに成にける哉  
月中 霞 春くれればおぼろに影れまゆる哉月此中にもはさやさくらむ  
月前 霞 照る月此ひかりのさえて足曳此山の端つゝさかすみ棚びく  
月帯 霞 大空にかすめる月をうすも此袖につゝめる玉かとぞみる  
わが宿の梅のはつ花ささしより空ゆく月もかすみけるかき  
かすむ夜の月のはこびもおそからし山の端高く残るかげ哉  
人えれずたつとすれど春霞月のひかりぞおぼろさかりける

遠山霞

住よしの松より上にもものなしかすみにけりな紀路の遠山  
まよし野此かくの大峯雪ながらのままがくれお成おける哉  
はるかにも有馬のさけを霞むなる出湯の煙さちやそふらむ  
小鹽山小まつが原のかすめどもまぶ袖さむし鳥羽の細みち  
遙峯帯霞 春がすみたさびく時の同じえにこもりて見ゆる二子山うさ  
海邊 霞 海ごしの遠山姫のまゆびきにかすみてのこる春の日此かげ  
はのくゝと出る朝日の波のうへにうきてさよふむら霞哉

住の江此岸の松ばら老おたりいく春がすみさちわたるらむ  
白波のうへへの時もなきものを何を春とてかすみそむらむ  
霞たつ難波堀江のまをつくし見えぬを春の去るしなりける  
春くれればせとの鳴戸も静まりてかすみや浪と立かはるらむ  
ま冬つき春にあるとのめかり舟けさの霞にささびかれゆく  
花鳥のはかおも春のあるものを霞がくれのあはぢまやま  
つ此國の難波此はるをさちこめて一つに霞む淡路まやま  
亂る芦のかれ葉の霜の冬ながらかすみて見ゆるあはぢ島山



嶺樹霞 ふゆがれもまらぬ高根の一つ松それさへまを霞む頃うき  
 松上霞 山まきのかいみの山此まつの葉も霞にくもる春の來にけり  
 霞中瀧 春霞たちかへれどもいそのうを音もかはらぬ布留の瀧つせ  
 暮山霞 けふのみと春もくれゆく山のはにふをひのこれる夕霞うき  
 關路晚霞 あふさか此ゆふつ々鳥のなきやみて霞おくる、關の杉むら  
 霞隔遠樹 大ひえのさらゝの松のあをる一本杉のかすみはてさり  
 待 鶯 山里の垣ねがくれふ春まつとありしうぐひす今や來鳴かむ  
 栽竹待鶯 窓近く竹をばうゑつうぐひすの春のはつ音のわが宿になけ  
 曉 鶯 夜をのこす竹のまげみらくられどさく鶯の聲ぞさやけき  
 朝 鶯 春くれれば老の寐さめもかくれきてさく鶯おこさるゝかな  
 窓前鶯 竹の葉にあしたの霜のこをれどもとけてさこゆる鶯のおゑ  
 曉聞鶯 朝づく日さしるる枝の鶯のなかなかぬかげさへまどに見えけり  
 鶯のあくるもまどで鳴く里の日たけてあくる人なかりり  
 くれ竹の葉おしひ月のうげあがらぬとつぐる鶯此おゑ

毎朝聞鶯 朝日影さすや垣ね此梅が枝にけふもきこゆるうぐひすの聲  
 霞中鶯 あささくなく鶯やそめつらむおのが羽いろの青柳のいと  
 鶯告春 春がすみたちさびさこめて鶯のこゑはのかおもさこえける哉  
 鶯有慶音 から大和なくうぐひまのかはれども同じ心に春やつぐらむ  
 鶯有歡聲 打ちさびさ長閑ある世の春にわひてつぐるかひある鶯のこゑ  
 鶯有歡聲 古へもかくや此どけき春日野の小松が原此うぐひす此おゑ  
 うれしき春の心此常なれどはつうぐひすにまく物ぞなき  
 雪 中 鶯 かげりあきはるのまらべに聞ゆあり柳の糸のうぐひすの聲  
 深 山 鶯 うぐひすの花となさつるまら雪のやがて深くも積りける哉  
 深 山 鶯 嶺高き人もかよはずうぐひすのあきのみくらま小松原かき  
 夜舟ふて京お上りけるに  
 吳竹のふし見の夜舟夜をあけてなくうぐひすの聲さこゆる  
 京にありけるやど鶯のなかをさかりあければ  
 はる告げあゆきやしにけむ昨日までかさねあさりし鶯此鳥  
 山さとのかさねあかしく成あけり雪の下草うぐひすのこゑ



若菜 いたづらに老ぬるものいそけうを古き都の若菜ありけり

春の野の雪間のみこそをかしなれたけて何れ若菜あるべき

とりえなき我山里の思ひ出ぬるがら若菜つむおぞ有ける

かりさちて摘めば七くさ數のあれどひとつ緑は春の野邊哉

心ゆくはるのあそびの多けれど若菜つむこそ始めありけれ

雨中若菜 白河の若菜もゆらむ大日枝の山べもえまはるさめぞふる

岡若菜 はるくれが雪打はらひはしさかの巢立此岡若菜をぞつむ

若菜知時 古への人のつまねど春日野此わか菜の春もわすれざりけり

山家若菜 めでてつむ若菜ならねど山里の垣根をあさる外なかりたり

世晋がもとより文の中にたれを誘ひて住吉の遠里小野の若菜つむらんとあるに

老ぬれば若菜つむも出かねて心を此べにやるばうりなり

水邊若菜 澤水にありさつかけの老ぬとも心いもとのわか菜つみてん

雪中若菜 住吉のわか菜小松の今日ありといひ出ぬべき雪間にあし

ふる雪にまふの子日ゆうづもれて若菜小松にいふ人もなし

七十ふありける年む月七日人のもとに行くお薺をつゝみてもてゆく鶴籠のうちにて

稻荷詣 摘めし年も七くさから薺籠にいれてこそこれもきにけれ

峯ごとにたちもかくまう春霞まつやと問はいかい答へん

いつの間にあさむかれむ初午のえるしにうふの狐之けり

ある所ふて 雪あがら山の霞みて若艸のみどり踏むまで野のありにけり

夜のまにも降あましかば梅が枝にかゝれる雪を誰うわくべき

春雪 吉野山春とも知らず降る雪此まにきゆるの日數ありけり

春がすみ野も山も立ぬれば木ぐくれてのみ雪を残れる

樹陰殘雪 日影ふいとくるともきさ比良のねの雪も霞にさえにける哉

春あがらいまど霞まぬ月かげも比良の高嶺此雪もええけり

野遊 ゆく方も歸らむ方も白河の野邊のかすみにななびかれつゝ

はる霞さちあかくしを難波より見てこそまのべ大比枝の山

春日望山 遙ある南の山よろづ代をかけてさあびくはるがすみうな

山の端此まつらん程のまらねどもいる事おそき春此日の影

遅日 花さかり山ゆき野ゆき見つれども猶くれ残る春の日此うげ



山家春夕 　　か菜つむ人いみやこにいふはて、山邊さびしき鶯のこゑ  
 山家春興 　　かくばかり春おもしろき山寺ればうべも霞ぞさち隠しける  
 春山風 　　山里のわびしきものと思ふらん春の彌生を來てしとはねば  
 故郷春 　　世のうきにかもひかへざる風此音も静かにありぬ春此山里  
 海邊春夕 　　ふるさとの春もうれしと思ふらむ都此花をすてゝさぬれば  
 春雲 　　鶯此こゑもさこえ花もなしかすむばかりの海のゆふぐれ  
 春鳥 　　ふらぬ日もなや春雨のうちなれば雲ぞありある大日枝の山  
 梅 　　百鳥に我身をかへむよしもかな木間さちくぎ花もさるべく  
 君がさめ句へる梅をうぐひすのふのぐ初音にはのめかす哉  
 梅の花月のかつら此たねおらし光もいろもさかれざりけり  
 竹田よりさゆる伏見の梅を折らむ我手の長さ千尋おもがさ  
 梅の花暮を限に見てぞこし夜のま此香こそうしろめさけれ  
 夕梅 　　いろ見えばとまる心やあさからむ闇こそ梅の匂ひありけれ  
 夜梅 　　とつ汐の波のひらきにおどろけは曉ふかさうめが香をさる  
 山家梅 　　雪ふりてまご寒ければ山さとの梅のはさこにくる人もなし

山路梅花 　　はるの雨ふるともゆかむ伏見山うめの花笠ありとあそきけ  
 梅花誰家 　　主人さへさかまをしきり梅の花さきぬる宿の垣根ありけり  
 梅薰袖 　　人のごと人しわかぬば梅のはさ我そでにさへ句ひぬるかな  
 山がつがせばさ袖にぞあまりける梅此下かぜおろる夜の月  
 挿頭梅 　　いろもなき我くる髪やおふらんかさしの梅お春風ぞふく  
 梅薰風 　　色かへぬ常磐の山此まつ風も梅のおやひにかすむころうち  
 故郷のまづが垣ねのいぶせきに似るべくもあらぬ梅此下風  
 野も山も梅のさかりに成ぬらしそこともえらぬ風を薫れる  
 かくれても朝戸あやあば梅の花おやへる風やよそお過なん  
 鶯のこゑをさるべにをりしかば梅おなかさるもありにける哉  
 折梅 　　うぐひすも木傳ひえらぬ片岡のうめの初花をりてきにけり  
 鄰家梅 　　人とへばあるじがやあて見するうち隣此梅此花のさかりを  
 中垣此隣のうめやささぬらむちかくきこゆるうぐひすの聲  
 梅落衣 　　よそめにいさもこそあらぬ梅の花袂にうけて雪とさるかな  
 梅久馥 　　日をふれば色こそ移れ梅此花ちり來る程を香いまさりける



梅 移 水 花の色は水のこゝろにかよふらし移れる梅の影としもあき  
 早き瀬に影さしとめて咲く梅の底のさいれに香や移るらむ  
 夜風告梅 ねやさむきすさまじ風といとひしも梅此句に成ふけるうさ  
 家梅始開 大空のかすみかすまを梅の花さかむその日をわが春にせむ  
 あるじうらさもこそ世の後れけめ今朝より句ふ我宿の梅  
 若木の梅 我爲にみやはむものとおもひきや植し二葉の梅のはつはあ  
 梅香何方 風のまな梅のおやひに成ぬれば中々はあゝのまるともあし  
 林氏梢の外と銘したる梅  
 梅のはあ梢の外もみふらむはやしにまげさうぐひすの聲  
 梅やしきといふ所あり

柳 柳 浅みどり今朝そめあげし心地して露もかきかぬ青柳此いと  
 朝 柳 浅みどり今朝そめあげし心地して露もかきかぬ青柳此いと  
 雨中 柳 風まじりふりくる雨も青柳のいとぬれても亂れけるかな  
 水邊 柳 ゆくものいとまらぬ物を川水のながれふかゝる青柳のいと

遠村 柳 梅が香をさそひていふし春風に遠さとやあざいま靡く見ゆ  
 行路 柳 道すがらいさゝ小川の隔つれば折ら走來にけり青やぎ此糸  
 立よらぬ人こそあけれ青柳此いと心をつくけうぐひすの聲  
 青柳のかげふむ道の遠ければ鳴きこそつゞけうぐひすの聲  
 門柳 春久 はるを経て老せぬ門此あをやぎのいく世緑の髪をさるらむ  
 柳絲 綠新 年をへてわが黒髪のかはれどもみどりにかへる青柳のいと  
 青柳 風靜 春の日は長きをかのが姿ふてかぜをこゝろの青やぎ此いと  
 柳間 黃鳥路 うぐひす此木傳ひわたる影されば河そひ柳あさみどりせり  
 丸山正阿彌みて小原某が作りたる風管といふもの尺八さきせんに合せたるをさく  
 唐土の鳥のこゑをも青やぎのいとまらべにかくる春かな  
 友ある徳愛備後の國に下らむとしける頃おのがあさり土筆多く生るよし聞てそれえて道  
 すから物せんものより珍らかあるべしといふにいかで贈らむと思ふ折しも大道寺忠が  
 さたりしをやがてうながし出て三人四人が摘ためるをか此忠にあつらへて遣はまるとて  
 思ふどち君に心をつくくし思ひわりおのあへものになせよ  
 早 藤 道のべ此小松がくれの初わらび後れてわたる我あそいどれ



岡 早 蕨

さ蕨のうへもえけりおもりていあらぬ春の心ありけり  
いつふてもどらむと思ひし我岡の蕨のいさくたけおける哉

若 草

立かへる波おも似たるさ蕨のなきさ此岡におふるなるべし  
打靡く春べにちればいそれりまふる野の草も若かへりつゝ

野 若 草

若草此もゆるを見ればさえがての雪の下おも春の來おけり  
わか草此ひとつ縁おありはてゝ野邊の小松もわかぬおる哉

初 春 待 花

白雪のまぶ消れおる枝されば花のさかりいはるけかりけり  
はるかにも嵐の嶺ぞかすむなる麓のさくらいつらさくらむ

雨 中 待 花

春來ればまゝぬ人なき櫻花まつたがさめにさかむとすらむ  
分まらぬ山のねくまでゆくものゝ花まつおる此心ありけり

山 寒 花 遲

いつしかと花まつころ此春雨の心おまみてうれしかりけり  
山さくらかななら老今日や咲いでむ雨の絶間のはる風をよく

山 花 未 開

春寒さよし野の奥を誰しかもはさのどころとささめ置けむ  
老ぬれば春のおくろも長からでさはいそがるゝ山さくら哉

花 始 開

櫻狩かくのさくらのさかぬまお瀧めぐりするみよしのゝ山  
あまりおも嬉しかるべきこゝろより咲さへをしき山櫻かな

山 花 始 開

ま吉野の遠山さくら咲にけりかすみのおくにかゝるまら雲  
ゑひもさめ目も又さめておりにけり嵐の山のはなの下ぶし

朝 花

夕つく日花に心やとまるらむおすゑおのみも此おる影うさ  
暮ぬより月にちりゆく白妙此花のかけにひよるひるもなし

霞 中 花

關といへばあやなき物と思ひけり花を此として暮ける物を  
よそながらみるをうしとや櫻ばあ山の霞此うちさくらむ

遠 山 花

世をいどひ霞かくれてさく花の心もまらぬうぐひすのこゑ  
さやかにみみるべき物を春がすみたさびく時に花の咲らむ

深 山 花

足曳の遠山さくらかすめどもそれと見えておあふいろ哉  
まら雲の八重にかさなる峯こえて只一重なる花をみるかな

故 郷 花

人ごとにまばしどいむる關もりのあふ坂山のさくら也けり  
花おのみまかせて出しふるさとの春來る毎に戀しかりけり

花 盛 開

山おこそはなの盛いあるものを心のそらにあるぞあやしき



深夜花 有明の月のひかりも花の色も只わがさめにふやふ夜半かな  
 雨後花 春雨此あどいあらしの山さくら色も匂ひもどまらざりけり  
 閑中花 ともねする妻ふも忘れを起いでて在明の月に花をまゐるかな  
 花下送日 櫻咲く春の山邊にあくがれて家さへうとくありにけるうさ  
 花満山 かもやえずさぎゆくものい山櫻ささちる程の日數ありけり  
 花 山さくら咲かぬ梢もなかりけり先いつくより分れば不らむ  
 翫花 をとつ日も昨日も今日も菅の根の永き日くらし花をまゐる哉  
 見花 珍らしきいろならなくに櫻花見あきてちらす春あかりけり  
 獨見花 山さくら鳥もねぐらに歸りけり我花おしてひとりおそそめ  
 遠見花 れのれのみ八重とや花の思ふらひ日を重ねても見お來し物を  
 惜花 かつて世にまたがふ色も見えぬ哉我のみをしと思ふ花か  
 河上夕花 菅の根此あがき春日のゆふは川くれてもみゆる花のいろ哉  
 杜花 かのまま此杜のさくら木春くれれば花の便りに花ぞどはる  
 遠尋花 花をのみ思ひいるふいやどなくて歸る山路の遠くもある哉  
 静見花 只ひとり心をすまき山水のはさのかけさへふどりありけり

岡上花 都人むれてぞあそぶはるのいま日もあが岡の花のまたかか  
 瀧邊花 鈴鹿川八十瀬の瀧のさそへどもちらむとせぬ花さかり哉  
 花下友 名もまらず所もさかきあふやされ今年も同じ花かけあして  
 橋下花 ささついくはさ此盛を浪と見てわたしやそめし嶺のかけ橋  
 花浮澗水 山にある心もちりてさくら花水のたよりにあがれいつらむ  
 落花 蜘蛛のいに散て懸れる花みればはかなく留る春もありけり  
 月前落花 櫻花あめにまじりてちる時のまぞれふりくる心地こそすれ  
 残花少 われやたれ所やいつこそさくらちるおぼろ月夜に心まどひぬ  
 小橋の三昧のあさりに花見にゆきて人のいと多くつどへるをまて  
 長閑なるけふの花見のひとまといづれ先づつ煙あるらむ  
 いとはやも散おたる哉さくら花わかぬ心うつろはさくに  
 寄花言志 あすまらぬ我身此うへおちる花を常ある色と思ふべしや  
 落花滿庭 高砂のをのへはくもと見し花のけふ我宿のゆきとこそふれ  
 曉のやみ此まぎれにちる花のつもれば見ゆる庭のおもかな



花こそぬさと 暮てゆく春のまをるしをみここの山花こそぬさとちり亂れられ  
普賢象といふさくら

み佛の乗てますてふ花をぶにうき世の風のゆるさやけり  
雪月亭といふ所あて花を見て  
人とへバ月雪と此みこたへつゝ花をばはなにまかす宿かな

尾道ある人京吉野此花見めぐらんとての有りたるに  
いそがせバ花の盛やまぎなまし春此こゝろに思ひゆるぶか

中川自休が望南亭の花見にゆきて大人の留まり給ひお此まの歸りぬ明日わした人つうは  
すどていひそへたる  
散る花のひまごに見せて限なくといまる君を今日歸さるん

木屋町の櫻より望みて  
百敷のみやこの春をきて見れば花あらでしもおもしろき哉

双林寺西行庵にて  
來てこれバその二月の花ちりて青葉にありぬやまでらの庭

日傘の上に花のちりけるに

色のみやまがふと思へバ櫻ば傘にあたるも雪おぞ有る

宇治人お誘はれて宇治にゆき觀瀾亭に宿る川づら離宮此あより平等院のかたすべて盛ん

吹ふるす宇治の山風さえく〜ていよ〜雪とまがふ花うさ

あよひ波の音さうし

宇治橋の中此ひと間のはあさねど今宵の夢を通はざりける

足曳の山とやから近からず見るに程よき宇治のはしもと

白河ふて 岩はさる隼のひいきに花ちりて青葉おありぬまらかはの奥

去年此九月のはじめ高麗橋ある家に移りまをけるが壺此内お物もなく長春此一本見

えさるをやがて名にかたてそ此亭とよびそめたるに此春そ此花うを紅に匂ひ出るなつ

かしからずしもあらせ

世の中此春こそくれめ我やどの花のさかり久しかるべき

本宮お詣でまつりの來るを待ついとあそし

人のみあさちやすらひの花祭まつやど遠しひとねむりせむ

森の宮のあふりに櫻を多く植られさる年

今年よりさくらをもちの宮なれば神の心よはかにゆるすな



友人の江戸にゆくに

東路のはるの旅ぶちまづこえん花のさかりにあふさか此山  
ある年二月廿七日朝とく起て朝け物するやど京より田代藤田此二人來りていま吉野の花  
とむとて行くかりといふいと羨しければとみに旅よそひして共にゆく余りにどりあへぬ  
すいる心をかへりて

似げもなき老のすさみぞ耻かしき身を忘るゝ花ふぞ有ける  
芳野ある如意輪寺の櫻のゆきて見れば墓の上にあり

古塚のまゐるし此さくらまゐるしどの誰うわくらむと吉野の山  
奈良にやどりける夜軒近く花あり

陰にねし夢此うちにもちらぬこそまことに花の盛ありけれ  
元隆が北野の家ふて終日花をまて

此宿の花をまてて、かへらめや我を見すて、花のちるども  
あらし山にまかりて

此こりたる月此あやひもさく花も同じ色あるあらし山かな  
同じ時久敬あふ

嵐山花のみならずうれしきいとほき友あもあへるなりけり  
同じく儒者にあふ  
花よりも花ある君が唐おしき立わかれまくをしき今日うか  
彌生廿日牡丹を贈りたる人に

かぞふれば今日ぞまことの廿日草うべこそ花の盛なりけれ

春 雨 稻荷山杉のうは葉の霜がれをみどりにかへすはる雨どふる  
青柳に露を此こしてぬば玉の夜の間の雨の晴れあたるかな

はる雨のあふ、かなりし轉寐にさえはてけりかねやの埋火  
ふりふらず雨の心にまかせなむ花まぢをしむ程のまぎさり

田家春雨 董さく田中のさとのはるさめに霞ばかりぞさちわたりける  
春夜雨静 月かげゆくもりもはてぬ臙夜ふ小雨ふりさぬ志賀此山おえ

渡 春 雨 青柳に舟のつあきてわたし守かへりにけりな春さめのころ  
森熊夫がもとよりよびにささり至りてそれ正澄をりあるじと二人あなりて語らひをる

間に暮ちかうなりて雨に成ぬ夕春雨といふ題を出して  
まづかにと思ひよりたる夕ぐれにふる春さめい心ありけり



岡 雉 梅の皆々ふかざりにやちりぬらむ風さへそひて春雨ぞふる  
なくきいす聲もけおげと聞ゆ之此なる朝日の岡でほおして  
朝日さす松のうは葉の霜きえてきいさきくなり山ぎはの道  
春 駒 春來ればとりとめがさく成にけり心のおまも駒のこゝろも  
雲 雀 大空もさながらうつる淺澤のみづのそここにてさくひぼり哉  
世の中のかくこそありけれ揚雲雀落る時にの聲もさあえを  
淺ち原えめさせりとも見えさくにちもまどはぬ夕雲雀哉  
夕 雲 雀 大ぞらに残る光をさのみつゝくるゝもえらでなく雲雀うさ  
河 蛙 大井川かはづの聲のにふかき底まで花のかげや見ゆらむ  
加茂川の河瀬の蛙さ此ふもふささちにけり春さけぬとか  
をか崎此里の田づらにあらねどもよるの蛙此聲のみぞする  
夕 蛙 汁谷をゆふこえいでて山科の岩田のかはづこゑをさくかな  
蛙 聲 幽 旅人の伏見のゆめにかよふなり竹田此かはづあかつきの聲  
名所春曙 是る霞たなびきあけて葛城の高ねふにふあさづく日かな  
閑中春曙 朝いすど人もおこさぬえは此戸に曙つぐるうぐひすのこゑ

春 月 みか人の心の空のおぼる夜をまことの月のおはれどやまむ  
おぼるおも月のかすみてかゝらずバ春ともえらじ我宿の松  
春 曉 月 夜もすがら花のおをひにかすまれて傾く月も入がてにする  
夕 春 月 日くるれば朧月夜となりにけりいづれのひまに花の見捨む  
河上春月 おぼる夜とつきも霞みて賀茂川の水さむからせなれる頃哉  
湊 春 月 かまきてや月のとふねもとまるらむ由良の湊の春の夕ぐれ  
故郷春月 さらでぶに物なつかしき故郷をおぼる月夜にとひまつる哉  
旅宿春月 いかおせむむ古里に行く月のかげぶにえを霞む春の夜  
今年二月十三日父此三十三年の忌にあたりて心ばかり此作善ことゆゑなくつとめ終りた  
るに十四日の夜ふりて月いとさやかなる昔北村にかくりて深く柩おろしする今土とりか  
けて埋むとする折しも殊にさやけき月の柩のうへ白う照りさるが條に残りて年毎にささ  
らぎに月のさやかなる折々えのぼれさぬるに今宵又其けしきされば包かねて獨ぢちたる  
ささらぎ此今宵此月にくもらむ昔此影と見ればかなしき  
歸 雁 よの中をかりとれ我も思へども歸るとこよの國なかりけり  
春 曙 雁 降つみし夜のまの雪を花とて今朝しも雁此思ひうつらむ



晴天歸雁 いづくか宿のかるらひ雁ぐねの歸る空の雲だふもなし  
 浦歸雁 大淀のうらさちはあれ行く雁のつばさにかゝる沖つまら浪  
 歸雁契秋 老が身の待えむやどのまらねども秋と契りて雁のいふたり  
 燕 來 我宿にひれて燕の歸り來ぬいづれう去年の巢ぶちあるらむ  
 簾外 燕 つばくらめ歸る軒端の古簾やれのはつともかへじと思ふ  
 苗代 い申さてまめ曳はへて住の江のみとしろ小田に種おろすらし  
 山川の苗代水にせさいれてはるのあがれぞすくなかりける  
 賤のをが今朝せき入れし苗代此みづにはやくもなく蛙かな  
 夕 桃 白妙のもゝ此木末おをどめ子ぐ眉こそおへ三日月のうげ  
 彌生のはじめ東野の桃をきて  
 三千年のどまれかくまれ桃此花もゝふてたりぬ人の世の中  
 はるかなる野にみちどせの桃の花もゝどの誰か數へ初けむ  
 あふがもとよりいと珍らしき椿とて贈りたるに  
 淵にすむ龍のおぎとの玉椿えがたき茨えて今日見つるうあ  
 董 菜 さちかへり我子ゐてこむ片岡の澤邊のすみれ今さかりあり

むらさき此帯ひとすぢとまゆるかお道の長手にさける董の  
 さや姫此そめ此こしふる白董いろあるよりも珍らしきうあ  
 朝 董 菜 朝露をためふる野邊の壺すみれつみ入る袖のぬれにける哉  
 田舎めて董を 董咲く野べの都にかはらねどつひ人しもぞいろなかりける  
 遊 糸 さや姫の霞のころもぬふらめど猶あまりてやあそぶ糸ゆふ  
 天王寺の東野にて

咲わたす春此すゝ菜のはてもとむ野末の霞ひまあらせてよ  
 うら江ひて をとめ子が裾のうらえの杜若いろの深くもとえにけるかな  
 熊夫が許より杜若にそへて我身にのかはぬ色なる杜若君が袂にすらむと思ふと有しに  
 身におはぬ色としきけば垣つばさ猶隔てある心地おそすれ  
 藤 千代へふる松のまづ枝をあまりきて岩やにかゝる藤浪の花  
 少女子が其姿といなけれどもおびくうれしふちなみ此花  
 名 所 藤 松が枝に藤ささかゝるあらし山花より此ちの春のありけり  
 池 上 藤 吹く風に池のうき草かたよりてなびく梢のふぢのかげまゆ  
 藤のはなささかゝらまば霞しく春の池のいさみあからまし



雨中藤 花おもき藤はまなひ雨ふれば松さへたわむ心地こそすれ  
藤掛松 年たかき松の位をいつこえてこむらさきなる藤なみのはさ  
さしの藤波 いろのみ深くまゆれど立かへる音こそなけれ岸はふち浪  
山べに藤のちれるを見て

欸 冬 藤の花あまりにさかく咲ぬればちりて後こそ人の知りけれ  
おつかな八重う二重う今年よりさかむとすなる山吹の花

欸 冬 君が見ぬ一夜はやどお山ぶきの花ちりがさ成にけるかな  
され故につゆけかるらむまら川の垣ねにさける山ぶきの花

河 欸 冬 あさつゆはちからをかりて靡さけり花かろげなる一重山吹  
山河にちりて流るゝ山ぶきのはさこそ春はかざりなりけれ

雨中欸 冬 少女子が手にをりもさる山吹の花もまどいに春さめぞふる  
まろ金にまじる黄金と見ゆる哉たきついはねの山吹のはさ

春 旅 たび人の心も春になりはてなくさのまくらも花はまどぶし  
暮てゆく春にやいとやかくれおむ汐まつといひて確おるさば  
旅泊暮春 暮てゆく春を追手は風ふかば今宵ばかりの船がうりすな  
くれて行く春を追手は風ふかば今宵ばかりの船がうりすな

三月盡夕 山寺のものとも春はなけれども入相の鐘ぞかざりおるける  
閏三月盡の心を  
あまよりありと思ふ心のおこたりに早くも春のくれてくる哉  
花もみな夏の草木にささかへて今年も春のなごりごになし

夏歌

首 夏 夏來れば豊浦のてらの榎葉井もみどり此かげと成にける哉  
首 夏 朝 うの花はさく月さちのあしたより大宮人もまらがさねせり

首 夏 風 まど咲かぬうの花垣に風ふけば雪かもよやま心地こそすれ  
杜 首 夏 郭公いまどなかねと津比國は生田の杜のまげりあひにけり  
白かしの古葉のちて若葉のみ茂れるもりの陰のすいしさ

眞如堂の稻荷おまうでて  
廣前のわかうへるでのあをおぎて神の心もさぞあすいしさ

新 樹 若葉さす夏ふしあれはかく山の木は下かげを戀しかりける  
夏山のかげをうつして行く水いと緑ぞいるまさりける







郭公 葵草かざをを見ればやとゝぎを初音まゐるゝ時の來にけり  
 神山此外ふいぬ葵ぐささうなもまゐるきかざしなりなり  
 郭公はとゝぎす今の時なり卯花のかゝる程ふど去年もきとしう  
 郭公あくはつ聲のあかりせばいつまで春はこゝろならまし  
 まつ人もあるらむものを郭公おもひもかけぬ宿になくかな  
 郭公なく音さへこそかくれけれ巢立の鷺のこゑのまげみに  
 時鳥夜おゑさやかに鳴くときに見ゆやと空をまぬ人ぞなき  
 首夏郭公 花を見し春此名どり此はてあきにやま郭公はつねはやあけ  
 待郭公 わが宿此梢になれはとゝぎすうはの空ある初ねもらすな  
 待聞郭公 まちまゐる心うらおそ時鳥そらふあく音もうれしあるらめ  
 聞郭公 宿ちかくきてもなかきむ郭公天つそらねいさくかひもなし  
 寐覺郭公 はとゝぎす夢どうつゝ此中空に鳴つる聲いそれうあらぬう  
 郭公 遍 郭公おはかる里に來てまれば鳴かぬところぞ戀しかりける  
 郭公 頻 ほとゝぎすとぶもとまるも影見えて我山の井此底も鳴なり  
 郭公 時鳥まつとどろふいこゑもせで雨よりまげき山のねくかき

郭公 幽 みわこえて鳴やしつらむ郭公それといさけどさす方もなし  
 平野の郷ある可直が文此ついでに卯月十四日の夜子規きゝしといひおゑまゐる返り事に  
 遠郭公 此郷にいまぶきさきぬ郭公さゝつとさくもはつ音なりけり  
 近郭公 かつらぎや高間の山此はとゝぎを雲井はるかに聲ぞ聞ゆる  
 夕郭公 心あて此雲のあさりのこゑもせでうしろにあゆる郭公かき  
 暮わたるそらにあらざれば池みづにかげも見ゆべくさく郭公  
 三日月の影のかくるゝ梢よりさやかになるほどゝぎす哉  
 月前郭公 月影と山をばいでてほどゝぎは空さやかおも鳴わたるうさ  
 郭公 一聲 あひあひひてねさめしてけり子規さゝ一聲のあかつきの空  
 郭公 二聲 郭公此ちの一こゑなかりせば宵のはつ音もまがひはてまし  
 人傳郭公 なかゝに何の人傳はとゝぎすわが聞く聲を初音と思はむ  
 杜郭公 我門の杜の木末にはとゝぎすよるゝあきつ時もたがへず  
 關郭公 あふ坂の小關をこえて郭公なくはつこゑをわれどきゝつる  
 郭公 歸山 橋もいまいちりぬとほどゝぎを山お歸りてなくおゑのする  
 聲さこゑさきりし頃



五月雨此空に來鳴しやとゞまを行方もまらむ夏さけにけり  
五月此末夜々郭公此あくといふを一度もえさかざりしにゐるあした程ちかき梢に蟬のあ  
くといふ又聞えさせさてこそ耳此業ありけりとおそくも思ひ知りて

老ぬればみな人傳にきこゆなり山はとゞまは蟬のもろこゑ  
夏山の木の葉此かきぬらねども茂くきこゆる蟬のおゑ哉  
樹陰 蟬 なく蟬のこゑのまげくもきこゆるの春見し花の梢なりたり  
馬上聞蟬 駒どめてすまむと思ふ松かげにかねてきこゆる蟬の聲哉  
風樹鳴蟬咽 みな月の照る日の岡此松かぜの蟬のねながら響くなりけり  
菖 蒲 池水の濁にまぬぬあやめ草ひくやがてあもかさしてしがあ  
露ふかきつる冬の池此菖蒲草葉さきよりこそ玉のちりはれ  
刈 菖 蒲 いま更に何をあやめどかまわけむ五月のやみの大くらの池  
池朝菖蒲 打むれて池のあやめをひく人の衣手かへしあさかぜぞふく  
菖 蒲 露 殊さらに五月此玉をぬく人のあやめの露をまらぬなりけり  
窓 菖 蒲 五月くと菖蒲かりふさあづまやの軒此まのぶもわかぬ頃哉  
あづまやの軒にあまれるあやめ草永きよかけて誰う引けむ

五月五日旅にありて

今日のかもかざり粽に菖蒲草とりそへもちてうなる子ぐ道  
もまゝに通ふらむそれを思へば其粽のゆひめあひぶさく  
其あやめのねれましかかるいざ歸りてむ

端午 興 五月雨此ふる江にひけるあやめ草露をも玉どかくる今日哉  
長 命 縷 あやめ草ぬくや五月此玉の緒の長きためしを君にこそ見め  
早 苗 今朝うゑし門田此苗あつゆ此なり夕日がくれに成にたる哉  
さみざれのふるを待てぞ足曳此山のをか田の植わたりしける  
夏山のこだまも共にうたふなりさ苗とる田や谷間あるらむ  
連日早苗 昨日まで我大君此御田うゑて今日よりおのがさ苗とるなり  
早 苗 多 来て見れば家あひ人もなかりけり野田も山田もさ苗とる頃  
五月廿八日年毎に住吉御田植なりかきらす雨ふる

天の水せきこそくだせ住吉此まとしろ小田此さ苗とる日の  
鵜 河 世の中をう河の籜あがれてもさえぬ我身ぞつれあかりける  
一つ手に數多此鵜網まかせけりなごう思ひの結不ほるらむ



連夜照射 五月雨此木のまかいらの影もさき後のやみこそ悲しかりなれ  
五月 雨 ふらぬ日も又おほけれど大空に雲こそたえぬ五月雨のころ  
ささぎまの雲のうちふて此月此月の有あけに成おけるうさ  
五月雨のくも此晴間此月かげの見ぬものゝこと珍らしき哉  
橋立のくら橋山此さみだれに此ぼればくだるほどゝぎす哉

山五月雨 打はへて長柄の郷のさみだれに膽駒の山の見ゆる日もなし

河五月雨 さみだれに渡りいたえぬ打いでて聲だおかはせ河づらの里

濱五月雨 淡路島見ぬ日いくかになりぬらむおも此ゝ濱此五月雨此頃

五月雨晴 蟬さきてはれぬと思へば五月雨の雲のなごりの雨を降くる

五月雨晴ゆきて夕日さゝめにさしたる垣根わたり若竹此高からぬが打靡さるいとよし

又ある夜曉に 朝さく空もくもらでふる雨の竹の若葉のまづくありや

梅 雨 葉がくれて同じみどりの梅の實も此五月雨に色つきにけり

盧 橘 曉の月のひかりにさちばさかきねこひしく成にけるかな

曉更盧橘 草も木も色かくれゆくぬば玉のやみお香をます宿のさち花  
ねやのうちにかくこそ梅も匂ひしう花橘のあかつきのかぜ

盧橘薰袖 衣手に花さちばさの香をとめてむかしの人此心地こそすま

薩摩の太守此難波のさち奇花あり五月梅といふ五月の頃白き花咲き薫りも又梅の如  
しとぞ其所の預某うたを乞ふ

螢の かひこのなか此ほどゝぎすなくや五月の梅のはつはな  
やみにふく風のゆくへを照しても跡なきそらに飛ぶ螢うさ

聲たてゝなかぬ螢もかひぞなきもゆる思ひの影しとゆれば  
夏くれバ螢のひをぞよせにける打すてさりし宇治の網代木

いかばかり深きおもひにもゆまばや雨おも消ぬ螢なるらむ  
灯火のかげをや友とおもふらむよるのやさるの窓近くとぶ

我門のいさゝ小川の水どめてはさるとびかふ時の來にけり  
野となりし昔のやどのわすれ水おもひいでても飛ぶ螢うさ  
水上 螢 ことさらにあつめし人もある物をてらすかひなき窓の螢や  
窓前 螢 草まげき夏野の原にむすぶ庵のよるのともしハ螢なりけり  
野亭 螢 火



河 蝿 貴船川すづくほさるの昔たぐくさしよまの行方あるらむ  
澗底蝿火 谷川の流るゝふどの涼しきに岩根木がくれはさる飛ぶ見ゆ  
蝿火透籠 うれしくもまどやにわめる籠り蝿火のかげの隔つともなき

野蝿似露 蘆のや北海人の磯屋の繩すゞれ蝿まよどりまばらあるらむ  
蝿似玉 風ふけば共にみだれて夏の野の露もほさるも分れざりけり  
満慶が詠草水邊蝿を此歌あしからず

蚊遣火 行く水のたえずみがけるやどまえて蝿も玉になりける哉  
山がつゆくゆり残れる蚊遣火をやがてあさけの烟おぞたく  
夕暮にさてる蚊遣のいぶせきにままづ宿を出てこそくれ

閑居蚊火 河風にねやのさむしろはらはせて蚊遣もたかぬ宿の涼しさ  
あしよ迄くゆりあまれる蚊遣火に夜の短さもえられける哉  
日毎あひ飯もかしがぬ庵あれどおこさりがたし蚊火の烟の  
蚊やり火の烟ばかりのほそからで我山をまも人やえらむ  
守るらむ様のえらねど氷室山さくばかりぶに涼しかりたり

氷室 松がねに流れいづみの底清まはるかに千代の影ぞ見えける  
泉 避暑 岩間をも分て流るゝ水なれば手もさるばりつめさかりたり  
泉 避暑 ともし火のかげ池水にうつろひてこの大殿のはし居涼しも  
納涼 寒しとてころもどるまでなりにけり曉がた此宇治此川かぜ  
昨日まで火桶をさでしたなうらをかへしもあへず結ぶ山水  
夕納涼 すいませと賀茂の川邊に來て見まば月も出てぞ暮を待ける  
納涼風 さいちみ此比良山おろしふきおちて衣手さむし志賀の浦舟  
海邊納涼 ふ々ゆ々バ暑さの消て照る月此雪になりさる濱のまさお路  
林下納涼 水むすぶ河邊のとほしわが岡のはやしがくれに夕涼ませむ  
徑夏草 おもふとち莖つみふとし野邊の道ぶに見えを成にける哉  
夏草滋 わがうへ此うき敷えらば夏草もおのれ茂しと思はざらなむ  
夏草露 夏草にあまるを見れば短夜のつゆをまげさの猶まさりける  
翟麥 かなつかないざとやいはむ夕暮のたそがれ時此撫子此はな  
祇園此御輿あらひの夕べよりさくやすみの床なつのはさ  
ぬる人もさき床あつの花あれどあやしく露此おきにける哉



朝 霍 麥 かのが身の老もわまれてなでし子此花の盛をめぐる頃うき  
 庭 霍 麥 大和とも唐ともけさのまら露のかきなびけさる霍麥のはな  
 愛 霍 麥 かりたちて拂はぬ庭此嬉しきうゑぬに咲しなでしおの花  
 濱 岸の初て咲るを人にくるとて  
 世中にくれさるをばいうにせむかのが垣根此初花ぞこれ

水 鶏 一筋のちがれをとめて我宿のかさねがくれに水鶏なくなり  
 人の世を驚ろかしてやさくくらむ空しき山にすめる水鶏の

曉 水 鶏 綱手引く夜舟の此ぼりはてにけり影三島江に水鶏さくなり  
 はとゝぎすまちて寐ぬよの曉に遠き水鶏のこゑをさくかな  
 夕べくたゝく水鶏にはかられて君をもそれと思ひける哉

薄暮水鶏 月影の蘆間さやかにてらせども水鶏の見えず聲ばかりして  
 月 前水鶏 月影の雪ひかりの霜と照る月をたれかの夏のも此とまらむ  
 夏 月 暑しとてさゝすねにける閨の戸をとほでも月の入にける哉  
 はとゝぎま一聲さきし雲間より見えてかくれし在わけの月

夏 月 涼 空にかきて見るも涼しき月影を清水にさへも宿しつるかな  
 ふけてのち窓にさしさる月かげの夏のものとも思はれぬ哉

砂 月 涼 明やすき月のひかり此いかなれば濱此真砂の敷をえすらむ  
 浦 夏 月 蟬此羽のよる此衣にすきとる香取の浦のちつ此夜此つき  
 山 家 夏 月 もりかねし木の間ながらにわけにけり山下庵此夏此よ此月

夏 月 透 竹 夕附日まぶくれ竹此葉分より影こそあやへあつ此夜のつき  
 くれ竹の世に隠れしいやりまで葉分の月此影のとひけり  
 大ぞらに見るかげよりも涼しき竹の葉さしの夏此夜此月

夏 天 象 ひさ方此天の河原もあらはれて門すゝみする時の來にけり  
 夕立の一むら雲のふりゆけどる日此影のくもりだふせせ  
 賤のをが菊て束ぬる麻此葉にゆふとりまて誰うそがむ

夏 人 事 田草ひく賤がうへも見ゆる哉水にいたりてももゆる世の中  
 夕立の雲のはれ間にあらはれて山のは遠きあつの日此かげ  
 郭公なみぶをくもになきさめておのが五月の雨とふるらむ

夏 日 長 五月雨此なごりの雲此さちかへり夕だつ空と成にけるうき  
 夏 雲 五月雨此なごりの雲此さちかへり夕だつ空と成にけるうき



夏 曉 雲 大ぞらの昨日もけふもみどりあてかささる雲此峯の動かず  
よひの間此月にかゝりし浮雲のどころもさらであくる短夜  
竹亭夏來 故郷此まがきの竹のゆきをれもさながら夏になりける哉  
竹亭陰合偏宜夏

夏 河 鳥 吹く風も葉分のみこそ涼しけれ竹のかかあて夏にくらさむ  
みそぎする夏此川瀬にうつ鶯の幣かとのみぞ誤またれける

夏 瀧 石上ふる川よどの五月雨にさぎ此みの毛もかまなく日ぞあき  
う此は赤菰誠此浪と見せむとや隠れて水のむせぶあるらむ

夏 鐘 山寺此鐘のむつとぞひくなるまつともなしや夏此夜の夢  
松陰の久しき代より住吉此みとしる小田の今日ぞうゝある

夏 神 祇 ころなき草木も神の祭りけりまらゆふかけて咲るう此花  
祇園會のつるめそと

蓮 露 みとらしの梓此弓此つるめその神此まゆきを引てこそゆけ  
蓮此花遠くまゐるこそめでさけれ上に此ありて何あかひせむ  
わが宿の池のはちすぞまばむなる日の夕影に成にけらしな

蓮 露 たづぬれば何れこゝろもまら露此蓮にたきて玉となるらむ  
白がねをたゝらにかけし心地してとけこそおつれ蓮葉の露

蓮 満 池 蓮葉のふのれまとうに茂りあひて池あつ月も宿さざりけり  
ふくべとも又ひさごとも名をかへて色々にある夕がほの花

夕 顔 山里此垣根の道をゆきかへりひとりぞ見つるゆふ顔のはさ  
干瓢かけたるを見て

夕 顔 夕がや此花のほとより白ければ其實かけやすいろも雪なり  
山をゆきける時

夕 立 うの花やおひかはるらむ夏山の大かた花のまろくもある哉  
ゆふ立此雨のふりさぬ眞背やすたみ此の鳥や今さむぐらむ  
はげしくも降る夕立ちかりそめの草の庵のうかぶばかりに

夕 立 夕立此雲はれわたる空見ればふるやどよりも涼しかりけり  
あふま路の夕立すらし大ひえの山よりをちに雲たてり見ゆ

遠 夕 立 夕立のひかりをかざすかぶと山雲のはさてのゆづるはが嶽  
住の江の松のむら立かきくもり遠里小野にゆふだちぞふる



嶺 夕 立 いなま山とつの高嶺に雲たちて夕だちそゝく深くさ此さと  
 野 夕 立 夏の野此草葉此うへも見えぬまでふりきやひさる夕立の雨  
 湊 夕 立 こぞいれて苦引おろふひまもなしをかの湊此ゆふだち此雨  
 晩 夏 鳴く蟬の聲もかはりて奥山のはやくも秋此けしきなるかな  
 荒 和 穠 戀せむとおもふ汀にみそぎして世をわき風もさちしけふ哉  
 杜 夏 穠 かり初此麻やちがやに撫つけて被へはつべき戀ならさくに  
 罪とがをさいせ此もり此夕被あらそふ程もまゝしかりけり  
 みそぎする河瀬いとほし我門此杜のまたかせ吹はらへせよ  
 河 夏 穠 さらでだにさつこと早き年波を川此せにさへはらへつる哉  
 六月晦日の日いさく風ふさけるに庭を見て  
 吹く風にみどり浪よれ草も木もわれ河と見て夏はらへせむ  
 同じ日住吉穠の神事につけて  
 罪とがわはさき海此ふかくとも底まではらへ底つゝの神  
 今日こよひ夏と秋とのさうひまではらへぞわさる住吉此神

大和川神のみ輿に波かけてわさるや今日此はらへなるらむ

秋 歌

立 秋 秋風のたつ日になりぬわが宿の軒のまた萩えるや知らずや  
 初 秋 天 秋風にたきびさかはる白雲此ひまこそ見ゆれ三日月のかけ  
 初 秋 雲 けさよりの秋にかゝりて白雲のさびくも涼しかつらきの山  
 夕立の峯もくづれて秋かぜにさゝいひそめし雲のいろかな  
 初 秋 朝 秋風此さつ此市おそ涼しき昨日を今日おかふる此さうの  
 めづらしく先たが袖にかへるらむ都大路のあきののはつかぜ  
 衣手にすゝしといひし秋かぜをいとふやどおも成にける哉  
 初 秋 山 すみわさる秋此空にあらはれて雲もかゝらぬ大比枝の山  
 初 秋 露 朝まだき草の葉末をまざりせば露ばかりなる秋萩えらめや  
 今朝まれば岡のさゝ原つゆまげし此道よりや秋のきにけむ  
 袂よりぬるゝを見ればまら露の秋のはじめの我身なりけり  
 いろかはる下葉よりあそちりあまき櫻此宮此あき此はつ風

常座の宮に秋風



早涼 到 みそぎせし昨日此けさの河社ぬれてもあびく麻のゆふしで  
 日くるれば衣とるまでありにけり一村雨此すぎしばかりに  
 閑居秋風 我のみやうきにたへぬと思ひけり世を秋風も山おこそふけ  
 閑庭秋來 人とはぬ宿み先くる秋おれは悲しきものいとひしもせず  
 待 七 夕 さなばさの思ふ心をねふさて、秋まつむし此草がくれなく  
 彦星のつまつ待つよひの秋風の老が身にさへさゝあらぬかな  
 七 夕 契 落てよし石となるともかはらじとかさく契りし星合れそら  
 七 夕 別 たなばさ此今朝の別此涙おもかまともや露此置きまざるらむ  
 七 夕 後朝 天つひれふるきによりて雲となり雨となりゆく星合のそら  
 秋の露おかぬあしたのあけれどもまさるや星の涙あるらむ  
 七 夕 雲 天此川うきさる雲此ちぎりより涙此あめのふらぬ日ぞなき  
 かりすて、逢ひやしつらむ天の川其はさ雲ぞ風にみだるゝ  
 七 夕 雨 かきくらす雲此うへなる天の川雨のふるとも水のまさらじ  
 心なく汲みたる水に天の川はしのひかり此うつりけるかき  
 七 夕 糸 夏引にいそぎひきつる片糸のけふのさむ々にあはむ爲あそ

七 夕 衣 神のまをふるとき、つる少女子のいつより星此妻と成けむ  
 七 夕 薄 松がね此一もとすゝさやにいでて招くやはしの心なるらむ  
 七 夕 鳥 白鷺此橋わさせらばあま此川あどある霜此こゝちこそせめ  
 七 夕 蛛 手向あとかけかけかけ蜘蛛の糸まをるしをたのむ契といなし  
 七 夕 馬 天のはらいもがりいそぐ彦星に鞍うちあきて駒やかさまじ  
 七 夕 硯 たび人の小硯箱をとりいでて歌やさむくるはしあひのはま  
 七 夕 船 かへらやとらたふ舟歌あゝろなしこの彦星のつまつ迎へぶね  
 此りながら我舟かして久かた此天のかはらを共おわたらむ  
 七 夕 祝 天の河常のへだて、妹とせの正しきみちをそらに知れど  
 海邊七 夕 わたつ海の底のまをるめを蒞あてて天つ星合にけふや手向む  
 磯中七 夕 道遠みたびゆき衣やれにけりたなばさつめお何をかさまし  
 七夕ある人々此歌結び判し畢りて

おもしるき人の言此葉をまかりて星の逢瀬にけふや手向む  
 乞巧奠の筆の盤涉調半呂半律秘事のよし公事根源に見えたり  
 りちもろもあうぞらにしてあふあとい二つの星此心之けり



九日此日七夕を天の河きのふといひし昨日さへきのふになりぬほし合の影  
五月雨ふりついで夏此やうにも覺えざりし年七夕としてさる方此をさへするをきて

五月雨此降ながしる天の河秋此みぎはも去られざりけり

魂 祭 ありとのみふくり迎ふるなき玉もなきこそもとの光也けれ

草 花 咲つくす秋の花野をけふ見れば去るも去らぬもわはれえけり

草 花 色々 七種此數ふもれたる菊の花をふさちかう花こそわりけれ

草 花 交色 いろく々に夜いきてえし虫のね此花にありても明る野べ哉

霧 間 草 花 山川のみぎはも見えぬあさざりに色こそあはへまら菊の花

籬 下 草 花 夕づく日さして匂ひのあけれども垣ねの小草花さきにけり

月 照 草 花 みか月のほそきひかりの鎌お似て尾花が末にかゝりける哉

雨 中 草 花 秋の野此花の亂れてうつろひぬ風さへそひて雨のふれゝ

籬 花 菅此根の長きも時のあるものを秋をひと日此朝がやのはな

籬 花 朝日かげさゝぬまがきを所としてうゑさかせる朝がほの花

籬 花 籬 朝日かげさゝぬまがきを所としてうゑさかせる朝がほの花

籬 花 籬 朝日かげさゝぬまがきを所としてうゑさかせる朝がほの花

隣 家 籬 わさがほの花のさかりのかいまみに隣まゝしく成にける哉

萩 籬 たれさけとかきあす琴ぞ萩の葉此茂り圍める海人の磯やに

萩 風 をぎの葉をうゑし年より秋風此かよふ垣ねと成にけるか

曉 萩 風 萩此葉此さゝぬおとこそ聞ゆおれ恐びお秋此風やたつらむ

夕 萩 萩の葉のさやぐ故とやいひあさむ只我からの老のねざめを

近 萩 夕附日をぎ此葉おしにかたむきて音せぬやどの秋風ぞふく

川 邊 萩 夜もすがら萩の末葉にさやがれて夢もつゝぬ聞の内哉

湊 萩 萩 秋風のかよふ河邊の萩の葉のそよぎくして穂にいでにけり

聞 萩 萩 穂にいでて招かんとてや萩此葉の袖の湊におひまげるらむ

夜 萩 似 雨 萩 秋風此ふくとも見えぬ夕ぐれにのれとそよぐ庭の萩はら

野 萩 萩 秋の夜此永さちざりの末なれや雨となりゆくをぎのうは風

萩 盛 開 小牡鹿此よたゝ鳴つる野邊これ亂れにけりお秋萩のはさ

萩 盛 開 小牡鹿此よたゝ鳴つる野邊これ亂れにけりお秋萩のはさ

萩 盛 開 小牡鹿此よたゝ鳴つる野邊これ亂れにけりお秋萩のはさ

萩 盛 開 小牡鹿此よたゝ鳴つる野邊これ亂れにけりお秋萩のはさ



故郷 萩 かりそめにうゑし垣根此萩がはち盛になりぬ人のとふまで  
 古郷の小萩が原とありはて、鹿の音からでかと思れもなし  
 をらで来て今ぞくやしき古郷のかき間より見しあき萩の花  
 雨 中 萩 はかきくて目もかゝらぬ萩萩を降靡けさる今朝此雨うち  
 萩 映 水 枯残る垣ねのみづにはかなくもさくかげ見ゆるあき萩の花  
 萩 花 浮 水 わが宿此いけのまぎはの浮草ふちりて交れる秋はぎのはか  
 薄 未 出 穂 我髪のいろもわすれて花すゝき亂れにけりとよそに見る哉  
 薄 出 穂 すゝきごにまだ穂に出ぬ秋風を聲ふさてゝも歎きつるうさ  
 薄 隨 風 秋風のかなしき野邊の篠すゝき恐びかねてやははに出ぬらむ  
 路 薄 播磨ぢの須磨此上野の花すゝき音せでさてる波かどぞさる  
 行 路 薄 夕日さす濱邊のすゝき分ゆけやがて赤穂の里も見えけり  
 道 邊に人なまねきそ花薄かのがあさごにえやいとひむ  
 おもしろき小萩まじりの薄原かさもさごめず分てあそゆけ  
 いとはれて歸るあしゝの道の邊此薄ごにこそ招かさりけれ

薄 妨 往 返 招くとてゆかむとそれバ花薄かつ靡きあひて道うくしけり  
 菫 萱 みだれたる野邊の菫萱ひきうゑて物思ふ宿の庭くさにせむ  
 野 蘭 此野邊に藤ばかりかまこそさきけらしよるゆく袖不風ぞ薫れる  
 雨 後 蘭 藤袴いろのすそおに見えつる雨を帯たるかさねありけり  
 女 郎 花 花の色にむせる粟津のをみなへし鶉やかのが物とさるらむ  
 なきまふの我とも見よと吾妹子がうゑける庭此女郎花の花  
 庭 女 郎 花 我宿にうゑし物から女郎花はあ見ぬほどぞこゝろあかるゝ  
 女 郎 花 随 風 女郎花宿のあるじやかはりけむ花どの咲けど露ぞかわらぬ  
 葛 風 つゆにふし風にもあびく女郎花みさをある物と思ひける哉  
 葛 此葉のかゝりふしより秋風のまゆる松とも成にけるかな  
 吹にけりくす葉の里の葛此葉に入幡かろしのあきのはつ風  
 ふく風にかへらざりせば葛かつら同じ梢此木の葉ならまし  
 月 こよひさやけかるべき程見えて桂の花をまづかざるなる  
 照る月の此ぼらんとする山の端のまつのこゝろの姿之けり  
 月 と日と向ふ岡へあきて見ればくるゝ境もまられざりたり



日ハ海ハ月ハ山より赤のゆふへ出るも入るもわかぬ影の赤  
 わが門の西北つりさみ此ぼりさち四方ハ晴るる月を見る哉  
 照る月此はれさるのさう大空のはてまで雲ハ似る物もなし  
 てる月の影もくもらでふる雨ハやがて桂のまづくなりけり  
 あけ此こる松の木間の月見れば老の寐覺もうれしかりたり  
 山里ハ嶺よりみね此ちかければ月見る程ぞすくなかりける  
 かさくれし昨日の雲此あともなし空のかざりハ月影ハして  
 てる月の光を棹とさすふねハあま此川ハも此ぼるべきかな  
 照る月ハ宿のなつめハ懸れども影の秋こそまがはざりたり  
 雲がくれ月ハゆけども手ハむすぶ水の底こそ濁らざりけれ  
 あはれなりぬまちふしまちはど過てまつ人もなき有明の影  
 てる月を松の陰なる岩しみづまよハる音此さやかあるか  
 未出月 山の端のはやく明ると思ひしハおそくも月の登るなりけり  
 山月初昇 立田山出くる月のかげ見ればをぐらの峯もさやけかりたり  
 皆人ハまさせくくて夕ぐれの山の端いづるつきのかけかき

曉出月 なみは人生駒の山のなかりせばいづくハ月の影をまよまし  
 ものゝふのたうまど山の下雲ハ棚びかれさる弓はりの月  
 横雲ハ棚びかれさるかひもなしいる方まらぬ弓はり此つき  
 曉月入窓 まどごしハ有明の月の影を見て夜ハあけさりと思ひける哉  
 深夜秋月 山の端をふけていでさる月影もあやゆくまでの長き夜は哉  
 夜陰月 かさぶあもうき世中ハ見えじとや空ゆく月の雲がくるらむ  
 對月待客 こぬ人を今やくとまぢをればわれかといづる山の端の月  
 雪と見て跡もやつくといとふらん今宵の月ハ待つ人此こぬ  
 殘月越關 有明の月も木の開ハなりハけり獨やこえんあふさかのせき  
 社頭月 ひさかこの天此岩戸の榊葉ハかやみをかけていづる月かけ  
 七月十五夜月此よきに  
 天ダける玉のひかりも見るべきハ今宵ハくもと秋の夜の月  
 九月三日此日 あり明のはつかに見えし影さえてまよ夕月に成ハけるか  
 江月 こもり江ハながれぬ水の秋をへていく度月の影やどまらん  
 河月 堀江川ハかしてけんみ佛のひかりもるかぶあきの夜の月



池 上 月 もみぢ葉に日をばくらしして廣澤此池の波聞此月を見るか奇  
 瀧 月 山ふかき茂き木の間をもる月のかげふもかゝる瀧のまら糸  
 海人歌月 去ら波の折かへしてもうさふ之月をるべくもあらぬ磯やふ  
 漁夫棹月 棹此歌さしたるふしのかけれども月を乗せさる海士の釣舟  
 月 似 古 照る月のかげの昔おかはらぬどあらたまりさる袖此上り奇  
 水 郷 月 昨日まで雨ふさはりし淀舟も月とともふやさしけざるらん  
 月 照 菊 月 月かげのさすらん空の見えねども籬の菊のいろぞさやけき  
 月 前 露 わすれての晝かと思ふ菊の花見ゆる今宵の月のひかりを  
 見月思故人 てる月の光ふむまぶさ露のいりなん後もさやけからさむ  
 月 前 竹 風 我その、竹を秋風ふくまゝおかくれあらはれ月ぞさやけき  
 月 前 雲 雲間もる影さおなくて明にけりさりとものま眺めし物を  
 月 前 木 は此かおも庭の梢の見ゆる哉かゝれる雲やうすくさるらん  
 月 前 草 さ夜更て露さそまげくなりぬらし草の葉ごとお月の影見ゆ

月 前 鶉 風はらふうづら此床のちりもなし露ふり草お月のやどりて  
 月 前 虫 山の端お有明の月やいでつらん垣根のむしの聲さやゐあり  
 月 前 船 こゝおしてままくやり江のうつろ舟月此爲とや繫ぎ捨けん  
 中秋此頃中村某駒が池の新宅お移りさる喜びいひ遣すとして  
 三番なる天真庵おて月を見て  
 振そゝ玉のひかりと見ゆるかな天の眞井此あきの夜の月  
 井上某が山水清音樓おて月を見て  
 山水の音さへさよき高どのおまちえて月のかげを見るか奇  
 網島おて月を待つお雲此晴ま行くほど川此面をろく成ゆく網曳する船も見ゆ  
 山崎の舟のともし火うまらぎて月のかげこそさし渡りけれ  
 あまゐろし引けどもよらぬ白玉の底おまづめる月の影なり  
 ある所の池お臨きて  
 池水此まおもがくれの先くれて月の影こそあらはれおけれ  
 八月十七日三井某がもとに文遣す事ありて此程夜々月のよかりしかと歌いあしなごうきて



其奥の 言の葉の一葉ばかりもさはるらん只おぞ月の見るべかりける  
今の香川の大人始て江戸お下り給ふ餞お東路月といふ事を人々いひあへるふ

みやこより打出の濱の月影をやがてあづまの空お見るらん  
十六日の朝とく出さる人のよへ舟の中おて雨おあひぬといふお

月おのこさはると思ひし村雨の君がうへおもかゝりける哉  
月此歌あまゝ見せける人お

月およ、曇りはてたる秋なまど君がさがめし影を見るかお  
九月十三日寶の市として人多く行く

住吉のたからの市おたつ人おかへるく、やつきを見るらん  
駒 迎 あふさう此山此秋かせ西ふけべいお、く駒の聲もきこえお

秋 夕 打わさす田づら此里此夕ぐれお我おほお出て悲しかりける  
關屋秋夕 硯さる赤間が關のゆふぐれに文字をなしてぞ雁のさおなる

鹿 小牡鹿のかさふす野邊の薄はら風をもまゝでなびさける哉  
鹿 もりかねて山田のまづやねむるらん麓おなりぬ棹鹿此こゑ  
夜 月さよそ夜のふたゆたばこが門の稻葉むおわけ鹿ぞ鳴なる

田 鹿 鹿おきて山田はふおそ出おけれ誰かお秋を去のびはつべき  
野 鹿 さお鹿此夢のうちよりむすびらん鳴つる野邊此けさ此初霜

月 前 鹿 高砂の尾上おたちておく鹿の月此ゆくへおつまやこふらん  
遠 聞 鹿 秋風や吹おくるらんとや々れど近く聞ゆるさを去かのこゑ

鹿 交草花 一もぢお妻こふまうのいろくの花お心もうつらざるらん  
咲くを見て鳴やまつらん聲さして咲やまつらん萩はらの鹿

曉 虫 長き夜も今おかざりとおく虫の聲おひひかぬ草の葉もなし  
夜 虫 秋の夜の物と思ひしむしの音も耳のつねなる老が身ぞうさ

雨 夜 虫 よもすがら鳴く虫よりも悲しきお聞く人もおさき歎なりけり  
雨 後 虫 ぬれぬともたちや聞かまし小雨ふるかすかの原此松虫の聲

月 前 虫 住よしの岸此松むし照る月のおはらぬ秋をちいとなくなり  
枕 上 虫 いろくの虫此聲さゝまどろめば千草此花ぞ夢お見えける

虫 聲 近 枕 浅茅生此野おとほけれささりくす枕の下おきてもおく哉  
虫 聲 非 一 響むしいまいとたゆむ折おこそおのがおしなる聲お聞ゆれ



虫聲何方 秋の野も道まどへどや松虫のなくなる聲此そことしもなき  
 野 虫 かすが野此虫の若菜ああらねども籠あいまてこそ奉りけれ  
 山 家 虫 よひくも虫此鳴く音我聞あれて時をもはかる山の奥かあ  
 松 虫 ときはなる名のかひあがら松虫の霜あかれ行く聲此悲しさ  
 轡 虫 秋此夜の月毛の駒のあげを見て野もせあすづく轡むしかあ  
 雁 音羽山をね此松風はやからしなきゆく雁のつらぞみざる  
 初 雁 初雁のわさる雲井のと波けれどこゑの近くも聞えけるうあ  
 雁 初 雁 秋風あ時もさへ走くる雁此こゝろあ似さる人此なきかあ  
 初 雁 初 雁 我の世あさくはくれての聞しかど猶めづらしき雁の聲うあ  
 初 雁 連 雲 去ら雲此下ゆくはどの數見えてなきこそつゞけ初雁此こゑ  
 雲 間 雁 月よりもさやけかりけり秋風あ雲間もりくるはつかりの聲  
 霧 中 雁 くも間ゆく雁のつばさあ風見えて野分だちさる秋此空うあ  
 霧 中 雁 はしだての倉橋山の朝ざりにたなびかれても雁の來あけり  
 霧 中 雁 人まればたが玉章我かけつらん霧がくれあぞ雁のなくなる

雁隨風來 あき風此かどはの山のまねこえて岩田北原あかつる雁がね  
 秋かぜあ空ゆくつらや亂るらんむちあなる初かりの聲  
 ふく風も長閑なる世の秋なればつらも亂さで雁の來あけり  
 暮 天 開 雁 みそら行く雁のつばさや去残るらん夕霧さちて村雨ぞふる  
 けさたちし江やいつこ夕ぐれのそらあ開ゆる初かり此あゑ  
 南 北 雁 はるかあもなりぬと思へば初雁の又嶺こゆる聲ぞきこゆる  
 紅 葉 もみち葉の照る陰さらせまとなして飲ぬ酒あも酔へるけふ哉  
 紅 葉 己が心そめかへせどももまぢ葉の昔の秋あ似るべくもなし  
 山 紅 葉 朝日かげ匂へるやまの秋霧の絶間に見ゆる木々此もまぢ葉  
 閑 庭 紅 葉 静あに住なす宿の庭あまばちりもいとがぬ木々のもまぢ葉  
 人とはぬやどのみざりのもまぢ葉の獨そめてや獨ちるらん  
 關 路 紅 葉 駒むかへせし日いろもなかりしあ紅葉まじりぬ關の杉村  
 松 間 紅 葉 秋きてぞ山の心のまられるまつとばかりも思ひけるかあ  
 常磐なる松此まづくのあれども紅葉の時と色づきあけり  
 杜 間 紅 葉 海ちかき生田のもり此もみち葉の一しは毎あ色ぞまされる



翫紅葉 ももち葉の色おこがれて行く舟のちり果るこそ泊なりけり  
 紅葉 浅 打よする波のまはりを時雨おてありそ此木末色づきおたり  
 又も来て見んと思へばももち葉此色此淺きい嬉しかりけり  
 尋紅葉 思ひ入る山の木末のうまけれど心をふかくそめてこそみれ  
 歸るべきまはこそなけれまはの山分入るまゝに色のまされば  
 紅葉交松 常磐なる松もさかがらももち葉お交ればあき此錦なりけり  
 紅葉如錦 むらまぐれめぐりくして小車のにしきとなれる秋此山かき  
 紅葉誰家 殊更お見えしももち葉きて見れば陰まめて住む人も在けり  
 紅葉映水 ももち葉のかけさへ深くなりおけり時雨おまさる宿此池水  
 京なる友人のもとに文やるとて  
 君が見し一木此もみち軒まぎてあふぐ陰ともなりおける哉  
 高雄此紅葉見んとて出さつわした時雨ふる  
 曇れりとかつ見おがらお出さては定なきこそたのこ也けれ  
 梅尾お詣でて せりとらば人やとがのをももち葉のちるまで待て家つとせむ  
 鳥掛松 つさかつら秋をば秋と紅葉してかゝれる松此常磐あらなん

露 深 あし曳此山下かけの淺ぢはらかわりぬうへおむすぶ露かき  
 月前露 鳥羽玉のやまも露のふくらめど月にぞ袖のぬれ増りける  
 故郷露 むりしたれおきていあけん故郷の籬の露のかわく日もなし  
 霧 世の中の人のなげきの霧なればたぬ所もあらじと思ふ  
 浅霧 朝かゝ水此うき霧うきながら流れてくぐる宇治此山もど  
 河霧 深くなる程おや秋のまらるらんたぬ日もなきうちの河霧  
 關霧 おふ坂のせきの朝ざり立おたり我道づれも見えぬばかりお  
 遠山曉霧 長き夜をなほ此こすとや大びえの横川の奥お霧此たつらん  
 山家霧 朝かゝくさつ川ざりのふかければ烟ぞわかぬ宇治の山もど  
 田家霧 丹波矢田法樂 たておさしかいしの弓も弦くちて霧此まふかき矢田此村里  
 月前霧 足引の山ふどころおふちなびき月おさはらぬうち此川ざり  
 掃衣 さらでさふうき世の中いから衣秋風おさへうさんとすらん  
 曉掃衣 いそぐらん程もまらきて初霜此あかつきおさふうつ衣かき  
 掃衣妨夢 まどろまぬ人の心のから衣うつおまよそのゆめもさめける  
 月前掃衣 衣うつひいさやそらあふよらん月此桂此つゆぞちりくる



稻 妻 ありてなきはかきくらべや朝がほの露おかよへる稻妻の影  
 田 稻 妻 いな妻いゝが妻としもなかりけり田毎お通ふ影の見ゆれば  
 秋 霜 ぬば玉此我くろかまおかりぬ間いよそおぞ見つる秋此初霜  
 秋 風 ぞ芳野の山此おくお入しかどうき身を追て秋かぜぞよく  
 秋 夜 人毎おおなじ思ひいなければも秋の夜おく増らぬいなし  
 秋 人 事 かりあげておくてばかりや残らん鹿追ふ聲のまなく聞ゆる  
 秋 旅 今ぞ知る草おも木おもおく露いを旅人此なきごなりけり  
 秋 夢 ゆきくれて草此枕をもとむれば露こそさきお宿りて有けれ  
 秋 夢 ありと見し夢のなごりの袖のうへお露もどいぬ秋此風哉  
 秋 里 鳴わさる初雁がねおさめはていむなしき空お夢いかへりぬ  
 秋 田 露さおもおかすなりぬる秋の田の稻葉此色を寂しかりける  
 秋 岳 色せおくておのささまい色づきて秋の山田も錦なりけり  
 秋 岳 ゆふだちの雲をさまりて雷此岳へまいしきあきかぜぞよく  
 秋 山 谷ふかき露此そこなる柴の戸いひるますくなき秋をふる哉

秋 池 池水の底より秋のふかければうつるもそちの影をおまれる  
 秋 海 夕附日いりぬる海のくれおるい時雨もうらぬ紅葉なりけり  
 秋 鳥 山鳩のおのさ秋といなければもおくなる聲此時おあへるかも  
 秋 獸 打むれてねぐらおかへる白鷺の羽うらにのこる秋の日の影  
 秋 照射せし五月の山おあきかかおのさあきとて心ゆるすな  
 澤 水 鴨 水かるゝ秋のさは邊の底淺まかくれかねてや鴨のたつらん  
 深 夜 鴨 月かげ此てる夜ふけても聞ゆるい面白しきが羽音なりけり  
 江 邊 鶉 難波江のあしが花ちるあき風お床さへあれてうづら鳴なり  
 霧 中 鶉 秋さりの立へてたる故郷のみかきお原おうづらなくなり  
 今宮廣田のあさりおて  
 又新清水此わさりにて  
 打わさる廣田のいな葉おまらきて我袖かへすあき此夕かぜ  
 ち里おさととゆる梢いあきまとも秋の末おも成おたるのさ  
 京より伏見に下る時  
 ゆくまゝおまつ此峯々あらはれてはれこそわされ秋の村雨



田家秋興

門田より野田も山田も見渡して思ひより穂此秋を忘るかき

山路秋

名お知らぬ草此かき葉も紅葉して秋の山こそ樂しかりけれ

秋神祇

すめ神のみとしろわせのひひえがりおろし且汲我醉おけり

重陽宴

露ながら山路の菊を折しきて宿らんまでぞくれぬともよし

菊初開

菊の花けさより咲て匂ふゆめり夜のまふ千代の露やおさけん

栽菊

移し植て山路の千代にあらせともこと花より久しからまし

水邊菊

此秋のさめとぞ植し菊の花おのぐ千とせのかのがまふく

山路菊

大井川保津此水かききて見れば野菊山さくいまさかりなり

荒籬菊

流れ行く水あうつれる白菊の八重も一重もえおを見わかぬ

山路菊

山路をば秋おそゆかめ菊のはお折らぬ袖まで香お匂ひけり

月前菊

まがさこそ野とも山とも荒れなまし花の昔此えらぎくの花

對菊待月

おさいいでて獨ぞ見つる在明此月におほへるえらぎくのはお

終日愛菊

くれわさる籬がもとの白菊の月まつほどのひかりなりけり

菊花盛久

ちりもせせ色も變らぬ菊此上おかけ老崩まぬ山も見えけり

菊交薄

香をとめて我こそ見つれ花薄うへの茂れる野邊のえらぎく

秋菊有佳色

いろくお咲るもあれど色なきがあるおまさされる白菊此花

移坐就菊叢

菊の花咲けるあさりおながるせんくちて驚く斧の柄もなし

重巖細菊斑

仙人此すまかの雪と岩がぬおむらくさけるえらぎくの花

名所菊花

大はらの山路の霜此さむければさくの下葉も色づきおけり

聖護院の森なる菊あまさ植さる亭にて

暮秋菊

かりそめお結べる庵も菊の花かこへば千世の宿りなりけり

残菊

くれてゆく秋をもえらぬ白菊を時ある花とおもひけるかき

暮秋

紫おうつろふおはのきく此花えらさふかへま今朝の霜う取

秋

山の端の日影はどなく思ひしおやがてぞ秋も暮れ果おける

閑居暮秋

よひくの露をも霜と置かへて秋のかさみも留めざりけり

惜暮秋

山風お時雨の雲をまよふなる秋とふゆとのなかぞらおして

惜暮秋

我宿此秋のくれこそかなしけれとお惜まおくる人もなし

惜暮秋

山見ればまご色薄さもまご葉を誰おそめよと秋のゆくらん



惜九月盡 物ごとく先かかれつる秋なればわかれおとく涙ごあなし  
くればつる秋の花野お虫なきて色おもねおもをしきけふ哉  
春夏もくるゝ限のあるものを秋しもなごうかあしかるらん

冬歌

初冬 初冬 初冬 初冬 初冬 初冬 初冬 初冬 初冬 初冬  
おしなべて冬やきぬらん山里の松のあらしも音まざるなり  
大かしの萩の下葉もちりはてゝ垣ねさびしき冬の來おけり  
初霜のさえかへりても悲しき冬立つ宵のねざめなりたり  
物おもふ宿お積れるもまぢ葉のかわかぬ上おふる時雨かき  
かきくらし今まぐまざる松の葉お夕日さすなり住よしの濱  
朝時雨 十月九日 紀氏影供 土佐此海まぐれまじり此朝北おたあゝし小舟ぬき走りま  
夕時雨 さらでだお見る間少なき三日月の影かきくらし降る時雨哉  
嶺時雨 風はやま曇れば晴まていななり山みつの峯々いままぐるあり  
深山時雨 誰ういと思ひさえたるおく山にゆきていかへる村時雨かき  
月前時雨 てる月のかつらの露やまぐるらん影ながらおもぬるゝ袖哉

松時雨 常磐なる松も共おどまぐまけるそまるい木々の心なりけり  
時雨催涙 かきくらし時雨の雲のよそながら袖の上おそ露けかまらま  
寒草 本あらのこはぎが原の冬がれて霜こそ花とさきかはりけれ  
老ぬればかるゝもよしや冬草の時おまたがふ姿おおもへハ  
水邊寒草 茂かりし虫おねながら冬がれてみぎはさびしきひろ澤お池  
池上殘菊 もまぢ葉おかげもといぬぬ池水おまぎはお残る白菊のはさ  
さくの花うつれる影を雪と見ていけけ江やまつおほるらむ  
殘菊映月 菊の花おありゝて冬お夜お在おけの月おあひおけるかき  
殘菊帶霜 咲しより紅おかきさくの花おまおしおも折りぞまごはぬ  
千とせまて残れるものを菊の花霜おあゝるをおきてける哉  
寒 芦 渚おぐさあなし小舟見ゆるまで難波の芦おかれふしおけり  
寒 松 松おひと木冬の高根お此こらずお風おさむさを誰うあゝへん  
寒 樹交松 さえゝしねざめの床の山松お白くも霜おさおけるかき  
松ばかりさてりと思ひし栗田山こと木も見えて冬おさおけり  
もまぢ葉お薄さもこさもちりはてゝいよゝ緑おいよの松山



落

葉 ならの葉も今ハ葉もりの神無月かぜの心あまかせてどちる  
ちるが上あちりかさかりて榎葉井の水さへ見え成おける哉  
色かへで久しきものハ池水の底おまづめるもみぢかりけり  
山川此岩根を雨やあらふらんさまりしまハ此木の葉流るハ  
ぬさとりて外あまつらむ神無月もみぢハ風お任せはてハん  
あし曳の山のお此葉此ちる時の都もあらしふかぬ日どなき

落葉風 十月九日  
紀氏影供

落

葉多

昨日けふ山此嵐の早ければちるもまぢ葉ぞひまあかりける

落葉滿庭

雪ならば我あどまも見えぬべし木葉ふりしく宿の寂しさ

水邊落葉

影やどま月のさかりも過ぬとやあの葉おまづむ山此井の水

路落葉

もまぢ葉あわが山道ハうづもれて時雨も今ハ通はざりけり

霜

夜をさむま松のうは葉あかく霜此色さへ見ゆる月此影かあ

曉

河べゆく塘のうへの淺ぢはらまろくも霜のおさおけるうあ

朝

あかつきの霜此白くも見ゆる哉あすの日和も長閑からまし

篠

かく山此まきの板間の明がさあゆめもあどなき霜此色かあ

霜

笹の葉のまろきの霜のひかりあてまぢ夜ハ深し岡の邊の道

庭霜

人ふまぬ山のかげある庭見ればおきしまハあも残る霜かあ

落葉

いかばかり人あまらぬ道なれや埋む木葉お霜のおくらん

冬岡霜

朝日影さすやをかへの霜さえて松のまづくぞ隙あかりける

枯野霜

かれ野ふむ鳥の音こそ寂しけれかくらん霜此程もまられて

霜夜鶴

霜まろき野澤此まくさ踏まづさ左明の月あたづどなくなる

京お此ぼりて嵯峨お宿らんといふ人あひやりける

西山ハ朝日とくさすあ霜おおきなかくれそさびるする君

人のいふ花よりうへにあらし山松此まもこそ色ハ見えしう

岩がねのまづくをたのむ山里ハ氷る頃こそわびしかりけれ

水初結 思ふまぢ夕べの酒お酔ひふしてむすぶ氷もまらぬ夜半ハあ

水告冬 冬さぬとつげ野此水のうす氷ひむろのおくを思ひやるかあ

水滿池水 松風のかよふあどまなかりけりあやりはてたる廣澤此池

水閉流水 ゆくものと思ひもはて老河水のそこまで氷るふゆの山さど

氷閉瀧水 氷る日もあればありける山水をとまらぬ物あたとへける哉

岩ぼしる瀧のまら糸よが合せて織れるころもハ氷なりけり



氷不解 とけやらぬ心おまばし似されども池の水のはるやまつらん  
 行路夜氷 夜を寒まおせこす水やこほるらんふめバ音ある小田の細道  
 寛 氷 それをぶお音する物とた此まつる寛此水もこほりぬおけり  
 荊田 氷 小やま田の落穂や底に見えつらん氷のうへをわさる鳥かき  
 谷川 氷 瀬を早ま影もとまらぬ谷川のいかかるひまお氷りそめけん  
 河 氷 賤此女がきのふあらひし菜つと川其葉あがらお氷里ける哉  
 田 氷 氷ふむ鳥のおどこそ聞ゆなれ門田此おみや明けわさるらん  
 千 鳥 沖べより西ふさいれて高砂のかはあまさわぎ千鳥なくなり  
 濱千鳥とも呼ぶ聲おどろけバまどあり明の月の夜ふかし  
 鹽かぜのふけバまふくめぐりきて千鳥お曇る浪の上うき  
 沖へよりまちくる汐や高からしをさか此なる千鳥あくる  
 加茂川のぬせぎの波の立かへり千鳥あくなり夜や明ぬらむ  
 明けあがらまど人もおぬ加茂川の河へ傳ひお鳴く千鳥かき  
 朝千鳥 鳴つれて此ぼりし千鳥下るなり夜ふたけらし加茂此川浪  
 夜千鳥 大橋のゆきゝいたえて更る夜に加茂川千鳥ひとりなくなり  
 寒夜千鳥

崎千鳥 やまの夜おいるのかよひて鳥崎わらぬ聲おもなく千鳥かき  
 泊千鳥 波の上おうさねをすれバつれもなし我友千鳥聲たえずなり  
 濱千鳥 ふゆまらぬ南北海此はま千鳥まおそふまね跡の見えたり  
 浦千鳥 浦千鳥磯のいくりおあり交り見れどもまえず聲ばかりして  
 湖上千鳥 冬の夜此あがらの山お月さえて千鳥まばなく志賀の浦なま  
 水鳥 波此上おうきてたいよふ水鳥の中々よおいまづまざりけり  
 淵水鳥 木かげのま氷り此これる青淵おあつまる鴨の數もまられま  
 池水鳥 廣澤の池もせましと水鳥のむれるふゆおなりおけるかき  
 水鳥多 贊人此もち引かけてねらふども知らでや鴨の群ておつらむ  
 天寒鴨下水 ひる澤のみねの松風はやけれバ片羽おなりておつるあし鴨  
 池 鶺鴒 いどはれて獨や來つるをし鳥のお此がすがさ此池お鳴なり  
 蘆間 鶺鴒 何ごとも思ふ中おいさはらじと蘆間おのまも遊ぶをしかな  
 冬月 野も山もみまら雪となれる夜の空おさえさる月のかけ哉  
 古寺冬月 月影の淵瀬かはらぬ氷おて奈良此あすかおいく代すむらん  
 江冬月 難波江の蘆の霜がれ下をまて月のまふねもさはらざりけり



冬湖月 　　からさきの松かげくらき水底ふこほりはてたる在わけの月

雪 　　神祭る今日しもふれる初雪を誰うぬさどさむらざるべき

初 　　と吉野のなつとの川ある鴨の青羽も見えず雪のふりつゝ

遠山初雪 　　海原ふつ白雲と見えつるの伊豫の高ねの雪おぞありける

嶺上初雪 　　年々ありからせつる雪ならばをしむ心の浅くぞあらまし

待初雪 　　珍らしくけさ見初つる雪此色をふるものとしも人のいふらむ

待 　　都人比良此さかねお雪を見て秋のなごりやおもひはつらん

野 　　あし火さくなおはの里の寒からで武庫の高根に雪を見る哉

荊田雪 　　白雪のつもる高根の遠けれど窓おふりたるおちおそまれ

待 　　なぬふりて空の景色のかはるより雪おやなるとまち渡る哉

待 　　千里までみゆる高殿たてしより今年の雪此ふるをこそまで

野 　　雪をのみ待渡るこそはかなけれ共おふりゆく身をば忘れて

野 　　くれて行く日數つものりの浦のあれど初雪おそし難波江の里

野 　　暮るゝまで昨日からずば小山田のおくての雪や埋ま果まし

野 　　山あらば岩ね木かげも残るべしあまり跡なき野邊の雪かお

原 　　その原のとくさも見え埋もれてみがくの雪の光なりけり

嶺 　　且が山の高根の松をけさ見れば降ける雨の雪おぞありける

山 　　夜此やどおふりける雪此山の端を風の残せる雲かとぞ見る

遠山 　　常に見るあさこの山此松ばらに高くも雪のつもりけるかお

河 　　布さらす常此めなれお加茂川の雪のふりさる心地こそせね

山 　　白雪のそこおなりぬる山里のおもひさゆれどまゐる人もなし

里 　　ひるのとよりよるの氷りて白雪此ふりおし里の道ぞかわかぬ

松 　　さらでぶに道まよはしき津此國のたなべの里おふれる白雪

竹 　　わが岡の松おかゝれる白雪をこ此まゝ千代とねがひける哉

雪 　　高砂此かね此ひいきおちる花の尾上の松の雪おぞありける

雪 　　白雪の降てつられる竹よりおかゝむく物のわが世なりけり

雪 　　ふりつる雪の心の清ければすぐなる竹をまづなびさなる

雪 　　比良此ねお見えける雪の大比えの峰の檜原おけさを降ける

雪 　　かちあてもゆかましものを淡路島うをを残せる今朝の雪哉

雪 　　在明の月に雲もなかりしに山の端えろき今朝のゆきかお



雪 中 獸 狩人のいでこぬ程お小牡鹿の跡ふりかくせけさのまらゆき  
 雪 中 鳥 今ぞ知るもとより水おすむ鳥の雪おねぐらも惑はざりけり  
 朝 雪 朝霜のふかしと見し草此葉お淺くも雪のふれるなま里  
 夕 雪 昨日今日ふきと吹ぬる風ちて音せぬゆきおなりおたる哉  
 夜 雪 よるくはれのおゆきし大空の今宵の雪お成おけるうさ  
 閑居 雪 世中の春まつとしもなきやどお何かの雪此はなとちるらん  
 ぞづかおと思ひまめさる庵なれば音せで此まぞ雪も降ける  
 かねてより跡いたえおし宿なれど雪おり更お寂しかりけり

獨釣寒江雪 難波江此蘆の葉白くふるゆきお棹さしとめて釣するやたれ  
 ある年十一月五日朝の程雪降いでてひねもすやます尺おも及びぬへしなやまをればふし  
 ちがら見る家北南隣北垣お竹多くおひ茂りしが近き年いかおしけむ皆かれて切拂ひされ  
 隣あさりあらはお見ゆ

今にて竹もかれぬる故郷の雪お折れふすおどづれもなし  
 けふの唯人の上こそゆかしけれいかお見るやと思ひやられて  
 誰々の山おや此ぞむ野おや行くわがごと家お籠りてや見る

霞 池まづの氷のうへおふりまどり玉もて玉をうつあられかお  
 玉まきてまつ人もなき我宿のかさねまろくもふるあられ哉  
 曉 霞 おまわりにもはげしき今朝の霞哉くだけし夢をいかお拾はん  
 野 霞 淺ぢふのを野此まの原風さえてわが衣手おあられたばしる  
 山 家 霞 山里の竹此すゑ葉おあられふりさらく世お心とまらさ  
 竹 霞 いねがての宿お夢もなきものを竹のよすがらふる霞うさ  
 雨ならお露もつ竹のいろも見んおまわり跡なきさまあられ哉  
 竹 間 霞 軒近き竹の末葉おはしられて窓のうちおふるあられかお  
 柴 霞 志づのゆきをりたく音おまがひても山下柴おふるあられ哉  
 霞 似 玉 時ならでなるよと思ひしいかづち此みがさ出せる玉霞かお  
 爐 邊 閑 談 火 埋火をうつひまさへなかりけり除りおすさむ夜半此嵐お  
 爐 火 懷 舊 埋火のうづもれながら消はてゝ残る我よのながくもある哉  
 閨 爐 火 よもすがら人もおこさぬ埋火の睡るばかりの友おぞ有ける  
 佛 名 とおふるの三世の佛のみ名なれど一夜の程お聞やをはらん







歳暮 梅 春めさし梅此句ひおどろきて暮ゆく年やまぢいとぐらん  
梅告春近 うめ此花さける垣根をたづぬればかからず春の隣なり  
人のもどめて早梅此眞盛ありたるを見て

餘りおも早く咲たる梅のはち雪たふこそまがはざりけれ  
人の柳をおくりたる

歳暮 さら玉の年のうちより打はへてはるをかけたる青柳のいと  
一度も思ふさまなるめふあはで世をすぐ六の身おそつらけれ

打はへて長くへおける年のをいさふし、くも在し物なり  
行く年のわれおくまたる老なればからき物から形見とぞ見る  
歎くともいふとも誰うけがはん老此心おいておそ知れ  
黒髪の雪とふぬる影よりもかはらぬ物のこゝろなりけり  
あやさくも年の暮るゝを歎く哉死なぬ限のあすもこそわれ  
世中おあるかひもなき身なれどもありて迎ふる春の嬉しさ  
此がれよどをしへし人もあるものを猶世にありて暮す年哉

ふる雪の千重お埋める白山の年のこゆるもまら老や在らん  
常なきも常おなりぬる老が身の驚かぬおもおどろかれたり  
老の坂今のたうげや過ぬらん年のこゆるも安くぞありける  
身おつもる年といひつゝいとひし猶老はてぬ心なり  
ままかへてこゝろむれども年月の暮残りさる里なかりけり  
なす事いさすとしもなく一年を今年もけふおなし果おたり  
ねて此の暮さとりしを年月のなぞ唯夢となりはてぬらん  
歳暮 松 門毎にとしくま竹をとりそへて今こん春をまつり  
歳暮 竹 あら玉の年くれ竹おふる雪のかさむく老がすがさなりけり  
河 歳暮 早川のよど瀬も知らぬ年波のよするみなと我身なり  
山家歳暮 安かれと身をおく山の里おれば年此暮るゝもくるゝばかりぞ  
路 歳暮 門まつまをよこおはこぶ山人の道のそらおて年やくるらん  
年 欲 暮 沖つ波日なま月なまこえはてしもしも今のすゑのまつ山  
歳 暮 恐 とし波のさちのさわお急がれて梶も取あへ老世を渡る舟  
惜 歳 暮 春といへば先お坂おむかへけり暮ゆく年をいつち送らん



歲暮雪深 あづまやのひしとなる迄ふる雪おくまゆく年の音も聞え  
 除 夜 よの中の事のみまぎまお過ぬべし山のおくこそ年のをしけれ  
 をしまれてまふ心のかくれねど暮て行方もまらぬ年かき  
 今のまもまらぬ我身をまそおして此どかおをしむ年の暮哉  
 年のくれお思ひつけふる

世の事の繁さもよしやつくと暮さばいかお年の惜けむ  
 露よりももろき玉の緒くりさめて思へば長き夢路なりけり  
 七十おならんとまける年此暮ふ  
 ゆく年を致しむ心もなかりけり我世まれなる春を待つとて

戀歌

初 戀 ゆく水も其みなうまのあるものを戀の始ぞまられざりける  
 あふ事をいさおふせ鳥の否と此まいはぬばかりぞ頼之ける  
 心おく有つる世こそ安かりさくやくしく人を見そめつるかき  
 恋 思ひせく胸の板間のひまなきお恋ぶさへだお生まげるらん

恐 久 戀 我身よになくてぞ戀のせまほしき恋べお恋ぶ色ぞ見えける  
 途お世の言此葉草おかゝらずお露もらさじと言しかひあり  
 共 恐 戀 人言此いるべき道もなかりけりともお忍ぶの山ふかくして  
 戀の歌の中お よ此中の事のまげまおさち隠れ思ふこゝろのまる人もなし  
 戀しくお戀もしてまし戀まとしてうさの絶せぬ世おこそ有けれ  
 未 言 戀 思ひ餘る涙の袖おこぼれおんいかおと問はしいひも出べく  
 不 言 戀 思ふこと岩おせかるゝ涙川こゝろのうちおむせびこそまま  
 待 戀 夕ぐれおくるしき胸おさわぐ哉つれなき人をまつの上かせ  
 さまをのままつおかゝりて藤波の花のすがさを思ふこゝろ哉  
 恐 待 戀 かりそめの蘆の籬の隙をあらま立待つかげを人やどがめん  
 秋 待 戀 我心いつならひけんまつ虫の長さよまがらなきもさゆまぬ  
 逢 戀 ぬふ程の夢うつゝともわかざりき今朝を誠お嬉しかりける  
 初 逢 戀 逢坂の關路ゆるさんものならばとくも打出の濱ならましを  
 夢 逢 戀 ゆめのうちお見えける人をとめかね松此嵐を恨みける哉  
 現おて見れどまわかぬ君なれば夢のうちお逢ぬ夜ぞなき



旅宿逢戀 故郷の戀しくもあらず珍らしき人のたまくら巻てしぬれば  
 適逢戀 年月を濱の真砂とかぞへきて千ひろのそこの花を見るか  
 見増戀 かさくらま心の闇此あやなきのさやかあ人の見ゆる也けり  
 見増戀 さやかあも見し俤のさらぬ哉やまぞ人のあふべかりなる  
 日増戀 日あそひて増ればまさる思ひ哉けふを限といはぬ日ぞあき  
 人づつて なくば君あざし心をまゝもどてありやとばかり我を問らむ  
 人づつて 玄めゆひし人の垣根の女郎花見るばかりをば咎めざらん  
 面うづま 心より思ひうかべし面影をさらぬものともおもひけるか  
 不逢戀 限あさいのちなりせば逢ぬまお過る月日もをしまさらまし  
 男山此ぼり下りの道をおほそゆきたがひてもあはぬ君か  
 君おより我う此花のほどゝぎま聲ぞお聞かで散やはつらん  
 くれどあはず 幾度うきみか門よりかへりけむ在明の月此かげにとは  
 祈不逢戀 七かへりなゝの社にひく玄め此くちはつるまで逢はぬ君哉  
 顯戀 下紐の玄たふとばかり思ひしごとけしあまりぞ顯れにける  
 わがこゝろ人の心に通へばやいはぬ思ひをまうていふらむ

聞戀 いのちやの名やのをしまむ顯はれて後おそ戀の心やまけれ  
 君を此み思ひけりとのよの中此人にえられて吾のえるかな  
 住吉のおまへの濱此松なれや夢のねごとにあらはれにけり  
 五月雨此雲の上なるほとゝぎすきくばかりある戀もする哉  
 祈戀 おとにのみきゝてたえなば俤に何をたてゝ戀わたるべき  
 立かくせいなりの山此春霞ひとえれおそいのりきにけれ  
 年月をすぎの梢のつれなくて祈るえるし此見えざるある哉  
 我戀いのりゝて天つちにいのる神なくなりけるか  
 うけずとていのる社のあらためむ心おやしと神もいとはん  
 憑誓戀 池水にうきたることうえらねども同じ遣とちかひこそおけ  
 來不留戀 宵の間の別のみこそ苦しけれゆくらむ方此うしろめさ  
 遠く來てはやくもかへる我世子に思ふ心をいつかたらはむ  
 いかならむ神此かさちの君なれば明ぬおのみも立歸るらむ  
 契經年戀 逢見むといひてわかれし俤もかはりやすらむ年の經ぬれば  
 別戀 君とわれ立別れ路の玄のすゝき露繁しとや今朝のみゆらむ



惜別戀

どまらぬにどまらぬもの曉のわかれおれおれどむ涙なりけり  
わがごとや別れかなしき郭公今朝のあしきの雲にちり  
人をおみうらみくして今のさ世さへ空さへうらめしき哉  
君をのみ恨みしものを五月雨の空さへはれず成にけるうき  
かへせども思ひかへらぬから衣人にかけてやうらみ渡らむ  
我方の遠里小野となりけりいつくにきみぐ住よしのはま

披書恨戀

あぞもかく思ひはなれし玉章をさづけうくるの手より手にして  
いかにせむあなはしなやはし鷹此我手に返るけふ此玉章

人傳恨戀

久方此天此逆手のそれごにもうちつけならぬ中ぞわびしき  
夜をへぶて月をへぶつと恨みしに年をも今のへぶてける哉

被忘戀

思ひえ君こそわれを忘れなめ我をすれぬをいか忘れむ  
ならされし閨の扇此をすられていまの我身の秋を去るかな

夜戀

我心おもひくごやしねや此上に霞さへおそまどま來にけれ  
おもふおど打出の濱をまきておそ戀しき人にあふさか此山

春旅戀

をすおしに見し俤の忘まねばおぼる月夜もあはれと思ふ

春夜戀

妹がわさりおぼつかなきに春霞そことも去らずさてる夜半哉  
在明の霞むばかりぞた此みなる影をも人に見えじと思へば

思戀

その人とさしもささめぬ戀まとして空お物悲しかりける  
我のみやかなしきものと眺むらんむなしき空にさてる白雲

片思戀

乾かぬも嬉しかりけり袖の上此涙も今朝のかさみと思へば  
諸共になきて別れしきぬくのかわりぬ袖をかさみ也ける

後朝戀

よそになる人の心のゆふごちにねさくも袖をぬらしつる哉  
我により君かくれ笠かくれ簑身のかひなくも成にけるうき

變戀

えらせばや心づくしの遠くとも燃る思ひをどぶ火にのして  
中垣の一重ばかりをへぶてにて過る月日どはるけかりける

隱戀

山此端に夕ある雲のおろなし戀ゆる物かなしうらむり  
明るまで君をとめて秋の夜のながき心にまかせてしがき

遠戀

あやまちて深き淵おも沈まなむ手をもてするも契と思はむ  
あれくば疎む心もつきぬべし稀おぞ人のあふべかりける

近戀

戀路おの人の目をすえたればなき名おのりて越さきにける

毎夕戀

念願戀

稀戀

戀



戀 里 我に君通ひきならの里なればふるされぬべき事をあそ思へ  
 戀 衣 下に着てぬがじとぞ思ふ我妹子が糸の手引の麻のさむろも  
 踈 戀 打よする浪のさわぎにうと濱のうとく成ゆく中ぞわびしき  
 白 戀 うちはへて長さおもひと成にけり玉の緒ばかり見えし面影  
 寄 戀 雲此上をてりゆく月此見えざらばそれとい人のまりの知るとも  
 寄 戀 雨の夜に月まつよりもあやなきの來ぬ人くやと思ふ也なり  
 寄 戀 風かよふ棋の板戸にはかられて待つ人くやと思ひけるか  
 寄 戀 天つ風ふきなかへしそはるかおも思ふ方より雲さちくあり  
 寄 戀 赤き名のみ夕さつ雲の騒ぐともやがてぞ晴む風のまに  
 寄 戀 思ふことまだやま此端此横雲の棚びきまうれいおし君かな  
 寄 戀 煙だふさゝぬ思ひのかひなきいもゆとも人のまらぬありけり  
 寄 戀 はるさめい心のうちにふらねども繁くなりぬる我れもひ草  
 寄 戀 春雨のおとおもたてぬ君なれば恐びにのみぞ袖ぬれたる  
 寄 戀 忘るゝも恐ぶも草の名ありたりかりそめならぬ言此葉もが  
 寄 戀 秋されば我身ひとつにおひあまり草の上さへ悲しかりけり

寄 戀 やちまたに我名の早く立花のほことの質おもならぬ物ゆゑ  
 寄 戀 引く人もなくてくちぬる高嶋のまを此柚木のわが身之けり  
 寄 戀 住の江の松の葉こしにゆく舟此はの見えそめし人ぞ戀しき  
 寄 戀 中人をさていはいはせ此森なればそ此名たつさも何う厭はん  
 寄 戀 わびぬれば人めをもりの梢よりおのれ亂れてちるさくら哉  
 寄 戀 空蟬此人の横おと茂りあひてつひにわはでの森となりあき  
 寄 戀 岩波のさわぐいまばし山河のながれて末の長閑けからまし  
 寄 戀 只ひとめ君を三河のやつはし此數盡してやこひわたるべき  
 寄 戀 ふくる迄さし残しる門の戸のやがてといひし人や有らむ  
 寄 戀 一言もいはまの清水水のつから汲てまられば嬉しからまし  
 寄 戀 堅き石もどげバみがりれさればさく君が心に似る物をあき  
 寄 戀 うきつくすかひなき筆の命毛此されはつべくも成にたる哉  
 寄 戀 古鏡はらはぬ塵にうつもれてかげに見えまなりし君のあ  
 寄 戀 もろこしの虎ふす野邊を中におきて通はむ人此心をも見む  
 寄 戀 鳥も皆こがら山がらまといまで妻あひまびてなかな鳥あし



寄時鳥變戀 わな戀しおふむの鳥よなれだにも物いひかはせ君ぞと思はむ  
 我戀にならびの岡此ほととぎす鳴こそ見たれ人のさが野に  
 郭公はつ音あわれと言ふれてともなきつる人のいづらの  
 寄玉戀 わたつと此汐ひる玉をついむとも乾かむものうそで此涙此  
 寄筵戀 難波江のみくまが菅のすがむしろ敷悉ぶにいたより有けり  
 寄車戀 戀草をちから車につみやらばかりなるものと猶やおもはむ  
 寄涙戀 人とへば露とこたへし袖の上も雨にまされりいかゞ恐ばむ  
 寄商人戀 山さきの市におびつをうる人のこゝろもあらぬ戀もする哉  
 寄秋旅戀 草も木もうつろひぬれば故郷此妹が心もいかゞとぞおもふ

雜歌上

曉 ともし火此光もねむるあかつきに獨さめふる圃のわびしさ  
 曉 山此端此あくる麓のあややらであきかくれふる鳥の聲うさ  
 曉 逢坂此ゆふつけ鳥もなきわたり草のまくらに夢のかへりぬ  
 曉 ひさかたの天の岩戸のむかしよりあけバぞあくる庭鳥の聲  
 曉 行く春此さな曳すてしかすみこそあぶの鹽屋の煙あけられ  
 曉 もしほやく烟の末に色かへてさてるや里のゆふなるらむ  
 曉 夕立とおもひし雨此こさされて夜もすがらにも成おける哉  
 曉 斧のえの猶幾度うくちぬべし雨おもりおとかこむ棋あられ  
 曉 雨ふれば市のちまたもさびしきに山の奥を思ひやられるれ  
 曉 もとよりもくだるの水の心とてあまりに早き瀧つなみかな  
 曉 雨やふる嵐やふくとおもふまで落くる水のおとのはげしさ  
 曉 つひに世の濁りをさけてこゝにもと心おむすぶと吉野の瀧  
 曉 奥山此たさ此白浪ながれきておなじ水とも見えぬよどかな  
 曉 動きなき岩波の上にかけあがらちど亂るらんたきのえら糸  
 曉 大日枝のやま此まづめ此ありてこそ大宮所らおかざるらめ

曉 燈 ともし火此光もねむるあかつきに獨さめふる圃のわびしさ  
 嶺 上 曙 山此端此あくる麓のあややらであきかくれふる鳥の聲うさ  
 曉 更 鶏 逢坂此ゆふつけ鳥もなきわたり草のまくらに夢のかへりぬ  
 鹽 屋 烟 行く春此さな曳すてしかすみこそあぶの鹽屋の煙あけられ  
 遠 村 烟 もしほやく烟の末に色かへてさてるや里のゆふなるらむ  
 夜 雨 夕立とおもひし雨此こさされて夜もすがらにも成おける哉  
 雨 中 友 斧のえの猶幾度うくちぬべし雨おもりおとかこむ棋あられ  
 深 山 雨 雨ふれば市のちまたもさびしきに山の奥を思ひやられるれ  
 瀧 水 もとよりもくだるの水の心とてあまりに早き瀧つなみかな  
 山 中 瀧 雨やふる嵐やふくとおもふまで落くる水のおとのはげしさ  
 山 中 瀧 つひに世の濁りをさけてこゝにもと心おむすぶと吉野の瀧  
 瀧 水 亂 糸 奥山此たさ此白浪ながれきておなじ水とも見えぬよどかな  
 山 大日枝のやま此まづめ此ありてこそ大宮所らおかざるらめ



野

はあすゝさまねく方おと思へども道こそなけれ古郷の野邊

水樹多佳越

山これバ猶常磐木も此こりけり野邊おそ冬寂しかりけれ

路

植し木もさへし水も年ふりておのが造りし山としもなし

事にふれて

そやお路の西おそよけれ長柄川江口かん崎名さへふりさり

名

かくるゝの難波あさりもまかるべし田を此へ嶋や笠縫の嶋

名

住吉のさしの新はまとりはらひむかしにかへせ沖つゑら浪

名

あともなき昔がたりのさもあらばわれ雁鳴渡るま吉野の里

名

朝くらやふめのみなとに引く網の目にこそ見ゆれ君が千年の

名

あしがらや雪ふきおろす山風にまら波さわぐうきまが原

清

増鏡きよみが關を空にするて月のみふねをとめてしがな

伊

あふみなるいぶき此山の棹鹿の朝妻ごひにねをやなくらむ

音

春くれバ岩間のこやり打とけて音羽此川此かとぞまされる

伊

あやゆ草葉末もえさおりにけりいかはの沼の五月雨の頃

信

はとゝさすまのさの森此下露にぬるともまさん恐音のころ

美

山城のみづのままき此草の葉に螢かへりぬ夜のわけゆけバ

豆

御

牧

三

大とものみつの濱松まつといふ心のなしに千代や經ぬらむ

津

なには人夜寒此衣うつなべにい田のいけの月ぞさやけき

生

山城のとぼのわさりに作る田此みになる人の少なかりけり

鳥

かぞふれば年もつもらぬ山なれど岩は苦むし松ふりにま

天

何事もかくこそありけれわたし守人を渡しておのが世渡る

渡

むこの浦に舟のつとひて白波のよる所さへなくおりにたり

浦

こぎいでし方やいつことおがむれば遙かにありぬ磯の松原

海

住む人のありとも見えぬ島陰に礎おろして日をぞ經にたる

海

わさつこの底にいり日の影をうけて深くを雲の色に染ける

海

見ぬほどに思ひうかべし面かげのむかへバかはる淡路島山

海

常にまぬ人にいいかで淡路島かすみかくれをさして教へん

湖

すみわたる海に鏡とみがるれてまできりかくる沖つゑら浪

水

ふじのね此かげをいれさる玉櫛筒管ねの海此底ぞまられぬ

朝

難波江のわし此かりぶし臥おがらあゆく浪の上をまをる哉

原

頼むかけ夏野の原を行く人のよそに見るさへ暑くぞ有ける



風鈴のうた 世にまらぬ秋のはつ風かよふらしまさきたこゆる鈴虫の聲  
寶といふ事を よの人此用ゆればこそたからちれ千々の金もうる助けず

橋 恨みじよ神此ちからにちす事もならでやみぬる久米の岩橋  
河 沖べより汐をちくらし生田川うはどろみして水さか此ぼる

名所川 けさ見れば高瀬此樋ぶささしてけり賀茂の川水今や増らむ  
朝日川あふれし水の夕べまで猶にこりてもながれけるうき  
よど河のうへいよどきて行く水のまたにはやき世の人心

河水流清 いわしへの流なれども芳野川かへらぬ水のかたみともあし  
井上のかみのまかげやうつらむ末さへきよき賀茂の川水  
川うを何うさすの森ならむ今宵の月のかつらなりけり

長河似帶 高殿にふきならしるる笛竹のこゑよりすめる賀茂の川みづ  
水のあやかり流したる山川を神のときけむおびりとぞ見し  
寄雨河 綱手ひく高せのよとにふる雨此數さへもゆる秋此くれかな

寄水 籾 紀の川にくだす籾の雲かゝるよし野此かく此杉のむらぶち  
下れるにつくを姿の水なれど清きこゝろぞ世に似ざりける

行路市 假そめにぬぎての捨るわら沓も今日の矢矧の市にかはなむ

關路雲 ゆくにあら老かへるにあら老本來の我面目にあふさかの關  
逢さりの關のふる道おえくれは山ほととぎす蟬もあくなり

關路鳥 てる月此影をさよみぐ關ちらば二むら雲もへぶてさらちむ  
ゆふつけぬゆふつら鳥此あゑすなり關もあとき逢坂の山

關屋烟 筑紫路のもじの關屋の夕けぶりがてかきなす波の上うき  
田とすかれ畑とらされて故郷のうづらもすま成にける哉

故郷 御佛のむかしといと遠けれと嵯峨野の寺も幾世へぬらむ  
古寺鐘 わたらしくなれる難波のふる寺に昔此かねの聲をきこゆる

古寺鐘 人毎にきこそ及べ三井寺此ね久しくつかぬものから  
百年をむたびかさねし六波羅の夢おどろかす鐘のおとかき

山家 山にして昔の雫もむすば老ば我影にもまら老やあらまし  
又さらに世のうきことのきこえおも思ひかふべき山の嵐ぞ

山家曉 木ぶかくて明方れそき山陰も鳥のなくねいたがはざりけり  
山家水 世をすて、我こそ入ると思ひしに先すむもの、昔のまた水



山家風 山さとの流の水に赤がれきてくむ手にかをるやまぶきの花  
よをすつる心にきけりよしの山ふく事ひさしむをまつ風

山家夢 世に亥らぬ風此音あそはげし々れ此山里も此がれてしがあ  
人とはぬ我山里の亥ばの戸の風ぞひらきてかぜぞとちける

山家烟 うつゝにのちれぬし物を谷川のおとふも夢をさましつる哉  
人老れず住む山里の夕けぶりたち此ぼらで下にさなびけ

山館烟細 山里此夕べのけぶり見てしよりたなびかれても入る心かな  
烟ざにたつと見えなば跡さえて入あし山のかひやなからむ

山家路 たちのぼる烟ばかりう山里の赤がれもほそし一すぢにして  
夕づく日かげるひやすき山さとの心ぼそくもたつけぶり哉

山家人稀 山里此岩のから道くえにけりいまのうき世に跡たえよとや  
我山のすぎのむらぶち年をへて雲かゝるまでなりにける哉

幽居 くる人もなき山里此さくら花をな我さめにさくあゝちして  
我山此外あ出そほとくぎす聞くとて人のとひもこそくれ  
まなほある友と植さる吳竹をよをへづつとや人のとるらむ

田家 小山田此あせ道づゝひゆく里の近くをゆれど遠くぞ有ける  
來て見れば稻葉荳わけて歌ふなりよそめ寂しき小山田の里

田家雨 大君の御田もわが田も水もちて豊なる代のかげぞ見えける  
苧わけて稻葉掛はすかひもなしまなく時雨此ふる此小山田

田家路 かへり見て三度とふべきいやり哉田中の道のまどろなれども  
或人阿波の國に通ひけるが鳴門の蛤を香合に作りて贈らんといひあがら久しく成ぬれば

といひやりしかど猶そのまゝに成ゆきしかば  
つひに又忘れがひとやありはてん鳴門のなみの驚かさむ

橋 さればこそ淡とあるどのうつせ貝みあきひ君が言葉えけり  
世にかよふ心もいまのうづもれて跡こそなけれ橋の上の苔

庭 板くちて苔むす橋のふみつべし渡りがたき此世なりけり  
庭の面に苔此緑のまされる人目をまゆくあるしなりけり

庭 庭 一もとの庭のよもぎの茂りあひて蓬が庭となりけるかな  
庭 庭 松年久 限あき千とせを経る松なれば梢をまもはるけかりけり

翠松邊家 わが庵の小松が原此中あればかりあも千代を結ぶなりなり



松影映池 池水のそこ此玉藻とみえつるの溜の松此かげあぞ隔りける  
 嶺 松 あふ山峯の松原ふりにけり神も二葉のまらせやあるらむ  
 瀨 松 嶺こえて谷をはるかに見くだせば小松の底にむせぶまら浪  
 島 松 わたつこの沖の小島のひとつ松何を種とておひはじめけむ  
 海邊 松 沖つ風わらさやどあそまられけれ磯山松のかたきびきして  
 浦 松 まま此浦此まう木此櫻ささおり老木此松も春や知るらむ  
 磯 松 一方にきびくいそ邊の濱松の君ふと千代をおもふなるべし  
 遠山 松 山とやま松の松とも見えねどもみどりの色ぞ常磐なりける  
 名所 松 ままよしの松の千歳此數まよどかねてもまける濱の眞砂う  
 何事のありとて松のまひどり世をから崎に年をふるらむ  
 澗 榎 谷底とみゆるのきやも雲かゝる真木此梢のまげみなりけり  
 杜 柏 わが門の杜のかしは木葉を廣ま月さへもらず成にけるかな  
 社頭 杉 稻荷山むかしの杉をかざしけり今のまづ枝を折る人もなし  
 故郷 木 かざしをる人あそなけれ故郷此紅葉の秋もわすれざりけり  
 をりく思ひつゞける

春ながらかすまぬ月の秋お似てくるかどまがふ歸る雁がね  
 我宿の老木此さくらももせで今年も春にあふがうれしさ  
 春雨にいろのながれて山吹花びらまろくきりにけるかな  
 さむからぬ春此あらしに成しより竹の葉音もかはりける哉  
 足曳の山此松ばらうちかすみそら此みどりに春のまにけり  
 はる雨にふられてちれる山寺此庭のさくらんふむ人もなし  
 もろ人のひく手にかゝる我門の柳此いとまづをみざる  
 花のまな青葉になりてうぐひす此聲のまやひを猶残りける  
 風にちり雨にながれてさくら花行方もまらせ成にけるかな  
 櫻さくはるの彌生此なかりせば世ふの心もとまらざらまし  
 あしひきの片山さとの櫻ばなさかりすぐれと見る人もなし  
 うちかすみ日影さし遊る松原の春此夕べの此どけかりけり  
 蓬さく春の山田を打まればかりたちぬべきあゝちこそすれ  
 雨ふりて色いふせれと白川のおとのきよくもさこえける哉  
 道のべ此いさゝ小川の水そこに雲間ながらの月をやとれる



さし此ばる月此ひかりに見渡せばあの松原の雪ふりにけり  
 汐ひれが眞砂ついきになりけり沖此小島と思ひしところ  
 おそくとく皆我宿にきこゆなりとてろくのいりあひの鐘  
 足曳此ミ山のおくもろかりたり此世此外のすみかならねバ  
 殊更につばさのよわき庭鳥の空にかけろとぞはかなき  
 里の子が澤に鳴わおはりしより心にかゝり夜こそ寐られね  
 見る人此こゝろくにあびくこそむなしき竹の姿ありけれ  
 今年生のそれ、若竹葉をまげまわしこの露の雨とあそふれ  
 植にきと人や見るらむおのづから竹ある方に窓のあかり  
 ねこさりの窓に植さる呉竹のふしもまどろに茂り合にけり  
 竹 かりそめふうゑし籬のくれ竹のさのむ陰とも成にけるかな  
 竹 契還年 今年より生そふ竹此ふしごととに籠れる千代を君が代おせん  
 竹 亭 雨 風ふけバ雨にまがへる音たてゝふれバ静けさまどのくれ竹  
 梓弓まゆみ槻弓品こそあれとうたへど今打合せさる竹の製めて其用も勝れさるふや  
 永ら世此實ともわがめつべし

鶴  
 みか月此影を葉ごしに見てしより弓おも竹を切やそめけむ  
 島山にすだつひあづる今年より長き千年やかぞへそむらむ  
 萬代もへにむむ鶴のけしきうあ豊あし原此むかしとはいや  
 わりあがらまど日いいでぬ波の上を鳴渡り行く鶴の一むら  
 蘆さづの千年も我の何かせんわれバまさりて愛世ありけり  
 晴 天 鶴 聲なくバむなしき空のまら雲にまがひやはてむたづの村鳥  
 鶴 宿 松 もと毎に千年ならめど蘆さづ此宿れる松のおどりかりけり  
 鶴 馴 砌 千代ふべき我ともなさをあしさづの伴をひ顔に來馴ける哉  
 名 所 鶴 住の江のおまへ此濱のたづを見て白くや浪のよせ始めけむ  
 あしさづ此まをあらしたる松島のかに久しき所あるらむ  
 曉 更 鶏 久方此天の岩戸のあけがたにさくいとこ世此庭ごとりかも  
 遠 村 鶏 お此山邊里ありげおもみえぬ哉いづくあるらむ庭とりの聲  
 白 鷺 立 洲 引のこる汐のたまりにあさりして沖の洲崎に鷺さてり見ゆ  
 江 雨 鷺 飛 五月雨此ふる江を渡る白鷺のかのが蓑毛やたのみあるらむ  
 龜 萬代もうささる物と今ぞまあるあそべる龜を見るにつけても



梢 猿 梢よりこきるにわふる山猿のわやふき事ハわやふげもなし  
 神 社 天の神國つやまろにまづまりて君代遠く見そなはすらむ  
 神 祇 石清水もなかの月比かげをうけてかくる事なき神まつり哉  
 曉 神 祇 神代ハ神こそかみを祭りけれ岩戸のゑらぎ天のまきぐひ  
 社 頭 杉 ともし火ハまぶ夜夜此おす神垣に朝まうでする柏手のかど  
 社 頭 榊 津の國此おは此つぶらの夏まつりとする榊葉にゆふ立ぞふる  
 寄 社 雜 石清水神も佛もへびてなきかげこそ見ゆれすめる代おれば  
 ある年さる事ありてこ、かしこ此大社ハ勅使おきた、せ給ふ事ありける折

我も又神のミすゑぞ日本びどかきならずとて祈らざらめや  
 三十番神に奉れる松を庭にさしふるがおひ榮えて軒端おやふまでありしとて瑞松館と名づ  
 きたる人のもとにて

神どころ松比まがふあらはまて久しき宿此陰とあるらむ  
 ある人此家ある五葉此松此歌  
 色うへぬ松の五葉のいついあまど春あそ千代の陰ハとえ々

まなの、國人かへりまうし有てさぬさ此國なる象頭山權現に三十三度まで詣でける満願  
 に歌おひければ遣しける

幾返りきその山よりきさ此山名ハちかけれと遠きさかひを  
 或人此賀 八重にのみかさねむ千代の色とえてうつる時あき白菊の花  
 正積が四十此賀

今年よりまさしく積る萬代を君あらましてたれうかぞへん  
 伊豫此國人七十の賀

萬代にさえずあがる、樂湯のふかさえるしを君にこそ見れ  
 本多氏七十此賀此屏風さ苗うる五月雨ふる所

余りあらむ年の験と小山田此あせおまをばかり五月雨ぞふる  
 豊後國人七十と八十と夫婦なり賀

色も香もとおとよ國此藤の花いかなる千代をかけて咲らむ  
 ある人の賀 難波江のうらのあしとつ遙かにもよばふハ君が千年也けり  
 豊後此國人重枝難波につどめ居けるが本國に歸りて還曆此賀せんといふに  
 又さらにいくら此年を重ぬらむよはひももとの國に歸りて



森熊夫いふ此ねに一つ弟あり六十賀せんとまゐるに

去年の君われを千年と祝ひけり君をや千代と今むくいせん  
備前人尙道八十の賀

老らくのかくれまの山笠目山打きて千代もわかガへるらむ  
或人婚禮の祝 松竹此いろもかはらで鶴龜の千とせよるづ代二人して經よ  
敬葩ダ子前髪とりたる祝

をとお山初て此ぼる月まろに千年をまつのかげもみゆらむ  
瀬戸物屋某ダ剃髪

つふも髪洗ひながして千代ふべき瀬戸の岩ほの顯れにけり  
八月十五日髪おろしたる人あ

黒髪をはらへバやがて大空にみちふる月此すがさあら老や  
六月の頃三橋桃雲ガかさりふるしる

みな月の積のされもまつれども君あまさりて涼しきいなし  
兵庫人船井といふ所へ大塚氏此男子むかへとりたる祝の心を

玉はやすむおの所の名ありけり玉もてはやせ聲のそのきみ

泊瀬川氏子うませるる

はつ瀬川二本ある杉ことしより生そふかげも見ゆるなる哉

藤井氏母此七十賀春祝

咲く花のいつれあかぬを藤なみ此あがき盛を君おあを見れ

七十賀にぬくる鳩杖にかいつく

かざりなき君ダ千年此山鳩のとしよりおよと呼びぞ越ある

六十にありける年人々祝此歌よみておくりけるに

萬代といはふおとの葉より合せて玉の緒長く我や經なまし

信州人七十賀寄巖祝

ふる雪此下にうごかぬいはおあそきみダ千年の姿なるらめ

初春祝

さちそむる霞此色にあらはれて長閑なる代ぞ空にまらるゝ

夏祝

大日本わが日のもと此まるとして照るかげ近しみあ月の空

秋祝

雨風の時もたがへぬ秋をえてちまたにうたふ民のおあろあ

寄神祝

わが國の伊勢の神かせさえずして青人草もなびかぬいなし  
まつりごと皆いおしへに返りきて治まれる代や神も樂しき



社頭祝 任の江北やまろくに祈る哉君が代わが代かざりなかれと  
 寄月祝 萬代と祝ふこよひのひさかた此月さへ松にかゝりけるかき  
 寄花祝 限なき千代を數へてちる花をわぶなるものとさふ思ひけむ  
 寄弓祝 梓弓竹をわはせてうちしより世の又さらにはをさまりにけり  
 わつさ弓弦さまれる世の例にの袋あがらぞひくべかりなる  
 松經年 いかづちにさかれし後も此宿此松のかた枝の年を經にける  
 鶴契還年 わしづつの上にあちまふ宿にこそ萬代ふべき人のすむらめ  
 鶴全千年壽 難波瀉まげさ蘆邊のあしづつにいぐらの千代う心あるらむ  
 心辭延壽 動きあき山のいはは此心もて經てこそ千代の樂しかりけれ  
 寄山祝 どころにはにいさく雪はふじの山たがつむ年の姿なるらむ  
 寄水祝 君が代の影ともまらず天の下かのがほり井をくむぞ樂しき  
 萬代を松の陰ある水なればいとひさごに汲まむとぞ思ふ  
 祝言 言 君がさめ手ごと松を引うゑて余れる千世の我もへてまし  
 祝言 遍 春ぐれば子日の小松はつ若菜君をいのらぬくさの葉もなし  
 かひろの人八十八の賀其家老松あり

まつ此葉此ちりとつもりて高野山ならむ限も君ぞみるべき  
 山崎氏七十賀 百年の山崎までいいますこし千代まで此ぼれ君がよはひの  
 ある人の賀寄松祝月をかけて  
 千代の數よるさへ見よと高砂の松此葉をしま月のてるらむ  
 葛山大和上七十賀  
 とはとけの齡のはかりあきものを人の千年を何うかぞへん  
 三井玄孫有卦入の祝  
 今ぞかる底も深江北なふまげおいかくれ笠ぬふ人のため  
 竹垣君元服の祝  
 武士此初もとゆひのいろもなし千歳の霜をむすぶばかりぞ  
 丹波なる親民がもとより文此中によめなる者上加茂に歸りて子産より孫見おもえ此ぼら  
 ずあといひたるに  
 今年生れ二葉此君を加茂に置てあふひをまつの嬉しかるらむ  
 森熊夫七十賀とし閏月あり  
 君がよはひくはゝる春此八重櫻いく重までと咲重ぬらむ



井坂氏七十賀泉屋と號ま

山の井に流れいづみ此底すみてさうゆく人の影も見えけり  
大山氏八十賀 こゝろみに年の八十ち改まづ越て千歳の坂にかゝる君かな  
備後尾路宜暢が年賀歌を乞ふ題もさこえねばたゞ西海を此ぞみて

松本氏母六十賀子日祝

住吉此松原ごしに見てぞおもふ波路はるけき君がよはひを  
たらちね此はゝその森に松を植て常磐此陰と君やなすらむ  
丹波菊翁といへる人の賀

嘉永紀元大嘗會行はれけるに諸國百年に稀なる豊年此聞えありければ

君が名にかよふ山路此菊の花もとより千世の共にこそへめ  
まろしめす御代の始此大嘗祭今年とて殊に年ある今年あるらむ  
寄道祝 ならの葉をさへへ重ねて式島の道ひろくも成にけるかき  
世此人此まどふ心にまかせつゝ獨すぐなることの葉此みち

天の下道あるときもさき時もありてぞたえぬことの葉の道  
寄世祝 君が代に我世なりけり天の下よかれ安かれ千代も八千代も

長榮寺より贈られたる盆蓮みな月十二日初て咲出るをわすれ父が忌十五日の母が忌な  
りければ思ひよりさる

父母のふさ日かけたる花蓮をらでたむくるはかなかりけり  
丹波矢田なる寛隆師にいひやりさる

水上にかこなひまます山川のながれの末もにこらさりたり  
昱子が許よりうせふし子此夢に見えたるとなげき此歌ありし返り事に

夢そのみはかなき物と思ふなよ現もとまる世ふしあらねば  
あふ子がもとより詠草此奥にうせふし子の事うきて昨日此時雨此歌あり

心なくふると思ひしはつまぐれ思へば君がさみぢありけり  
備後高橋氏亡母追悼此歌を乞ふ十年ばかり昔か此ありとあるお招かれてかの母なる點人  
茶しもてなしける事おと思ひよせて

霜おけと冬がれもせぬ松風のおどころ長きかたみありけれ  
寄花懐舊 此春此花のかくれて見ゆれども君がけふこそ變らざりたり  
初冬懐舊 降る雨のそゝる寒けきよもすがら玉の行方を思ひこそやれ  
風前懐舊 白玉の露とくだけし跡とへば今もむかしのかせのおとかき



徳大寺公通公御十七回懷舊

かゝるける露の昔の秋あがら濡るゝばうり此名残りけり  
常樂寺初月忌月前懷舊

在明の月のふさゝびめぐりきて君が影おそかへらざりなれ  
佛光寺御三回時雨驚夢

君まし、昔をゆめとおどろけバ空にこゝへてふる時雨かき  
書家上田藏田女五十回追悼

秋霧につらなる雁のなき人のふでのあともさゆるけふ哉  
伊丹なる壽性尼孫二人まで先づてしてとみづから此病をさへかこちそへて文おこせさる  
かへり事のおくに

人毎におなじなげきのかけれどもかはらぬ物の涙なりけり  
同じ郷ある知情尼も文ありて老たるの悲しかりけり君ますときげと難波におしも及ばず  
といへりとりく哀あり

君があし難波までこそかゝからめ世を隔てて言の通はむ  
草津山田氏追悼寄花無常

はかきくも散はてけりと聞えくる花此便ぞかなしかりける

或日人々と共に上岡崎ある故立入大和守の家お入て見る事あり昔の傍もさく荒るるさま

おはまあり 歸りこぬ宿のあるじをまつ風の音かと聞けば悲しかりけり

森熊夫が妻身まかりける折にいひ遣はしける

貞子の君身まかり給ふとさぐだに打驚かれ侍るに御葬の日しも遠からぬ大火の最中に

ていかばかり心苦しうおぼし痛み給ひけんされと事故さう送りはて給ひてのみ歎の中

にもおもほしかへさるゝ方もやとさまぐに推はかり参らせ侍りて

まこと世の炎此宅とかへり見てはるけき路に君やゆきけむ

世晋ぐもとより母此喪に籠れりとして悼みの歌どもあまたかい付てれてしる奥に

その原や其はゝき木のまらねども有しガあしと聞くを悲しき

森徹山京に此ぼりて岩神通りといふ所に住まける其家の門に松のさし出さうしガ程なく

身まかりけるをどぶらひて

松もあり名の岩神のやどなれば動かぬ千代と頼めしものを

吉田利恭友ごちと共に梅の歌合書立ておくりたりし其半にして俄に身まかりぬといふに

詠草も初の程のわが手にて書きさるるが奥のおと人にかゝせたりとさゆるいと悲し奥に



言此葉此三十ちひとつに今一つくはゝる君が姿をぞおもふ  
極樂の玉の木ずるに立なれてあなうめの花よそにこそ見ゆ  
君が行くみぶ此國の遠くとも吹つゝへてよ梅のはるかぜ  
同じ時詠甫が歌見て歸さむとするに其子利恭死する悼の歌あまゝあるいと感情多し殊に  
七夕數首よめる皆かなし其奥に書付く

天の川雲の此よそにさゝしかど君によりてぞ袖に赤がるゝ  
芳野ある櫻本坊此さき主人身まかりぬとさきて

かへりこぬ水の心のまらねども早きも人のよしや世の赤か  
煎茶人花月庵中師此十七回忌をとむらふをとひて

もろこしの龍の泉もくみいれて我宇治川のながれたやすみ  
いと若かりけるやど世を去りし友と碁打つと夢きて

うたゝ寐此夢此内ふも斧の柄の朽けるやどい久しかりけり  
往 事 よの中にながるの浦の長居して何のかひある事もおぼえず

往事如夢 さりともと所かへてい恐べども昔此ゆめのかへらざりけり  
中々にまこと此夢のまたも見ゆ似る此世を悲しかりける

述 懷 天雲に赤くほどゝぎすかゝらはむ此頃我もおもふことあり

老はてば中々世おもゆるされむ四十あまりぞ人のわびしき  
何事もたのもしげ赤くなりぬれば残る我世を久しうまらる  
やすからぬ世此有様をえる時の老おける身を嬉しかりける  
夜涙餘袖 くれぬとて片しくひまも夏の夜此袖の涙此などあまるらむ

衣手此森の下くさ我にかせよるいなみごのおきどころ赤し  
曉眠覺易 あかつきの寐覺がちみぞ成にける我世の末も思ひえられて

師走ばかりはじめて齒の落さりけれが  
この暮の松の下葉もちちそめてかさなる霜の程ぞえらるゝ

母のちぶさに有つる猫の子をあづかりきて廣充がもとに遣はしける夜思ひつゝけさるゝ  
我ごにも寐られぬ物を垂乳根の子を思ふ親のいかに鳴らむ

師の追悼寄道懷舊 一筋にをしへし道の此おれどもかへらぬ君とあるぞ悲しき

三月廿七日師七回春懷舊 幾千度君がむかしをくり返しやなぎ此糸もはるさけにけり



同じ時當座春氷

此春の昔の影もこひしきに池のこやりのとけずもあるかき  
同じく暮春 いろみせん長きかたみとながめてし春此日數も暮果にけり  
或人の追悼春懷舊

芝越中守七回夏懷舊

佛もいまのおろに成はてゝむかしの春此とやくもある哉  
ほとゝぎす鳴音もからで去のぶ哉さばかり遠き昔ならねば  
寄卯花懷舊 何をうの花とのみこそ思ひしう君あき宿にさけりありけり  
大道寺忠が書此師年回寄筆懷舊といふ事をよませけるに  
たからせば日數程なき筆なれどとゞまる跡の久しうりり  
ある人の三十三回に

元隆一周懷舊

遠さかる別のみかひ在し世を知る人さへぞすくなかりける  
なかくに遠き昔の夢もなし昨日けふこそ世のかなしけれ  
服部氏につかはしける歌二首  
驚定微ぬしのことし春此頃始めてあひまらせし人なりかねて歌の事に志ふかうりけり

むさて後の道の遠き旅厭はせ雨ふり風ふく日もたゞ獨出さまして何くれと語らふまゝ  
に中々ふるさ人さちよりの親しき交らひとこそ覺え侍りしか霜月ばかり俄にいさづき  
いでて師走此始め身まかり給ひぬと聞ねどろき侍るに今年も限となり明日なむ立春  
とさへいひさわぐにまされもやらで獨ごち侍りし

行松子一周寄郭公懷舊

一年にさらで別れし君なれどむかしの友此あゝちこそすれ  
月だおもまぶかはらぬに春たゞ去年とや君を思ひなさまし  
先づぬ身をうの花にあがくれて悉音にさくほとゝぎす哉  
岡新樹同當座 形見ともならし此岡此なら柏そ此影さへぞわらさまりたる  
富子氏に始めて逢て程なく身まかりけるを又の年此秋人々寄露懷舊といふ事をよみける  
に同じく おきかへてあるに露のはかきさを只一目見し草此うへ哉

寄時雨無常 兼てより定めさき世と定め置てまぐるゝ時に人のゆくらむ  
冬 懷 舊 ふる雪のうつみ残せる一筋のむかしにかよふ夢路なりけり  
師の妻君身まかりたるを大炊道場のうちをさめて日毎に詣で侍りし折  
古寺の花のまらゆきふみむけて昨日も今日も君をこそとへ



同じ頃暮春雨といふ事を

また 梨  
また 暮 春  
また 鏡  
人 道  
無 畜 餓  
常 生 鬼

君もゆき春もかざりにありぬれば涙も雨もふりにこそふれ  
おもふ事おしの花さへ露けきい君が袖よりあまるおみぶら  
日数のみ遠さかるぶにゐる物を春さへ夏にあらむとすらむ  
むなしくも残るくしげ此まを鏡うつらぬ君が影やおふらむ  
人とある事いふ野に鳥狩してもとの翅にさちなかへ里そ  
よの中のみお我物とまらぬよりあれども飢る身と成にけり  
うしやうし牛に車もかけがさしいうある誰う廻りきつらむ  
跡もなくさゆる例に拾はれて露も残らぬ世おあそお里けれ  
曉此つゆにやどりと稲妻の見ゆるかまをもわが身とい見ず  
おのづからたのが心を見る夢をはかなきも此と何思ひけむ  
夢路にいよもつ平坂おかるらし此世のはかの人の見ゆれば  
我どわが見る夢さにもかなはぬに現を何うおもひかくらむ  
あるをりくいへる  
老が身いむすびつくして夢もなしあまりに永き秋の夜半哉

よの中をその日ぐらしの鳴く聲も秋のくるゝや限おらまし  
世中の我にいおある仇なれやおもふ事のみさかへゆくらし  
まお人のいはでまぬらん思こそ思ひまられて悲しかりまし  
世をもすて世にも我身お捨られてかひなき物の命なまけり  
思へども思ふかひこそ梨の實の世のなる方に任せはてしむ  
今さらは何をいはま此苦清水はやとくすてむあなうよの中  
天つ日のかげもかはらぬよの中此など偽にならひはてけむ  
朝夕に水にくめどもよの中此人のこゝろをくむひとぞおき  
かくていと今を歎かぬ人ぞおき昔よりこそ世のうかりけれ  
何事もいはでの森此口なしの花のさくともさかずともよし  
けふ見れば花も大方ちりにけり君ばかりとも思ひけるかな  
なき人此すみうとなれば吳竹此千年の陰もかひなかりけり  
終にゆく山路の菊のいおばかり世をはおれさる句あるらむ  
今しんと思ひしものを長月此おがさ人のいのちありけり  
いさづらにおがれくして消ぬ身の水のあおも驚かぬかな



はかなしと驚くほどの中にとありとありつる心なりけり  
大方の眼をも耳をもささぎて、止まる老の身こそつらけれ  
京にありける程小林長利にわひし程なく江戸に歸るとききて

故郷に我さへやがてかへりなびいといはるけき境ならまし  
よの中の心ばそさの常にして旅とてかはる物おもひもなし  
旅行 友 古さといひとりくりに別れ来て旅こそ友の志さしかりけれ

東路此むまやくのあひやどり親しく成ぬえるもまらぬも  
旅 晝 中空に春の日あしもといまりぬいさ水かはんわが馬のとき  
水邊 旅宿 たきの水まくらお落る心地して夢もむすばぬやま中此さと

露ふかき草此まくらを結ぶより浪の上こそふしうかりけれ  
旅 泊 雨 琴の音も聞まほしきゆら此戸此とあうぬさる雨夜也なり  
夏 旅 行 旅なればおもひもかけぬあやめ草うさしく袖お薫る夜半哉

宇治人お遣しける  
思あらば早き流みたぐへこそ汲まぬ日なし宇治此かは水  
歸西老人難波お在ける頃伊勢路おゆうんといひてゆかざること度重なりけるが又此頃同

じやうに聞えて送別の歌を乞ふ

行くとのを告るばかりのひが言も別る、よりの嬉しかりけり  
濱村氏おとゆるされて再び難波お移りまきけるよろこび此意を

もとの水歸り入江の底すきてさはると見えし蘆の葉もなし  
橘の敬語がえはずばかり江戸おまかりけるお

夢おだお見るをよしといふ富士此根を枕おなして春や迎へん  
山田清安俄お國おめしかへされて下るお京なる友どちみな月廿八日といふお立秋ありけ

ればこれを題めて歌よき餞しけるお同じく  
君さへお立つとしさけば此秋此初風いかに身にいさむらむ

井川長尾江戸に下るお姥餅此香合を送るとて  
浅みどり春の草津をゆく人お送るまゝ、る此もちひなりけり

尾張國なる堀田氏夫婦其子どもいさかひつまで彌生ばかり西國なる久留米此ゆかりの方  
ふといで立けるをり四郎茂之ひとり吾家おとめ置いて下りたるが五月の始此浦お船はて  
ぬと告きさればとく行きておひ給へよとせ、めやり其夜の彼方お宿りけるを明るあした  
おもひはかりて



短夜のわけぞ玄ぬらんつゝがさくかへりくるめの物語して  
師此病とむらはんとて江戸より斐雄が此ぼり来て宿りける所いひ遣しける

つゝがさき君をみやこふ一夜ねて旅路のうさや忘れ果らん  
病いえ給ひて歸らんとしける折ふ

逢し日の心づくしにくらぶればうましきけふの別なりけり  
といひへと花の盛も近づきぬいかでうさきを歸しやるべき  
といまらぬ君がわかれに梅此花匂ふかひさき春ぞと思けん  
臥雲といふ法師あひて別るゝ時

雲水此とまる所のまらねどもながるゝかふ思ひこそやれ  
羈 中 送 日 故郷此つかひと思ひし雁がね此かへる春おもなりあける哉  
別 世此常の別だおまそかあしけれ旅より旅あ行くがわびしさ  
ある時舞子の濱を船より見て

旅人のゆきゝを見ればありさちて我もどおもふ松の中かき  
播磨がさ明石のせとのむら霞たなびくまなく吹くあらし哉  
又馬島といふ所あて

赤駒あまろ駒まじりあそびくる島の松ばらおもしろさかき  
又牛窓あて 雨の降り嵐のまぶくいつまでうあなうし窓舟がうりせん  
葉月の末ばかり二人三人語りひて大原なる寂光院あ詣つる事ありしに矢瀬此あなふて  
やどとなき尼君たちの年頃見知り奉るおあんゆくりなく行逢まゐらせて道もさりあへず  
うづくまりて物さこえ奉るにお此程か此寺に物し給ひて今日なん歸らせまふなりけり  
そもくゝいづくへなどのたまふに同じ所へと申せばさらば某此尼ふたよりて古き物あど  
拜と奉れどねもごろお教へさせ給ふほど暮近うなればいそぎ別れ参らせて寺にの暮果て  
行つきぬ明るあした庭あさり見めぐるに新らしくてられさる石ぶまにかの女君たち花  
の頃月のをり深く思ひえめ給ひて此所あど心どいめ給へるみ歌どもゑらせ給ひ傍あ薄一  
もと植られさるさへ物悲しう見うけ奉られ侍りて

古へのあどをうつねてきて見れば今のあどこそ哀なりけれ  
同じ時よる鹿此鳴けるを里人いふ近く聞けり唯うなるなり谷嶺あ響きてかいろうと聞え  
侍るといふ かへらうと鳴くといふ大原此山此奥あひあきもばてぬあ  
山彦あこたへくゝてさをしかの聲のさやかあ成まさりけり  
山科のあさりを行くあ田面の蛙道遠隔てゝ聲の異なりけれ



玉はこの道一筋をへだててかはずの聲のかはる野邊かを  
といひしが其後八とせばかりして行く猶其おどくなりければ

むかし聞し蛙の聲のいまも猶かはりたるこそ變らざりけれ  
或人天王寺のやどりを訪ひしが北野なる鳥鵲樓ありと聞て引かへしかの樓を尋ね來し  
み又外へ物してあらざりければ空しく詩など作りおきて歸りにけるを後にいひ遣しける

いかみせん年おまれなる君まゝで名さへひなしき鶉のもり  
播磨比國赤穂みまかりけるある人お誘なはれてみさきの宮といふ所おゆく此所のさまい  
どめつらかなり石の階の鳥居の直路より波の中いさゝり巖のさゝすまひ松の葉色すべて  
他お異なりさるのさゝりしある船みて沖より見て奇き島根あるうきと皆人いひあへりし所  
いま思へばおゝなりけり

播磨なるミさきの宮の石さみ波の底までゆくうとぞ見る  
宮の辨財天女と

海童のさゝげ出さる岡の上にまづまりいます姫神のかざし  
の松の春たてば霞およそひ秋くれば霧おあやどり沖つ浪よ  
せくる玉をかけぬ日ぞなき

さればこそ松の千歳のかはらねど色こそ更お見え渡るかを  
昔もさりける古き笛つさへくして今いふへもなきあさりのおはんものとなりぬと人の告  
げられればかしまいおれどひそかお思ひつゞけ侍る

雲井おも此おりける哉龍比笛ひそまるほどの聲いさゝしう  
靈山翠紅館八勝の歌仰およりて奉る

善峰 晚靄 はる霞たなびさくらを長き日およしとよく見しよし峰の寺  
嵐 峽 春花 かしくくも君かながめおかゝるといゑるや嵐比遠山さくら  
梅 津 挿 秧 さくと見し梅津の里も春をぞてさ苗とるまでなりおける哉  
音 羽 啼 鶉 さやかおも聞えける哉清水の瀧のおとはのやまほどゝぞす  
鷺 山 秋 月 空おしてときししみ法比影なれや名おあへる山比秋の夜の月  
都 城 曙 雪 もゝ式のみやこの錦おかりかへてそめぬ綾なすけさの雪かき  
桂 水 練 光 月人の雲の衣のまゝとけておびひきはへしみづのまらなま  
八 坂 古 塔 いつ重まてかさね上たる高ど此も猶たかうらず見え渡る哉  
友なる輝義あらたおまつらひさる所お池を堀りて水を湛へ池水の影を物とひとり見む  
あふげば人も大空の月といふお



我ものと思ひかはてそ水の月そらなる影もたがならなく  
江戸深川永代教寺吉祥蘭といふ草花さく宮殿再建此瑞とま寺主詩あり香の其韻字なり

永き代ふ薫れ花此香あらゝぎのあらたまりぬと薫れ花の香  
對仙醉樓といふ家宿りし海山此景色いふばかりなし

はじめての見さる心を知らせばや宿のあるじを客人おして  
曉の夢お板一ひら渡しさる橋此あやふさを渡ると見てつとめて北野なる立女庵といふ寺  
お行くお其橋あり正夢おや

ぬば玉の夢此うき橋うつゝおもけさ渡らんと思ひかけさや  
夢お人の賀に登通窓といふ題をよむと見るそ此歌

仙人此道をまなび此窓なればかよふはさるも常盤ならおむ  
夢  
はかなしと見ゆらん夢も思ふらんあまり短き夏此夜なれば

明やすき夏の夜なれどゆき通ふ夢路の程もはるけかりけり  
夏の夜の夢此行方を尋ぬればあしたの雲おかくほとゝぎす  
何事もむかしの夢となりはてゝ残る我身のうつゝともなき  
的場惠妙といふ女備中の國お下り居けるが廿年ばかり音づれもさうさうしに片山某來て

七十に成さうといふを聞いてよき便とて文やるお

ありとさく君が齡おおどろけば我身もいたく老おけるかお  
花岡といふ所此人のもどお

百ちどり囀りくらす花岡のさとのはるこそどはまほしけれ  
雨窓といふ僧のもどお

ふりくらす雨を心の窓の中お思ひやるさへまづけかりけり  
いとやごどなきわたりお召されし折に

よの中の數おもあらぬ塵此身を高くも風のさそひたるかお

### 雜歌下

大堀綱光に與ふるかけ物のうらお

此一軸のそ此かき京より下らんとする時我師友人と共に聖護院の杜なるますやまで送  
り出まして盃どうでて別惜をけるついでおかいつけて給へりし歌之其後年月を経て又  
此ぼりける道にて調度ども積たりし船此くつがへりて物皆行方かく沈まはて侍りしに  
いかにしてう渚お打よせられさる反古どもの中に交りてたいよひ侍りしを是をだおと



洗ひ取て人のえさせざるなりけりさるの文字のかさも消うせて所々そこなはれ破れお  
たれど中々珍らしきふしも侍ればこたび綱光ぬしお與へまゐらせてうらはらおのが形  
見どもなし置侍るもの也

ひとたびの底のもくづとなしはて、二たび拾ふ玉ぞ此たま  
藤井氏より時の書やうある鉢に菓子を入れておこせたりしが家にあらざるやどおて文も  
開かてそ此鉢かへしたるを又の日おひつつかはすとて同じくいまよきものもりてなど  
たはむれやるとて

古への志貴の飛龜ためしあれば乗せてもかへればはれ其鉢  
人々あまたつどひて酒のまくらして歸りにけるつとめて庭の刀掛ふ刀を忘れて歸りける  
をそれ返すとて

わが宿のさゝの上おておくまもの忘れつるぎの光なりけり  
世晋が詠草此奥によき歌少く取捨さるが多きよしいへる歌あるお答へて

かさよせて捨る藻くづの中にあそ玉の交りて有けるものを  
ある人の詠草の奥に

式島の道のかざりもなかりけり進めばすゝむ程の見えつゝ

京の友のものとみ文やるふ

たまさかの此國にこそありと聞け都のおどのまどほなる哉  
昨非大とこより使あり其日しも俄お熱此氣おありていよくなやま出る折ありしが又の  
日使きてまゐらすべき物忘れにこりと聞え其後病やゝいえたる程かの人又來てそ此忘れ  
たるまゐらせ物なりとてとうでるを見れば沈香ありけりさてこそ世おつれさる心づか  
ひあらめとおしはかりやういたゞきながら

老ぬればつひの烟もいとほぬお空さきもの此何へだつらむ  
桂宮の御お此とて大井此筏の棹もて三重にものしたる花器御歌もありて水馴棹といふ  
御銘あるをうつしたるかさを又うつして書きつゝさる歌

桂川おがれて末のかかなれど月のうちよりうつしきにけり  
同じ筏の棹もて自在を作りて花筏と銘して書付たる歌

あらし山松のひききもかよひきて盛お不ゆる花いかだうお  
おのれ此自在お笠つりて其前おて琵琶ひきたる圖を正義が書きて歌をもかさ加へ一軸と  
なしてもて來たるおかさそへたる歌

我影もともおうつりて大井川かしらの雪やはちと見ゆらむ



尾崎氏の茶抄その竹のさび羽此文お似たりはしたかどきつて

いくたびう手にかへりきてはし鷹の趨にかよふ竹の一ふし  
森氏の茶抄黒塗波千鳥蔭書あり名取川といふ

白紙の賛 ちとり川やま此埋木あらはれて聲さやかあるさよ千鳥かき  
夢にごみ見ぬもろこしの紙や川渡ればこの物とおそきれ

天漢こゝ此かさね此雲井よりせきくぶしたる心地こそすま  
うめ此花なつらうの花月此かげ雪のいろとも見ん人の見よ  
月にごみ色のかくるゝえら鶯の趨もたわみゆきのふるらむ

如來滅後々五百歳廣宣流布

いほかへり後の御法の水海おかげこそ見ゆれ大日枝のやま  
三 車 のり得てのみつゝ一つの花車みちびくほどの匂ひなりけり  
法隆寺聖皇院蔀の古材おて製したる短尺板

いかるがや富のを川流せきとめて餘る千歳此かげを見る哉  
興福寺の焼残りの古材おて作りたる硯箱蓋裏  
飛火野此煙おもれしためしみの枯野の琴もひくべかりけり

義士小野寺重内の硯衣手と號を蟬此形あり世晋持傳へより

武士のその名のいのち永ければ玉の行方いえずともよし  
みかさねの盃松竹梅あるにかいつく賀お用う

枝されて土おつくまでおい松もふさ葉ながらの緑あるらむ  
さればこそ竹の千尋の陰ならめよ長き人のさちもよるべく  
梅の花おやひのそへよ松竹此ときは此色おときぞどもなき  
大なる盃お松あり

十かへりの花盃にかけ見れば千歳のいろにあらはれおけり  
備後鞆浦中村氏此需にて

中村應雅老人妙喜庵に有しといふ水盤二基を得て更に又喜庵を作りて庭中に据り其一  
を鳩峰と號け今一を西行法師といふ得たる故よしなづけたる傳へかの庵のたゞずまひ迄  
つばらおかいえるして送られたり己も年頃ゆきかひて見なれつる所なればさこそとおし  
はかりやられ侍りて

いふしへの其やあき陰いは清水たれか心のとまらざるべき  
或人干さよりといふ魚をおくりたるお



時のまもひさよりかりぬから猫の馴ても見まくほしき君哉  
おそねなる慈雲法師柿をかくる

秋風のおそねの里ときししかど早くも柿のいろつきふけり  
冠お心葉松梅あり柳箱に比せたるか

海童のかこの心葉けふ見ればいそべの小まつ梅のはさぐひ  
松ふ雪ふりさる所

拂へども消さもあるうき松の上比雪も常磐お成やまぬらん  
富士越此龍 ふじのねい世お高けれどたつ神の比ばる雲井の限なきうき  
神原氏雁を好みて書や歌や集む

立さらで鳴なる雁の聲さなりこれやとこよの島根なるらむ  
巖に龜みつをり朝日上ふ出さる

蘆さづの聲もはるかお聞ゆなり千歳の始けふあしあるらし  
をの子二人牧馬お乗りて歸る所

おのれまつ心にのるを乗ておそ御牧此駒もひくべかりけれ  
下弦の月はのくらさみ菊のいろく咲さる所

有明の影のはつかおなりぬれど籬のさくのいろい見えけり  
さかまく浪の中お巖有り鷺をる

あきつ姫いははかき吞む浪のうへおかくと嚇く鷺の聲かお  
瀧おちたり其水一筋わかれて石を走る

年をへてはつる糸と見ゆるうき横はしりさる瀧比えら波  
牡鹿妻をひて立てり杉あり

戀てなく聲いさこえずさを鹿比妻もこもれり春日野のはら  
端午鐘の晝 五月蠅なす騒がぬ世お武夫のあらひ忘れぬやまともる人  
競馬のかよ かくれじとおはすや鞭のおひ風おかつらも薫る加茂の神垣  
端午はさたてさるとある鐘撞あり

君が代ひとりひしぐべき鬼もあし萱蒲比太刀の風お恐れて  
立 雛 桃の花もくと聞さへはるけきに三千代の春お咲むとすらむ  
圓窓比中に櫻さし出さるちる花もあり

今こゝに見えたる枝のちらねども空より雪と降るさくら哉  
又圓窓の中に紅葉



久方の中にそめたるもまぢ葉の照るより外の色なかりけり  
壬生菜 獨活 露此とう

花よりもくれなゐ深きはつ草を年ある雪のうちお見るかき  
水鳥多くあつまりたる所

聲のこゝ聞えざりけりをしたかべ鳴さへきゐる耳なしの池  
月の下お大なる雁一つ行く

只ひとり月のあたりを行く雁のかの影にやつらいなすらん  
瀧おちたる所水すこしなめおかつ

さらでだお涼しき物を山風のふきなびけたる瀧のまらいと  
知章 載馬 水底のさめぬかげをやおほふらむ桐の葉おつる秋のはつ風  
いと小さき牛をり其上にかいつく

まことや芳野の奥なる巴が淵といふ所の出いる道いとさかしくてあるの岩根おせぐく  
まりあるの木此枝をよちて身一つだお通ひがたしどうされば所の人里お出て牛の子の  
いと小さきをふごといふものお入までもて歸りて養ひ育て大なる牛おしてつかふとぞ  
うらやまし巴がふちおすむ牛の再び世おのめぐらざるらむ

小 松 風のおと浪此ひいきに通ふまではやおひおぼれ松よ小松よ

雨中の茶つみ うぢ山のこのめはる雨いそがれて雲の絶間もまたぬ頃かき  
空也堂踊念佛 なりひさごもとより軽きとなりけり浮ばん事疑ひもあし  
藍江が書岩の上お鶴をり下お波さてり

江のミづ此藍よりいでて立つ波のまろきをあやの鶴の毛衣  
森に杉あり紅葉少し交れり

まとしろ此初穂此酒早まがま田中の森のいろづきおたり  
猿ひとり枇杷の枝おつゐてあふりを見出したる

世のおべてうたがひ深き山猿の木の實取はむ思ひおらずや  
大なる櫻満開 とまらぬ春も心にまかせたり此一本のちらじとおもへば  
鳴ふたつをり 流れては是もいもせの中お落るなつこのよどのをし此鴨鳥

小 町 うつろはで世にふる物のさそふ水さそはぬ程此色香えけり  
根引松ちゝり付り

いかならん人の千歳おひうれけんはや十返りの實の結びけり  
二股大根鼠のひく所初子にかけんとなり



梓弓はるの初子にひくもの小松のまふもかざらざりけり  
頓阿が作れる西行の像をおく堂の板お押を料の歌

梓弓ひきおあしけん夜がふりも末の世とほくきあえける哉  
須磨此浦磯やあり櫻ありうしろ山ついでけり

富 士 打ちつけお雪此姿と思ひしひえろきをささお見つるなりけり  
いちの谷にのたふくお春もちて古き籬もはなの香ぞする  
ちりひぢのされる所とおもひしお雲こそ富士此麓ありけれ  
薄雲のへだておがらふ見ゆれどもまがはぬ富士の雪の色哉

又下お月薄あり

月影のすめるをそらに花薄はふいでて見ゆる雪や富士此嶺  
又下お帆あり 風のくくと明る白帆の富士此嶺此雪のかたとも見え渡る哉  
蘆お雨がへるをり

かのが名此かへる所もえらねばや蘆の下葉お雨をまつらむ  
かいらいし 乾坤の箱のうちよりあらはれて同じすがふもなき世之けり  
山上憶良七種のかた

七夕七種花使 あさがほいそれうあらぬう奈良人の昔かぞへし七くさの花  
奈良人の野邊にかぞへし色あらぬ天の川原のな草のはな  
波 えづかなる底此心のすがたといえろやえら波立かへり見よ

鶯小松の上お飛ぶ

鶯のかのが羽色の小まつ原あるのまはるとおもひけるかき  
備後みの島お向へる家おかく

あらはれて幾世へぬらんわたつと此底つ賣此かくれみの鳥  
老子うしお乗りて雲の中行く

久かこの雲路いつねの道ならでもとより跡も残らざりけり  
古へぶりなる女月の下に衣打つ

てる月の影おさらしてふちばなのまま人いまや衣うつらむ  
壽 老 人 果もなきみなこの空此天彦のすがたの見つや聲ひきつや  
小督仲國 あき此月いまもそ此夜此影ならび雲のうへなる昔かさらへ  
吉 野 静 君をのま祈るこゝろのひとすちに岩さりとほす神此まや瀧  
七夕のかさをみなへし



をみかへしさき澤水ふ影見れば天つ星合もこよひなりけり  
松 二本 色のみかきどりあれども春霞たかびく松のうすくみきり  
梅 鶯 花ふ梅鳥ふうぐひすかかりせば春の來るとも何ふかひせむ  
秋の野ふ小鷹手ふすゑてふてり

あらためてすれるわのわらず狩衣秋の花野此露のかけたり  
波上獨鶴飛 眞鶴此はねうちつけお見ゆるかき千とせおかへる沖つ白波  
紅葉十一枚ちれり

いちぢろく數さへ見えて霜月のまもの上おもちるこのは哉  
山のながれめきさる所小松あり  
皆人のねながらひくのわふまなる床の山への小松なりけり

梅柳渡江春の圖  
雲かすみ棚びきわけて梅やかき見えこそ渡れ春の水のうへ

月此前に鶉草花あり  
色々の花をばおきて月おのまかゝれる雲をうづらどやかく

老婆衣うつ木の葉ちる

いろもなきわがから衣打つ音にちるの柵のもみぢなりけり  
廣き水お蘆すこし枯れこれり上お月あり鴨二つ下る

わし鴨の羽音ばかりを隈おして冬の夜ふかくをめる月かき  
水 月 大空此月のかゝわれ我やど此池のそこおもありけるものを

山の端にあらで出たる月影の入るといふ事もまらぬ之けり  
羅 陵 王 百ちどり囀る春のながき日をかへさばいかお久しかるらん

雪ふりたる夜月出たり  
久かこの月のかつらもうづもれて雪の光おなりおけるかき

月の前に鶇 雨にだおあゑいさやけき時鳥はれたる月此かげおあくなり  
猩々舞蘆あり 萬代とよろめき渡る亂まわしの世に似ぬ物の我世なりけり

鶴二つをり 千代の猶遙けきものと思ふらんもどよりお此が齡なれども  
岩の上お鹿さてり鳶の紅葉かゝれり

石網のむまびとめさる棹鹿のところもさらで妻やこふらむ  
せちぶ女豆打 かぎりあき年の數々うちつけお見ゆるの千代の始なりけり

佐野のまより俊成卿



はらはでも世おふるもののみわが崎昔の人のそでのえら雪  
九月九日茱萸袋かけたる所

高きおも此ばりくして今いさゝ雲井お残るためしなりけり  
蓮生入道驛馬倒載終焉此日を知る事をかけて

西にのこ向ふ心のかくてこそおのぐ入日のかげもはかりき  
生師の行跡世にいひ傳ふる事ども大方うけがたきものから倒載の如きの勅傳おさへのせ  
させ給へば更に疑ふべきにあらす

そむかぬの背くに似たり極樂の道の此世の道おしあらねば  
藤二本ばかり 家人此數おもならぬさわらびを折てや今日此山づとおせむ  
時 鳥 郭公まぢかく鳴てすぎにけりまだしき聲のさゝやまどふと  
競 馬 すなはなる心の駒おまかせたる其あらそひや神もめづらむ  
は ち す 水そこお在けるほども花はちすひらけし時を知る人ぞおき  
雨中おやとゞぎを飛ぶ

ささつ瀬おひれふる魚のこゝちして雨きりわさる時鳥かお  
同じくあさり何も見えぬか

さむる夢なき世ありとや思ふらむ此はとゞぎを聲も聞えず  
墨 梅 霞たつ春のはかおも梅のはなありといえたるやみ山うぐひま  
吉野山ほとにもまぎて花多し

みよし野れよし野れ山の花の塵つもりノてなれる山かも  
龜の書お對してかけんといふ歌

君がためふさゝびおほふ玉手箱今より此ちの誰うひらかむ  
さ苗に驚立ち 賤の女が植ていおけるえら鳥の鳥羽田の苗の茂り合おけり  
満月薄水おがれり

月さよと清水ながるゝ薄原むしのねいかにさえまさるらむ  
曲水のかさ さかづきを浮ぶばかり此水なれど水上遠きまどぬなりけり  
ひさ上お桃櫻あり

枝かはす花のさかりや菅此根此春の日永さちぞ里なるらむ  
ひさのかさ三月と九月と祭らんといふ

菊の露も、此筆をくもためていつれの千代を君が世おせむ  
大原女ゆひたる薪をふまへて櫻此枝を折らんとす其枝ひさの上おかきり



をるやどもいさく物を都へと運ぶを此ミヤ人の見るらむ  
墨畫の菊 うす墨此夕への此ち此菊のは赤素きをわやと匂ふありたり  
時鳥獨飛ぶ はてもなくかざりもまらぬ大空の時鳥のまなきわふるかか  
吳須此香合に梅鶯のかさわるを人のえさせふるお  
うぐひすのなかなぬ聲まで匂ひきて稍おまらぬまどの梅が香  
和歌此浦に汐みちくれバの圖

いみしへの蘆邊を遠まわしたづ此千歳をかけて鳴渡るみゆ  
山鳥をり董土筆あり  
霞さつはるもたけざ此原みきて長々し日をひとりさくらむ  
そみどり井杭おどまれり

水底のみどりもかのが羽色おて涼しき影をおはせてぞ見る  
菊お萱をりそへふる  
菊此はゆ結びあひたるかるうやの千歳の秋も亂れざりけり

元隆が需ふよりてかいつく  
よろづのあらましもたがひのま行く世の有様おればさる方お思ひおがして深くもどがむ

べからずされど又かりそめの一ことも數多此年月を経てなりとぐる事さきおしもあらぬ  
の限なき天地此幸ひあるべし元隆ぬしいと若うりけるやど父珉州ぬし六十の賀お臨きて  
盃作らんとて畫のやうかと好まれされど心おわたはずとて元隆ぬしおゆづりたはむれて  
そお此賀に物せよとれたまひしが遙おいとちばかりを経てまさしく六十の賀宴お作り用  
ひられふるいともくめでさき賜物なりけりされば其下繪のちりおひおんを致しみて  
壁お物すべし押ならべんお聊其よしかい付てよとあるおまかせて

たらちね此親子かさねし盃の心ざしをもつぐおどありける  
紀の國より出ふるあさり貝香合鷗玉と銘して

ままらゝのまらゝの濱おあさりして其玉得るりおはれ其玉  
同じく伊勢の大蛤

神かぜの伊勢此濱ぐりあけたれば蓋身のうらも見え渡る哉  
備中國さみの浦惠の池のかゝをかきて傳へんとする人おもとめ

淺からぬ惠のいけもうつさずバいかでう代々此鏡おらまし  
柿本此神像頓阿百躰といひ傳ふるも此のかの師歌此道お志深うりしかば住吉の社お祈り  
て年へふる杉の流木を得て數多の像を作り奉り飛鳥寺に据ゑ置きせちお乞ふ人おの興へ



たりとなむ藤野氏のいつきまつれるも其一あるべしざる其道に幸あらん更なり家此  
鎮め身の守りふもよなきわざならん今御前不備へ奉るべき歌あまねくこひ集め給ふ  
に己も加はり侍りて

まきしまのここの葉もりの神風ならの林ふふき傳へけり  
金城の板敷此杉もて作りたる硯此箱ふ  
年月をすぎの板さきふしくに春やむかしと誰うまのばむ  
かふ福せちぶの豆打つ

明日たゝん春の心ふなりにけり人ふ見ゆべき花のなけれど  
小松 蕨 龜 はる山のわらび手毎にかぞふれば小松の千歳龜のよろづ代  
扇ふ二見此浦あり

明てこそ見めといひける玉くしげ二見の浦を明てこそ見れ  
松一枝さし出さり

一枝にこもるちとせの影を見て梢はるかおおもひおそやれ  
茶せん賣えのころ

よの中の心もまらぬえのころのさびしかおなく年のくれ哉

猿此子もりするかこ

おれくして人おましろの立姿なまめきふりと誰う見ざらむ  
巖 に 菊 いはほよりさたるを見れば菊の花動くべからぬ千世の色哉  
萬歳松あり ぞどりさす松のまづえお袖ふれてうたひ出さる萬代此こゑ  
大原御幸のかた

かしこくも君が涙此うゝりけんかき根の菊の色ぞかきかぬ  
船中おて書ける櫻

山ざくら心のうちお手をりきて浪の花ともさかせけるかお  
奈良の都の八重櫻

千代をさへ重ねける哉さくら花八重九重とおもひしものを  
満月霞ふる 久方の月もくもらでふるあられ玉もて玉をうつりとぞ見る  
玉川衣打つ ながれくるおとも聞えぬ玉川あうつりまのぶのまじり衣かも  
まさくわらはれたる富士

塵ひぢの積りてなれる山ならささればぞ曇る隈なかりける  
茶の花枝ふさなり



むかしからさきける花を唐土のさねぞと誰うとがのをの山  
満月物なし をしと思ふ心や空おもちぬらんゆく方なくてすめる月うき  
時雨降る上お雲なし

久かこの空おの雲もなかりけり風のまづくや時雨なるらむ  
大津書鬚奴藤娘壽老人月代かき交さる

さい浪や是もふりぬる跡ぞかし大津の宮のむかしならねど  
牛 曳くうしにひかれて渡るわらはべの心さきこそ心ありたま  
鏡 糸くちておどしかへたる鏡こそをさまれる世の寶なりけれ  
自在ふうを鍋釣りさる所

浮龜のすがたお通ふはりま鍋かたたるつるも千世のどちこ  
巖の上お鶴をり下お鹿さてり浪よまるかさ

あまの原南に見ゆるほし崎の磯のいはほのよろづ代ぞこれ  
椿 一枝 八千代まで色もかはらぬ奥山北やつを此椿たれう折りけむ  
尉と姥のかさ ふたりしてふるといすれど高砂のまつ齡の末どはるけき  
我ががら二葉のむかしわすられて千代さへ常お成おける哉

兔草の中おふしたる

久かたの月の桂のかけよりも山北おくこそすまよかりけれ  
水に瓢うさたる所

茨田川人の命おかはれどもおこれも身をばまづめざりけり  
寶 珠 何事もこゝろにかおふ寶として思ふまにまと名づけそめけむ  
柳お月北いでたる

照る月の前おなびけるあを柳のかいみおうつる妹が黒うま  
散樂老松 かしこくも君を千年とさす枝北春のみどりのかざりなき哉  
まゝ邯鄲 九重のくも北上までゆくものい只かりそめ北夢路なりけり  
夢を見て夢の世を知るゆめ人の夢ものがたりさく人ぞさく  
鼠みつ稻穂を喰り

君が代に秋北たり穂の餘りありて人の外までゆたかなる哉  
鼠節分の豆をはむ

おそろしき鬼北つぶてど打つ豆を家の鼠のかつくらひけり  
王 昭 君 天さかるひなの長路おまらべげん響いとほき世お聞にたま



山 寺 月をのミ見てあかまらし山寺に今宵のかねの音もきこえず  
 鮎 久かたの月の都のかつら鮎いうにながれてこゝお來つらむ  
 沖ふ嶋あり舟ども帆はれりこなたの磯お松の梢見ゆ遙なる浪間お朝日僅お匂ひたるかた  
 松風のおとも聞えぬあかつきの波のうへこそ静けかりけれ  
 浦嶋の兒箱を持ち竿をかさげ龜おのりて歸りくる所  
 水のガ身の老ともまらば玉手箱波此まにく捨ましものを  
 水に河骨 ながれよる水浅けれど涼しさのかざりと見ゆる花の色かき  
 芳野山松櫻あり

龜と小松とある所 松をのミ常磐と思へばよしの山はなの梢もかはらざりけり

今年より思ひやるこそ久しけれ小松此ちとせ龜およるづ代  
 駒とつふしたり若草おひたり小川流れさり

草おもえ水おながれて春駒のおゝろおかきふ野邊の景色や  
 大原女薪によりかゝりて菊の花持たり  
 大はらや山路の柴のつかのまも老せぬ花のいろおあらはむ

壽老人鶴龜鹿隨へり

久かたの空おもちたるよるづ代お只限なき物おぞありける  
 嫁と見えたる箕もて麥の皮をさる姑と見えたる大なる團扇もておふぐ處  
 たらちねのはゝその杜の下風おれのガお麥の爲おこそふけ  
 傘のうらお書付たる

此傘人おかし忘せていかに求むれどもあらざりけるが程へて後出ささりければ  
 今しおと思ひ絶おしかくれがさ寶を得たるおゝちこそすれ  
 ある人拾ひゆる扇

何事もひらくる春のまるとてまづ手おとるお扇なりけり  
 宇治人の需おて茶籠のおさうらお

天地おいまごひらけぬ玉かつら薫るみちさる荒道の河ざり  
 富士の山下に薄風を帯びたり

ふく風に靡くお野邊の薄原富士のけぶりおあとだおもなし  
 桔梗をみおへしわれもかう書交たる  
 はさおりの鳴く聲おまご聞ねども野邊お錦と成おけるかお



狐此ねるどころ菊少しあり下絃此月高し

花ウなふかくまなりとや思ふらむお此が姿のあり明ふして  
夏の夜男女酒此むかゝ

をみなへし人此心お秋風のたゝぬほどこそさうりなりけれ  
秋の花のもとお白き兔をり

花此いろあうつりくゝて月影もかへる空なくなりおける哉  
春の始船遊して萬歳靈齋僧法師男女おそび合ひさる中お二王のひとり交りさる

よの中の春の心お此るときのかど守りてのゐられざりけり  
あきつ空にゆく

掛まくもかしこき國此名をおひて身を輕げおも飛び渡る哉  
櫻此枝花二つ三つ

さくら花先こゝろみふうつしけり移るひ安き色と見しより  
柳 お 雀 つばくらめ今朝とびかひてわが宿の柳を竹おなくすいめ哉

扇 お 蝶 手おならす扇の上お飛ぶ蝶いかなる花とまがへきつらむ  
朝日此下に元日草さなるかゝ白き花おしていと長し水此中おさけり

萬代の春のひかりお咲くはさの澤邊おたてる鶴かどぞ見る  
宇治人也足庵が虎の歌

うそぶかで風もおおさぬ虎おそのひそまる龍の心おるらめ  
七夕天漢見たる所

天の川とわさる舟の見えねどもたちおそわされ雲のまら波  
西行ふじ見たる所

君見ずば富士とい誰かまら雪の積るばかりの雲井おらまし  
桃の花盃そふ 今こゝおながるゝ水おなけれども浮ぶの今日の心なりけり

海此ほとり松横さまおひ月はるかなり  
松が枝のさしたるかゝをながむれば月おそ残れ沖つ浪間お

はてい指上月あり  
大空おみちたる物の物おあらずさせば月うと人まどひたり

帆おまゝ 長閑おもよる白浪と見えつるの立かさなれる帆影なりけり  
櫻の枝花すこし

春風やふさおとしげん櫻ばおひとの折りさる枝としもなき



草に小鳥 いかばかりとまる翅此かるければ草此葉末の靡かざるらむ  
鉢ふ植たる朝顔二葉なりませぬ雀をるかよ

朝顔の花まちどほふ思ふらんちよくとのも鳥の赤くなり  
瓶ふさせる梅 玉だれ此をがめふさせる梅の花いろもかはらで萬代やへむ  
槿花ふかげろふとまりたる所

朝が波の花も常磐おなりしより夕かげろふの影もかはらず  
梅ふ鶯をり 梅が枝ふさぬるうぐひす誰をかも待て鳴らん聲もきこえど  
霧の中に月おちて鹿さてり

かたむきて月影くらく成にけり我待つ妻のおそくもある哉  
紅梅ふ白梅いけそへさるかた

雪とのままがへじとてや梅此花おぞめの枝を先手をりけん  
わざみ生けたるかよ

かくばかり色なつかしき草此名を誰りわざとといひ始けん  
恵比壽鯛つりて歸る 大みきの少彦名おつくらせて我あるじせん八千はあのかよ

白 椿 一枝の白玉つはぎこととはん千代此八千代の幾千代り經し  
樂焼梅服茶碗のかた

宇治山の木の芽春風うぐひすの羽色お似さる梅が香ぞする  
御影供此作り花此繪お人多く歌や詩やうきたるをはりお

人々の作りそへさる言此葉を花よりけおや見そあはすらん  
中島の西の果なるはさし藏といふ所お植此紅葉のちり残れるをめでてそこの主人が其さ  
ま滋多かかせて歌こひけるお

もまぢ葉も今の常磐おなりおけり秋を滋さめし西此藏がさ  
壺ふいけさる椿一花

山おても八千代の椿よろづ世のかめゆうちおて花咲おけり  
わか楓一枝 一枝をこゝにくひきて飛びさりぬ聲も高雄の山はとゞぎす  
郭 公 いかばかり高く飛ぶらん時鳥それどの見えて聲のきこえぬ  
初茄子二つ 時鳥はつ聲さしてなるもの花たちばあとなおおもひけん

人々書がさける所お津田某いやはておいでて郭公かきさるいとよし  
郭公ふちのまなまかくれぬて今のとななる聲のさやけさ



薩摩堀田中某が井筒にかい上る

今の都とよみしより此かゝ、國原此烟まげく、日々に賑ひ年々に榮えて、よろづたらはぬ事なきの、此浪花此里なりけり。されど井此水のわしきとて、飲まむ料に、必河水をのみ汲あへるを、あかぬ事にいふなりけり。まして五月雨降つゝき、日を重ねてすみがたく、あるのひと時の村雨に忽ち濁り出て、家毎に用をうしなふをむ、いとわびしきや。こゝに田中ぬしが薩摩堀此やかたに、井あり。そ此水他に似るべうもあらず、いと清らふして、もとも茶の湯にかなへり。あるじ深くめでて、汲まはやす餘りに、其由記さむ事を求む。そもく所まめて住なさむとするの、水のよろしきより宜しきいあらざるべし。されば何がし此井、くれがし此水とよばるゝもの、皆よき人の跡なりけり。遠く古へを仰げば、藤原の御井、天の御陰日の御かげとたへ、野中の清水、おぼろの水、逢坂の關にながるゝとうたひしも、事の心を知る人此業ならずや。さのいへ山城大和の如き、青山の中にひらけて、流れ来る川も、ほり出る水も、すべて清からぬの少なくあむ。浪華あゝりの、大かた新はりのふりぬる郷にして、もとより海のうちなれば、千とせの外に住なすといへども、下の岩根此きはみ、さしくるうしは此け、さり難く、たえて得難き真清水

也。清さが中につきて清さを求むるの猶やすく、濁れる中に濁らざるを得る事、かたしともかたうるべし。小堀宗甫居士此落穂と號らし茶入をこそ、世に堀出しといひ初しが、今此水を掘りいでるの、彼器此たぐひいあらで、人衆助け物を成すの功、擧てかぞへがたく、誠に天此賜ものにして、千々の黄金此らがちうる限にしあらねば、主人がいたくめではやすらむるべかりかし。

名にしおは、田中の井戸此底清みひうれるおなき影も見ゆるむ

誠拙和尚此歌集跋

東海和尚の仰せを受けて、故誠拙大徳の御うた若干首、かい清めて佛日此ふぐらに納め奉る。ゆゑの大徳いませし世に、親しくまみえ奉りしちなみあよりてなり。在焉居士おはさんにい、いかでうおこれ此事にわづかり侍らむ。そも八年の昔、おき數に入り給へば、譲りさこゆべき方も侍らで、いさゝういなみもあへず、求め給ふに應じ侍るものなり。さて其ま歌の、世の歌人の歌と物する類ひにあらで、か此心を心といひ出給へば、元よりおのれらが伺ひ得べき限おしもあらず。たましく傳への謬れるにやとおぼしき所も、みだりに改めがたくて、大方元のおまにさし置侍りぬ。再び此巻をひらかん人の、見べき所を見、聞くべき所をさして、打うなづきてやむべきのみ。



さかばさ、さかず、聞かず、敷島の太和、あらぬ大和言の葉  
和田霞江帖此奥にかいつく

詩歌書畫を集めて、帖となし玩ぶ人いと多し。其集めたるさまを見るに、位高きありをのみ、申しおろして誇るあり。得難きを求めて、珍らしからむとつとめたるあり。遠き境、異國にさへ及びて喜ぶあり。物ぐら此よきをよしとして好めるあり。只多きを貪りて更に撰みなさまのあり。皆其程につけて、興なきにしもあらねど、和田霞江子物せるの、五のたなつ物より始めて、野ふ生ふる甘菜から菜、渚によるかささる繩此り、よろづの木の実、あやしの草びらのたぐひまで、凡我し物にあつべき限を、上田耕沖書工にかゝしめて、一帖となせりとう。昔薩摩侯の成形圖説、農業の部を見侍りしを思ひ合するに、既にいふ如きのつらにあらで、其味をはかり、あるのなますあつ物にと、此ふべき品をも考へ、かれの毒あり、これの薬とやうに思ひ廻らすよりともせむとあるべし。さうに目をよろこばしむるすさまのみにあらじかし。さういへ其帖を見ず、其人を去らず、此言のされりやいなや、又去らず。

丹州三木氏著錢話の序

石を集めて喜ぶ人あり。瓦をよせて楽しむ人あり。石も所々にてやうかはれば、興なきにしもあらねど、其人いと少し。瓦の何の宮此きあり、くれの關此ゆかりと、文字のかたさへ留まりて、古へ覺ゆる物なれば、これを樂しむ人や、多し。錢の石瓦のさぐひあつらで、都に鄙に、高き卑しき、其名さおえたる數を去らず。うべなる哉、もろこしもこゝも、いくら此千年をへて、書る人鑄る時、其ゆゑよしまで正しく傳へて、うつし世此こそ寶と用られざるものならむあつ、好古の輩此玩、これに玄くものこそあらざらめ。こゝに三木ぬしの著されたる錢話でふ書を見るに、もとより弄錢に心なかりし身の、何がしの獸此黄金まもれらむが如しといへども、廣く物せられざる功深く、好める志いか、思ひはかりまぬらせざらむ。此のれむげに若かりし程、伏見なる船やどりにて、とうせんとする中に、和銅の交りたるを拾ひとりて、舟の中此つれ、文字のやうのすぐれたると、金色此うるはしきを見て、楢此葉此昔にかへり、泉川の流の末淺らかになりもてゆくことわりをも、ひそかに心づき侍りしか。今錢話をよめば、かの和銅もそ此かみのにあらざりけらし。されど猶それをしもきてやらで、年頃もの、紐に結びおさうりしを取そへて、お此ふみ返し参らきて、

千代くくとせにく、鳴て河千鳥留まるあしの跡もさやけし  
石崎氏別業にしてゑるは



卯月の廿日あまり、友なる敬之、おのれをひきて、高津此高殿に此ぼる。登るに及んで、これが記えるさむ事を需む。もとむるに従ひて、何をういはんとま。此樓僅かふ疊三ひらを敷くといへども、景を入るゝ事、いくばくといふ事をえらず。暫く名づけて含遠樓といふ。其望む所、皆名たゝり。摩耶の高根の雲に登え、紀路の山々波に連なる。又住の江此松の昔を思ひ、岸打つ浪此跡なきにおどろき、川此堀江の船さやひ、今の盛なるを見る事を喜ぶ。かくの如き絶勝、一つくはさき筆にけがさむや。つきて登らん人此見るにまかすべし。

福島に住けるやどかいつ々る

保定が福島此あり所に古松あり。傳へていふ、古への鶴此森の跡ありと。又或人のいふ、城東森の宮これなりと。お此鳥羽あればいづくへう至らざらむ。かりに鳥鶴樓と號けて、やどれる鳩此友呼つどへ、朝となく夕べとなく、遊び語らはん、又樂しからじや。

信濃人貞起其國なる樓の名を需む

萩原貞起ぬし、其樓此壁に障子に、歌や詩や物しおされる、皆扇此かたしたる色紙なりと。そこにあつかふ調度ども、又皆同じ形に造りそへられたるなりけり。まことに好事の一つとやいふべからむ。さるゝ高殿の名にさへかけまほしく思ひよりさまひて、其

事おのれにしもあつらへられたるにさむ。いでや唐の古へ、五明といひけむ始めより、あしあふもこゝあふ、この物の跡いと多く折にふれ事にまたがひて、をかきさも少なからねど、さる故よし引いでさらむ、中々物ふりて、かの本性の清らかなるおの聊うたがふ方も侍らん。管に清風明月の文字を摘て、風月樓といはいうに。主人の心になはむやいかに。又はかり難し。

薩摩人清安が書畫帖金裁聚芳の序

山田清安ぬしの前裁を、あき園としも名づつられさる事、今よりの十年ばかり昔、其母君いたくなやまわづらひ給ひて、よろづのずやうも、藥師の業もたえてえるし見えざりけるを、せちに思ひ歎き給ひし折から、母君此まはするお、此頃咲匂ふらむ花の千種を目のあさりあも見たらましかば、苦しさ心の少しゆるらむ方もやときあえ給へるを、露よりやすき事おとて、山の奥野の末まで、あまねく求め出て、萩や海や何くれと移し植て、鹿の音なぐらと物し給へるを、病の床此力草にて、やうくはひ出給へるがもにて、程なく癒立給ひ、やがて常さまにさへかへらせ給ひにける、其よろこびをといめたる、遠き千歳の秋の園生となむ、語り給へる事のいと尊とくもめでさければ、聞くまゝにかいゑるして、此卷のはしをひらくといふなり。



秋の末さけ狩したる

籬の菊うつろひがさにて、雲此けしきまぐさだちる頃やひ、遍照素性のあとを追はむとて、北山のやとりにいであつ事ありけり。やがて里はなれさるをちこち、いふべくもあらず。ふし靡ける稻穂の重げあるが上に、さすとあき日影の薄くみやひさる、あはまといふも更なり。今の山邊近うなり行くまゝに、たゞちに分入らむ物うからむと、えらぬ垣根に立やすらへば、ひさすらに鹿田も賤ぢいほりとも見えす。假初にまつらひされど、切戸よりはじめて、軒此つま窓の籠まで心つくしるさまなり。庭としもなければ、かのづから野邊の隔てありて、塵ひとつすゑぬ苦の上に、あき紅葉の二葉三葉おちさるなど、たゞに見すぐすべうもあらぬに、空さへかきくれて、さと降りくれば、ゆるさせ給へと音あふに、主人も此方ふてこそといへば、やゝはひ入りて見るに、今あらさめたる壘の青みたるに、松のひいさ波の音も、たゆる時あらじと覺えて、置合せさる調度ども、皆今めかずして、よしあるけはひなり。壁に寂室此せじのからうた、老來殊におもふ山中の好きを、といふ一句をぞかけさりける。猶岩根にさらすばかりの齡にあらで、老の坂僅かに入さちたる道人の、かるくしくして卑しからぬが、よきやどにもてなしつつ、先ひとつあといひさして物せる、すべて世のすき人のかけて及ぶべき限にしあらぬが、はからざる興に入て、やゝ

時を移すまゝに、今の世語り成ゆきて、いでや得がたきを求め、稀なるを喜びて人に誇れるたぐひ、まことによこしまなる道にこそ侍れ。あるじの物し給ふ心ばへこそ、道おこしけん翁さちおも見せまやし侍るといへば、そよ其事に侍り、なま心ある人々の、誰もさこそ申し侍るめれ。世此移り行くに従ひて、何の道も其もとを失ひて、あらぬ様に成もてゆく事、尊とき佛の法といへども、今の輩のむげお行おひ下して、いと淺ましき振舞のみ侍るを、ましてこればかりの事に、をこがましく何のことわりをうひきつけ侍らむ。富たるど貧しきと、高きと賤しきと、何事の上も皆まかのみぞ侍る。その世中の常にして、此事のみに答むべきにしもあらず。ことの心を得らむに、誰の其位に住し侍らざらむ。世のとがにもいふべからず。道の衰へさるにもあるべからず。古への古へにして、かくの如く、今の今にしてあくの如し。あながちに彼をおとしめ思ふに、猶そのかこみの内の人なるべし。さといへおのれの己れがといまる所侍りて、密かに思ふ事なきおしも侍らずといふに、其といまり給ふ所こそさかまやしけれといへば、笑ひて答へず。

江戸の歌結の奥に

夕噺館の歌結一卷、忽ち驛を馳せて來りぬ。さるの此方よりかけたる波の返しなれば、露いなむべきおもあらず、千尋拷繩くりかへし侍るに、石や貝や拾ひなれたる此浦人の、物



すべき様か。必ず明玉の裔の磨きとるべき姿。されど詠人此列に、昔えれる方々もまじり給ひて、なつかしくもゆうしくも侍るまゝに、何事もさし置て、二日三日が程にかいつ々侍りし哉、あさら玉に瑕つけさるもあそ多からめ。すり直して罪ゆるし給へかし。

鳩野醫師が祝此席おてえるす

鳩野氏が國を出し、今よりの廿年餘り五年の昔なりとぞ。さる茂なき人の跡とふ業にちざらへて、後の彌生此ついたちの日、隔なき友垣呼つどへて、法の業めきたる祝の宴開かれたり。げにや人の上にとりて、佛の所謂生死事大を、事此大きな極みなれど、志をさて父母の國を去る、是につぎての大なる事なりかし。志を起して國を出る人、いくばくといふ事をえらねど、業此あり遂げさる、纔に數ふるに足らずなむ。さゝ事の難きに思ひくづをれ、半にしてやむ者あり。たましく業いたけたりといへども、時になはせしで、人えれぬうもれ草と枯はつるあり。鳩野氏の如き、其志のたくましく、其業の至れるに更にて、時にかきひ人にかきへりといふべし。されば此浪華お事はじめて、芦かびの萌出るが如く、めもはるく、に蔓り行はれて、従ひ學べる輩さへ、門立てさるる多しとぞ聞えたる。又内お願れば、老たる母君を迎へ取て、年頃孝養し奉り、終りめでたう送り参らせられさる、いと尊とからずや。又さる業の繁さ中おも、此敷嶋の道おさへ心よせて、

いとさしき乗物のうちにて、つゆ思ひ忘まらずつゝり行き給ふとぞ、雅びならずや。猶年月に榮え、五十回百かへり、とむらひ重ね給はむ事を、遙かにも歡びやりて、興ある今日のむしろにつらなり、思ふまゝをつゝみなくかい記し侍るものなり。

高木氏文塚

元隆君の、高木の家の七代にあさり給ふあるじあり。人となり敬ひ深く、人に下りおのれをついまやかにし、務まめやうなりけむいふも更なり。何くれ此道おも廣く涉り給ひし程の、遠き佛國の文字をさへ傳へ得て、物し給へるにてまらぬ。稍老の境に入立て、世お交らふ事をも厭ひ、大方此事ども嗣子元敦君にあづからしめ給ひしかど、幸薄くして先ざち給ひしかば、うま子なる元良君をたて、みづから近きあさりのひそやうなる所に引籠りて、山の奥野の末に心をめぐらし、身を養ひ給ひしかば、終に齡七十あまり三とせまで保ち得て、をとしといふ卯月の十日にあむ、身まかり給ひにき。さるあひごの楽しみの中おも、書がく事を好み、明くれ手すさみ給ひし、老さけて、そも煩はしとや、只歌をのみいひ出つ、心を慰め給ひければ、書や歌やそれらの反古ども多くつもり侍りし、なからむ後に一所に掘埋めて、人おな見せそといひのこし給ひければ、今其言此如く物せんとて、山小橋なる西念道場のうちに、納めかく事にのなり侍りぬ。さゝ余りに名残を



く埋み果てんもあさらしくて、聊か石ぶみめくまつらひも及び侍るものなり。ゆめ人に見え聞えて、世に街らふ業にいゐらせかし。

福大明神影箱裏書

此紀氏の尊影ハ、もと洛南千本の東なる中堂寺村に、貫之此墓所といふあり。古くより福大明神と申して、近村此産土靈神とわがむ。今ハ其古へを知る人なく、稻荷此社とし、幣帛をもて形代とす。もとありし木像ハ、本國寺此塔中勸持院にいハへり。東塙香川先生、彫工如水に命じ、かの像をうつしさせませらる。如水いふ、此像ハ紀氏歿後、程なく造りし事、考へざる所ありといへり。極めて古作あり。まかるに紀氏ハ、天慶九年十月九日、八十五歳從四位上下の間にて卒去せられりと定むべき事、師説に詳らかなり。今尊容をうかゞふに、さのみ老さけ給へるさまもあらざ。四十ちより五十ちの程ならむ。そのかの古今撰定の頃や此此面影とも、仰ぎ奉るべくやあらむ。

琵琶の大曲うゑ傳へ侍りて

いとかよき身の、老行くまゝに人に交はる事の物うければ、樂器を友とするにまかじと思ひとりて、眼此さめたらむ限、ひとり物して樂しむ程に、おは世此のざり遠うらぬおや、竹の葉風のかれぐにのみありゆゑ、いとに引かへて、花園三位の君の御教をうけ奉る

に、こゝひ蘇合香此事まで授かり奉りて、何くれと此さまひさかせ給ふを、かゝじななみよるおびはべりて、

我爲ハこれぞまゑとのいゝ藥遠ささかひになにのものとめむ



三井宗之が拾ひもらせる貝やあると芦邊磯かげにもとめてみぶりにかきよせよりけるを難波の友人輝義おもとに見せ侍りしかば年頃おなじ心おこそあさりつれとて更に數多くとり加へて四の時くさくの巻をもりうちて今ひと度あきあらさめよと聞ゆるに境へどたりぬればまばくねひ見もあへずうつせみやかさしにやとさへおゆるをもさながらに物し侍りぬもとより廣く濱市にひさぐべき心にしもあらねばなり

尾張國津嶋の里人 茂 之

浦のまほ貝拾遺終

斐雄歌集

菅沼 斐雄

春風春水一時來

若菜 春きぬとふきやはらぎし足曳の嵐あたぐふなみのおとかな  
遠山春月 夕まぐれ霞あきにし山まゆのまゝあらはれてにはほふ月かな  
梅風 谷川のこほりの上をふく風も梅のにはひになりけるかな  
雪中若菜 若菜つむ袖ばかりなる緑さへかくれむとまゝる今日の雪かな  
雪中鶯 おぼつかな又この雪に籠らむ木傳ひそめし春のうぐひす  
雪中梅 ものい皆うづもればはてし雪此中に隠れぬ春の梅の香ぞする  
鶯 馴 梅のはなさきそふまゝに鶯の聲もさかりになりけるかな  
餘寒 嵐 ともすれば嵐ぞ去年あかへしけるまごいりさぬ春の心を



梅近聞鶯 鶯此こゑも手おとるおちして袖にちりくる梅此はなかな  
 杉間 櫻 三輪の山霞にこもる春しもぞ木のまの花のあらはれにける  
 志賀山越 さくらさく春べになれバ昔せし志賀此山越おもはゆるかな  
 花發多風雨 ちるまで此日數ほどなき花なれば雨も嵐もさそひつらむ  
 遊 糸 菅の根の永き春日にうちはへておもふまゝおも遊ぶ糸ゆふ  
 上寺にまうで侍りて

うちなびく春の霞の上でらんとほき海さへ見えさるかな  
 惜 花 ちらせしてまち試まよ櫻ばなつひおの人のあくやわかずや  
 曉天春月 音羽山木此まの花もあらはれてはれくまらむ月のかげ哉  
 春深微雨夕 ゆふ月のかげ此うつろふ池水にふる雨見えてかはづなく  
 春盡鳥聲中 もち鳥さへづりかはす聲の中お残すくなくなりし春かな  
 春月朧々 あまりにも霞む月かな中ぞらに山此端ならで影やかくれむ  
 夏 月 山此端をいでお離れそ大空にのぼればあくる夏此夜のつき  
 樹間夏月 かはほりのとびかふ影も見ゆるかな木間よりてる月此光お  
 山雲夏忽繁 白雲のたちかさなりて筑波山なつのかげおもなりおける哉

松風五月寒 螢とぶ川せの浪の夏なれどまつらせさむし宇治のやまもと  
 雨餘生晚涼 夕風おのりて過たるむら雨のなどはちま葉此玉とかりけむ  
 時鳥數聲 雨雲につゝみあまりて時鳥こぼるゝばかり名のるこゑかな  
 雨 後 蟬 なほあほし梢とほりてふりし雨蟬此聲をバぬらさゝりけむ  
 夏 月 桂川やなます年魚のかげ見えて廣瀬すゝしき夏の夜のつき  
 夏 月 けさ見ればよのまに夏になりおけり雲さへ空に白重ねしつ  
 けさもまた朝日隔てゝたつ雲のはれなむ後の暑さをぞ思ふ  
 水無月の夕日がくれのあと見ればもゆばかりなる雲の色哉  
 白百合一もと打なびささり

水無月のてる日の影おさく花の色とも見えぬ風のすゝしさ  
 白 川 關 ちら川此關おておひぬ越路より渡るとさゝし秋此かりがね  
 月 前 菊 香をとめて露もかくらむてる月の影おまがへる白菊のはな  
 水 邊 菊 山かげの池此そこなるちら菊の波よりほかおをる人もなし  
 深 夜 鹿 麓おてほのかにさゝしさを鹿の聲のどころお我の來おけり  
 秋 戀 いとこ我心ぞやみおなりおける稻妻ばかりかげを見しより



時雨雲 ひとむらの風の浮雲てる月おかゝりもあへず時雨さおけり  
 冬 月 今ふりしあられも見えて玉笹のうへに氷れる月のかげかき  
 湊 千 鳥 舟とむる加古の湊の石がきにゆふしほみちて千鳥なくなり  
 冬 曉 山 わけわさる大原山はすみがまの烟よりこそあらはれおけれ  
 落葉無行路 山ざともわらははになれる冬しもぞ落葉に道れたえ増りたる  
 人跡板橋霜 旅人のあさだちえげき跡みえて霜うちけぶる勢田の長はし  
 獨釣寒江雪 心われや雪おもしろき鳥かげのいり江の浪おつりたる人  
 野 時 雨 てる月の三笠の野邊のむら時雨ふしたるまかや驚かまらむ  
 禁庭残菊 久かゝ此雲井此庭のさくの花いかなる霜ううへにおくらむ  
 寒月照梅花 かく霜のおゝのかさね此菊此はあは宮人も打まどふらむ  
 寒 月 かつさきて春まつ梅此花の上おあまり寒けき月此かげうな  
 影こはる霜夜の月おむかほめやさきぬる梅の木間ならずバ  
 夕ぞりの雲ふきはらふ木枯おひかりさえゆく冬の夜のつき  
 松高白鶴眠 萬代をまつの木高くぬる鶴のみるべき夢もあらじと思ふ  
 海上遠望 わさつみの果此遠山はのかおも入日の影おあらはれおけり

名 所 松 住此江のをかの司おかげふりぬこれや昔のさしのひめまつ  
 浪の音どはくさく世おあはむとの岸の姫松おもはざりけむ  
 住 吉 浦 むら千鳥なきたつ見れば墨の江の蘆への波おなりおける哉  
 か ら す あけぬとや霜の光おまどひけむ夜鴉さわぐもりのうへかな  
 あくる夜を鳥の告てわされどもつとむる業もなき身之けり  
 ある家おて庭上松といふ事をわるとのよませ侍りけるに  
 さしおはふ松の雪に苦むしてにはの色さへどきはなりけり  
 海 邊 松 墨の江の浦風なきて松の葉のいろもひとしは霞むはるかな  
 子日つとひふ名所松といふ事を  
 まづ枝まで浪うちかけて引し世を岸の姫松けふや戀ふらむ  
 葛 城 山 うち靡く霞ながらにさは姫のかくるや花のかつらきのやま  
 これより日記の中  
 野 寒 草 朝な〜霜おかれゆく八千種の花野のはてぞ悲しかりける  
 残 菊 かさわさす霜のまろさを菊のはなかと紫にいろかはらむ



花開更懷君 まゝ更に君ぞこひしきなぞらへて思ひし花の咲そめしより  
 深夜駒迎 月ふけて杉むらくらきさ夜中駒ひきこゆるわふ坂のやま  
 椎 柴 ふりまざる雪も氷れる椎柴にあさかぜわさる音此さむげさ  
 里 烟 信樂の外山の里のふゆごもり思ひやらるゆふけぶりかな  
 庭 雪 あとつけて思ひ定めむ夕月のかげうとたどる庭のまらゆき  
 初 春 七種を出てつみさるあしたより野邊の景色の春めきおけり  
 島 霞 むろのどを漕出て見れば萬代のかめ島かけてかすみ棚びく  
 岸 柳 かも川のきしの柳のかげおこそ魚も長閑おわそぶべらなれ  
 夜 梅 そことなく霞みわされる春の夜の梅のはひも朧なりけり  
 月前 梅 ふけわたる朧月夜の細殿おひとなつかしくにはふうめが香  
 鶯 出 谷 谷かげお幾日ならして鶯の今日いでそむるはつねなるらむ  
 山 殘 雪 去年の雪いまだ残りて春も猶さやかに見ゆるかゝみ山かな  
 嶺 殘 雪 遠山此うまを此上おのこりさる雪のなかくめづらしき哉  
 春月朧々 はる霞かまみて遠し春の野のおぼる月夜おなりおけるかな  
 雲 雀 雲井おて今までなきし夕ひばりこの麥畑おちて來おけり

山 家 春 おもしろや花の都のかぐ山のまつの木のままにうち霞みつゝ  
 待 花 今日もまゝ嵐ぞさむきあらし山我まつ花のいつうさくらむ  
 淵 花 淵の上になみもさむがで大井川さやかにうつる花此かげ哉  
 關 花 逢坂の杉此木此まにさく花のかげの清水にうつりけるかな  
 故 郷 花 覺東なわがうゑおきし故郷のさくらに誰お見られてうちる  
 花 久 盛 けふも猶さかりなる哉やま里にはなれ心も此どけかるらし  
 山 夕 花 わかきみる花の木かげお響くなり麓のてらのいりあひの鐘  
 落 花 おのづから風もなき日おちる花の木陰おのみも積りける哉  
 春 海 磯山のはな霞みて見えねども春のふなぢのおもしろき哉  
 春 舟 網おろさあまの小ぶねも見ゆる哉さかひ此浦此霞がくれお  
 歸 雁 さえかへりいまだ越路の寒からし心してゆけ春のかりがね  
 馬上時鳥 つかれたる駒の眠もさめおけり山ほどゝぞす空おあけりて  
 梅 雨 五月雨に軒のわか竹うち靡きをぐらくなれる窓のうちかな  
 湖邊螢多 辛崎のあしまに舟をよせされば袖おほさるのみざれける哉  
 名所夏被 たいす川かは音たかし御被していくらの罪り今日流しけむ



日ぐらし 夕月の門田の小田に移るまでうしろ此山にひぐらしのなく  
霧間草花 秋ぎりの絶まに見ゆる山かげの尾花が原おいら日さすきり  
鹿交草花 女郎花ささる野邊をさちどあて妻こひわかさを鹿の聲  
海邊秋風 わま小舟つなぎ捨るわたつみの洲崎の蘆に秋かぜぞふく  
對 月 うちむかふ心の隈やうつりけむ月のかゝみお雲ぞかゝれる  
老 後 月 ひさかこの桂男うちむかひ身のむかしをも思ふ夜はかな  
廿 日 月 門さしてねむと思へば山のはお廿日の月ぞすみのなりける  
窓 前 月 月見むと窓あけられバ閨の中お軒端此萩此かげぞうつれる  
秋 月 似 鏡 わが影のうつらされども打向ひわかぬ月のかゝみえけり  
月 前 舟 わま小舟あまの沖べに見ゆる哉つき此光あわびさすらしも  
島 月 うちわたす峯の松原あらはれて今うにはへる秋此夜のつき  
菊 色 秋此野の色此千種をませ此中お盡して匂ふさくのはなかな  
瀧 紅葉 さやかに見え渡るかなもみぢ葉の木間お落る白川のたき  
紅葉 浅 栗田山もみぢのいまだ薄けれとたちわかれたる松の色かな  
山 紅葉 墨染此ゆふべに見ればもみぢ葉此色てる山も寂しかりけり

山家紅葉 都より松のこのまに見えつるのこの山里のもみぢなりけり  
鶴 拂 霜 さむげおも一聲なけり洲崎なるたづが趨おまもやおくらむ  
寒 月 白雪のつもりてはれし山のはを出る月のかげのさむげさ  
冬 雨 わなわびし霰おなりてふる雨の簑此ままでどほりける哉  
家々除夜 さ夜中と静まりはてぬたが家も春の設けやと、此ひぬらむ  
言 出 戀 まのすゝき今日まで穂おも出ざりし下の思をいひや晴さむ  
別 戀 わけはてバ道の人めをいかせむいざ別れなむ夜は深くとも  
顯 涙 戀 一度のおふせもなくてなみど河ひろくも世お流れける哉  
寄 帯 戀 三重にゆふ七子の帯のとけがさくみゆる心を戀ひ増りつゝ  
寄 秋 風 戀 篠すゝきはお出てなびく秋風の戀しき人の身おもまむらむ  
寄 月 待 戀 こぬ人をまちふかしてもみる月の光のいとみおぞまみける  
松 かの山の松のかまみやそめつらむ棚びくなべに色増りけり  
海 この夕べ舟此帆影もうつるまでなごわさりたる海の面かな  
山 風 雪まじり杉の枯葉をふきおろすくらまの山の風のさむげさ  
鹽 屋 烟 播磨がさあこの鹽屋の夕けぶら浪路の末にたなびきおけり



松下流水 谷かげの岩間をおつる山水を松のひびきとともひけるかな  
 曉眠 覺 なか／＼に静けきもののかねの音に驚かされし寐覺之けり  
 望遠 帆 夕波に舟のかくれてはる／＼と帆影此みこそ見え渡りけれ  
 半山無夕陽 うちわたす麓にくれて山の端の紅葉にのこる夕づく日かな

斐雄歌集終

六帖題和歌

妙泉寺亞元

春たつ日 おしびきの山松の上此朝づく日霞みそめより春やたつらむ  
 ついたち此日 ふる年ふかはる色とも見えなく今朝の野山の珍しきかな  
 此こりの雪 さい波の比良の高嶺のえら雪の春のいつまで残るなるらむ  
 わかな けふこそと出て來つれど春の野の若菜の未だ少なかりけり  
 春日野の飛火の野邊に打ひれて若菜つむらむ人のそで見ゆ  
 はるのはて 春のけふ限とおもへば鶯のこゝらなくねもさびしかりけり  
 はじめの夏 はるすぎて夏やきぬらむ鶯のみやまの里あかへりてぞなく  
 うのはな 山河此いはにせかれてたつ波をさし此卯花ちるかどぞ見る  
 さつき 足引のやま時鳥さみづれのふるをやなれもわびてなくらむ  
 五日 ひさかさ此空よく風も薫りけり菖蒲をふかぬ家しなければ  
 みな月 となつこの花の盛なるまゝに照日あつくなり増りけり



夏のはて 我宿にわすこむ秋をこよひより音みぞたつるをぎの上かぜ  
 葉 月 うちよする波の音みもちりみけり野鳥がさきの秋萩のはな  
 駒 ひ き さりはら此駒のひけども逢坂の關路の月にくもらざりけり  
 長 月 なが月の時雨此あめお松の葉此ときは此山も色づきみけり  
 秋のはて よも山此木々の梢をそめつくし今に秋のくれてゆくらむ  
 初 冬 かつらぎや高まの峯みなる雲のまぐれて渡る冬のみきみけり  
 霜 月 雪ふりてこもる頃よりさぶきかな霜おきわさる小山田の里  
 か ぐ ら 曉此そらにすみてもきこゆなり大宮びどのほしうたふこゑ  
 玄 は す 朝戸あけてけさ見渡せば白妙の雪にこもらぬ山なかりけり  
 佛 名 み佛此み名おてきえぬ罪あらばいかおかもせむ我後此世を  
 としのくれ 徒にくれゆくとしと思ひし我身おつもるよはひなりけり  
 天 此はら ひさかとの天つ御空の果もなきわが思こそかなしかりけれ  
 て る 日 あしびきの山田色づく秋されば照日の影もろさしうりま  
 夏 の 月 山のはの月まち出て涼しくもなりぬと思へば夜の明みけり  
 秋 の 月 墨此江此さしの松原さりはれてさやかおすめる秋此よの月

冬 の 月 わが宿の池の氷にとぢはて、月もやどらずなりみけるかな  
 三 日 月 ぞみぞめの夕べの空のうき雲のうちにほのめく三日月の影  
 在 明 はがらかに夜の明けされど有明此月の樹間に猶ぞさやけき  
 春 の 風 片岡のかさねの柳なびくゆりいと此どかおも風やふくらむ  
 山 おろし 我岡此あずる此紅葉こさちらしけさはさふるす山嵐のかぜ  
 あ ら し から衣たつたの里おふゆきぬともみぢ散らして嵐ふくなり  
 玄 ぐ れ わが宿の萩の枯葉になりしより時雨の雨のふらぬ日どなき  
 玄 づ く 松のは此葉此おちてそむればや下はふつとも色にいづらむ  
 玄 も 山さとの秋のうちよりおく霜おはさも薄もかれはてみけり  
 ゆ き も 浮雲のたえまに白く見えにけり比良此高嶺のけさのはつ雪  
 け ぶ り 我上此みるうちつけにかなしき鳥部の山此けぶりけり  
 ち り まろたへの圃の枕のちり塚おなるまで人のつれなかりけり  
 なるかみ 大ひえのをびえの山のあなさより神なり出て雲ぞたちくる  
 いなづま 夕開のそらにこりして浮雲のひまより光るいなづまのかけ  
 山 神無月たちにし日よりひら山の時雨の雲はなれざりけり



やまざり 山鳥のみねをへだて、ひとりぬる契に似たるわがちざり哉  
 栗田山もみづる頃になりしよりよひ、鹿のこゑぞ聞ゆる  
 山里のさぶき頃おもなりおけりわした霜おき夕べまぐれて  
 山の井 夕月此かげ山の井お見えそめて紅葉の色くれわよりけり  
 斧のえのくちし物ゆゑもろこしのそ此山人の名の残りり  
 すみがま 遠山此みねをるさへ雪ふりてすみやく烟わらはれおけり  
 もり 時えらぬ常磐の森の陰まめてすむらむ人ぞ千代のへぬべき  
 みち 敷島のやまと大路のよるさへにゆき、人の絶る間ぞ奇き  
 うまや かいみ山夕日のかげおなるまゝに麓此うまやけぶり棚びく  
 春の田 さくら花ちりてさびしくなるなべに苗代つくる小山田の里  
 夏の田 卯花のさかりもいまだすぎなくに岡田此里のさ苗とるなり  
 かりは わしびきの山田が原のかり庵の時雨にある、冬なきおけり  
 いなおほせ鳥 山田もるかりはの庵お朝なく、きてもなく哉いなおほせ鳥  
 そはつ 此まゝにくちなむ我のむら時雨ふる此山田のそはつ之けり  
 春の野 花山のはるたけぬれど雲雀さつ野邊の莖此さかりなりけり

夏の野 俄おもふる夕だちにあひおけり夏野を荊りに出てきよれ  
 秋の野 八千草のはなの盛の此野邊のひるもふりいでて鈴虫ぞなく  
 冬の野 住の江此遠里を野此からはぎに小鳥まばなく聲のさびしさ  
 雑此野 春日野此飛火の野邊を来て見れば庵も見え老もる人もなし  
 わし いかならむ鳥あわらむ名おへる鷺此み山のみ佛のやま  
 小たか 夕日かげさすや岡田の畦つさひ小鷹をすゑて人此ゆく見ゆ  
 都どり 都鳥なくこゑきゝて浪花江此うさね悲しくなりおけるかな  
 もしき 大君の千代おまします百敷のみやこにすむが樂しかりけり  
 さと うちき事此聞にぬ里も廣き世おなからましやの尋ねても見む  
 隣 よき人の隣おやどをまめしより世の樂しくもなりおける哉  
 井 わかかへる逢坂山のはしり井の水のそこおも宿るつきかな  
 庭 さいゝまらぬ虫もなきつゝ庭草此ちぐさの露お月すみおけり  
 戸 わけられバ明るまゝに捨置けば柴此編戸のあるかひもなし  
 おむ なます鏡とりてし見れば我ながら耻かしきまでとし老おけり  
 おや たらちね此親の恵おくらぶれば千尋此海もあさしどぞきく



う　ま　くさ枕たびゆく路のる駒のつまづくことお妹ぞこひしき  
 や　ふ　し　墨ぞめに衣のそめて着されどもうさの姿によらぬなりけり  
 あ　ま　花をのみかざりたてたる昨日おのかはる姿のあはれなる哉  
 鳴　ま　けさ見れば池の汀にゐるかも此青羽もえろく霜ふりおけり  
 鴉　池水此そこをくいて鴉どりの思はぬかさにうき出おたり  
 龜　萬代のかめの齡おともなふこのやま川のいはほなりけり  
 鮒　このゆふべ堅田の浦にはのめくの鮒とるふねの簀なるらむ  
 鮎　若鮎此のぼる頃おもなるなべに花ちりわさるみよし野の里  
 ひ　を　田上のやまがは遠く篝火のゆるるぞ見ゆるひをやよるらむ  
 川　音さへにまみどほりても流るゝの吉野のおくのきさ川の水  
 蛙　あらし山はなの光もくれゆけばとなせ此おくに蛙なくなり  
 樋　山かげの笥にかよふ水のおとの明暮きけどさびしかりなり  
 夜　う　船さまくらはし川の篝火の水おうつりてもえまさりなり  
 や　な　山川のやなにかゝりて落鮎のひれふる見るがあはれけり  
 う　き　あしねてふ入江の沼のうきおのみ沈みはてなむ我身悲しも

庭　た　づ　み　ふるほどの雨の残らず我宿のにはたづみともなりおける哉  
 う　さ　か　さ　山川の波此うたかゝ消えぬまを頼む我世ぞはかなかりける  
 海　わ　た　つ　み　の　大海原のはてもなき沖をこぎても渡る今日かな  
 い　か　り　沖つべに磯おろしてまほまては波のそこより月ぞにはへる  
 藻　磯およる波のまに／＼なびく藻の亂れぬ日なきわが心かな  
 浦　さ　夜　ふ　けて　沖　つ　嵐　や　さえ　ぬ　ら　む　浦　か　さ　つ　き　て　千　鳥　な　く　な　り  
 な　み　沖つべになみの白花ささふけり汐さる荒くなりやまぬらむ  
 湊　ま　な　が　と　り　ぬ　な　の　湊　に　よ　る　船　此　梶　の　と　高　し　ま　ほ　や　み　つ　ら　む  
 片　ま　ぬ　ば　か　り　戀　渡　れ　ど　も　つ　れ　な　き　い　か　な　る　人　の　心　な　る　ら　む  
 戀　ま　ぬ　ば　か　り　戀　渡　れ　ど　も　つ　れ　な　き　い　か　な　る　人　の　心　な　る　ら　む  
 お　も　か　げ　音　お　の　み　き　お　し　人　の　い　か　な　れ　ば　面　影　た　ち　て　戀　し　か　る　ら　む  
 う　ら　み　お　わ　が　う　へ　に　お　も　ひ　か　へ　し　て　唐　衣　ひ　ど　に　恨　の　か　け　じ　ど　を　思　ふ  
 い　は　ひ　行　末　の　き　み　が　千　年　お　わ　は　む　と　て　我　身　の　う　へ　も　祝　ふ　今　日　か　な  
 わ　か　れ　か　へ　り　こ　む　程　を　定　め　ぬ　旅　な　れ　ば　け　ふ　此　別　ぞ　か　ざ　り　な　ら　ま　し  
 ぬ　さ　千　早　振　か　み　の　御　前　に　ぬ　さ　と　り　て　い　の　る　祈　の　き　み　が　世　の　さ　め  
 た　む　け　ち　る　花　弦　手　向　お　し　て　も　お　え　ゆ　か　む　逢　坂　山　の　も　り　の　ま　さ　み　ち



た 古里の人もひやるだお遠きかな幾重の山をこえてきつらむ  
 かなしび 鳥邊野の烟となりてたちのぼる人此はてこそ悲しかりけれ  
 いひはじむ 山川のいはねばえらじ白波のうちいでて見む底のこゝろを  
 あひおもふ へだてなくなりて思へば君とわぶ下の心ひとつなりけり  
 あひおもはぬ 白波此おもひよまれどかひなき人此心のいはねあまら  
 こと人を思ふ いかおせむ我をばおきて白雲のよそにうつるふひとの心を  
 わきておもふ 秋の野の千草が中にをみなへし一本わきておはれどぞ思ふ  
 二人をり 吳竹のよをうきものに思ひし君とすまはぬむかし之けり  
 曉 おおく 聞此戸に有明の月のかげさしてつらき時にもなりおける哉  
 一夜隔てよる 今より一夜もかれを君またむ獨りのこそねられざりけれ  
 遠路隔てよる 玉銚のみち遠ければ鳥此あど通はまぶおも日をぞへにける  
 人をまつ 君こむと松の板戸をわけおきて詠めしをれば月ぞさしくる  
 人をまたま またぬ夜に君のこむとやかくばかりまつ夜毎おのつれなかるらむ  
 人をよぶ 初雁のなくねの妹がよぶ聲うさくうちつけお戀しかりけり  
 見すれず おさがほの花の上なる露のまもさみを心おかぬまどなき

めづらし めづらしき妹が袂をふきかへしすみれさく野に春風ぞふく  
 人をとひむ 此朝け雨まどいにも降なむ晴るまつとて君やどまらむ  
 名を惜む おもひ川思ひの淵に沈むとも戀すてふ名いたてじどぞ思ふ  
 汐やき衣 我戀のまはやく海人のふる衣なれてかふくもなりにける哉  
 なつ衣 なつ衣たもと涼しくたちかへて花の名残の今朝わまれり  
 あきの衣 秋かぜの衣手さぶくふくなべに庭此ま萩のみざれてぞちる  
 ころもうつ 聲すみて月のあたり聞ゆなり棚機つめやころもうつらむ  
 裳 妹がひくもまその色此紅にさきてにはへるいはつじかな  
 こどのは よの中のひと此心の言のはの上にてのみいたれまれなくに  
 琴 今宵ひく琴のまらべになき人の聲こもればや悲しかるらむ  
 かたな 武士のさつ矢たばさみ刀さし片野のみ野をかりにゆくらむ  
 さや 武士の刀もさやにをさまりし君が御代おそたのしありけれ  
 はかり 積りぬる我物思ひはかりなし何にかけたり敷をまらまし  
 いろ やましろの常磐の山の松のはの色おや君が千代の見ゆらむ  
 ぬれぎぬ 磯菜とるを島のあまのぬれ衣を君がさめおも我の着おけり



く 紅にみむろの山をそめてけりいかにふりたる時雨なるらむ  
 わ や 嵐やまかなゆく水のまふわやの花をうつして波ぞかりける  
 ぬ の 水鳥此かも川原にひきはへてさらま此布たれりかりけむ  
 秋のくさ ふく風のみおしむ頃になりけり野邊の秋萩今かさくらむ  
 冬の草 冬さぬとけさかく霜にわが宿の尾花が袖のうつろひにけり  
 まの草 常磐木の森にも秋やこもるらむかげなる草の花づきにけり  
 にこ草 此草の花にこやかに匂ふめる川べづさひに此日くらせり  
 もよ草 此草もよ草あふ夜の敷此名なりとて我庭もせに植ておかまし  
 手向草 此草くさ枕たびゆく道のたむけ草あるにまかせて萩がはなをる  
 ねつこ草 此草みちのくの三浦が崎のねつこ草ねによる浪の我おもひか  
 くさのかう 此草秋の野をわけつゝくれバ草のから袖に移りて匂ひけるかな  
 さちかう 此草いさぎよき色おさきても匂ふめりか柴垣のさちかうの花  
 りうたむ 此山柴垣はにたちて匂へるの薄むらさきのまをにけり  
 まをに 此草この菴此垣はにたちて匂へるの薄むらさきのまをにけり  
 はちす 此草にどりぬに生ふる蓮のいかなれば殊おも清き花のさくらむ

ひ し 山里のかきねづさひにゆく水の流めるかさに菱おひふりり  
 つきくさ 虫のねの晝もたゆまぬ敷かげの月草のはなさかりなりけり  
 ことなし草 此草かのが世の事なし草の事なしにけふの一日も暮おけるかな  
 芹 此草白河此きよき根芹をつまむとておまの袖に波ぞかゝれる  
 かにひ 此草秋近く成やまぬらむふく風此涼しき涼うおひぐらしのなく  
 ゆり 此草夏くさ此まげみが下にたれこひて色にもゆらむ姫百合の花  
 ひかげ 此草嵐やま花のさかりにまげ入りてひかげかつらし遊びける哉  
 すか 此草この國此有馬が嶽此まらすげの根深きおもひ人まらめや  
 あふひ 此草神やまの峯の葵も兼てより今日にわはむどおひやまおけむ  
 かたげみ 此草物おもひのみも積りて片げみのいつまで難き逢瀬なるらむ  
 みくり 此草つくま川いり江のみくりくり返し同じ事の思ひけるかな  
 きりくま 此草いづちにもゆきてなかなむ葦なが聲きけりものどかなしき  
 ひぐらし 此草夕月のかげになるまでかた岡のまつの梢にひぐらしをなく  
 はたる 此草艸むふに登れかかげの見えそめてをぐらくなりぬ岡のべの道  
 くも 此草おれ夕べ軒端にさがるさゝがに誰こむとての験なるらむ



去をり 萩が花去をりねきつゝ此野への末はるかにも誰うゆきけむ  
 はゝそ 秋ふかくなりてもうまきさは山の柞の色いまがはざりけり  
 かへ 時をらぬ松にならひてかへの葉もふか緑みやれひ茂るらむ  
 花さくら 我妹子が垣根おさける花さくらことにも色のなつかしき哉  
 ひざくら 片岡のはやしがくれに夕日かげ残ると見ればひざくらの花  
 あへたちばな 君まちてわりつる程に我宿のあへたち花のみもあちみけり  
 さくろ 梅雨のふりしく時になりけり庭のさくろの花もさきつゝ  
 からもゝ からもゝの花のあとにぞ三千年此齡此ぼゆる實の結ぶらむ  
 むろ むろの木を蚊遣此爲にふまぶらし烟にはへる大はふ此さど  
 がうろ 朝日影さしわたれども山陰のねぶの葉いまだねぶげなる哉  
 はがしは あしびきの山下道のはがしはうれ葉靡けて朝かぜぞふく  
 くは ことがひする時やきぬらむ山陰の桑の葉どりに少女つどへる  
 はつもり 足引此みやまの里のはつもりつもりつつきぬわが思のな  
 去きみ あさなくゝ去きみ原にかく露を玉にもかくる墨染のそで  
 あせみ あさけより霞こめてもふる雨あせみの花の色あせにけり

山ちさ ましらなく檜原が奥のかくれがの庭にさきさり山ちさの花  
 ゆづる葉 末どほき齡をさみあゆづるはの緑ふかくも去かりぬるかな  
 かたかご 人去れぬ垣根がくれのかたかごの片戀ばかり苦しきいなし  
 つまゝ 庵去めて我すみわさる谷かげの巖がうへにつまゝあひさり  
 さねき 柴の戸にさねき此花の咲ぬれど人しどはねば見る人もなし  
 はなちどり はなち鳥雲の遙おたちのぼりいかに嬉しきねをばなくらむ  
 ひな鳥 すみの江の松の梢ひな鳥のなく聲すなり餌をやまつらむ  
 かひ 巢ごもりのたづがね悲しさ夜ふけて松の梢お霜やおくらむ  
 つひ 春たちて浪の上霞むわさつみの沖べにたづの聲ぞきこゆる  
 ほとゞぎす 五月雨のあめ此ふりいでて時鳥わが山里にをちかへりなく  
 からも さまよふけて鴉なくなり山松のねぐらあらはに月やすむらむ  
 もず 木枯にもみぢ残らずちりはてゝさびしき宿に鴉ぞなくなる  
 はこどり はこ鳥の聲あけぶさ聞ゆなりわが岡のべの松おなくらむ  
 かほどり 朝日かげさしにはひたる山松のこのま此花にかほ鳥ぞなく  
 つばくらめ つばくらめ來てなく頃になりあけり山の櫻や匂ひそむらむ



わ 菟 馬 君が代の春のためしにひかれても玉しく庭にいづるわ菟馬  
 神まつり かも山此あふひをとりて百敷此大宮びどのかざす今日かな  
 わし た たなばさの又の逢夜の遠ければ今朝の別やくるしかるらむ  
 うるふ月 一年のをはりにみそか加はりて春まらどほお思はゆるかな  
 火 すくも火の上お見えず下おのみもえ渡るかな我物おもひ  
 く 奥山おすむあら熊もまことある物としきけつかなつかしき哉  
 ど から國のあら野が原にすむ虎の名をさくだにも恐ろしき哉  
 む さゝび 狩人おはれてなくかむさゝびの聲高まどの野べに聞ゆる  
 そ ま 斧のおど今の聞えずなりおけりみほの杣山おれやまぬらむ  
 つ か ひ 年をへておはぬのみかひ玉梓の使もいまいこせなりおけり  
 み ゆ き 小倉山みねのもみぢ葉秋ごと君がみゆきやまら渡るらむ  
 み や こ 天地のあらむ限のうち日さま君がみやこもさかゆべらなり  
 や ど り 鈴鹿山さかのまゝにも宿りして霞ふる夜をわびあかすかな  
 す だ れ 玉ざれのをすの内こそゆかしけれさしても思ふ人いなければど  
 う し 小車の牛おもなるときくからにかなしくもあるか墨染の袖

つ 君が爲千代のかざしに折りていなむ山路おさける白菊の花

六帖題和歌終



亞元集ぬきほ

鈴が森の柳をよめる

旅中花のる駒のひづめよかたて鈴鹿山ちりたる花を又ちらしつゝ  
 落花長閑あるあらしの山の夕づく夜何よみだれて花のちるらむ  
 首夏水さらくさ流れおちてもゆく水よ心のさまる夏は来よけり  
 古砌萩まき瓦われしひまよりおひいでてさやく砌のをぎのうは風  
 野徑萩ま萩さく野道ハゆか下わけゆかバ露や亂れむ花やちりあむ  
 崎秋萩うちよする涙の音よちりあけり野島が崎のあき萩のはふ  
 秋夕催涙さりさめて何をそれさハあけれども涙ぐまる秋の夕ぐれ  
 秋の歌栗田山をのへふ秋やこもるらむ見るうちつけみ物ぞ悲しき  
 十五夜月を見たりて  
 あはれ又こよひの秋よあひよけり思へば月も老やしぬらむ  
 京をたむさしける秋  
 いつの世よかへり来て見む中山のふもこの里の秋の夜の月  
 蟹狩芦たづの千年や御手よいりつらむさよと渡れる御狩野の原  
 舟中除夜難波江よ舟をさよめて思ふ歳年のさまりハいづこふるらむ  
 原庭の庵よて火の災よやけむさしける時  
 目の前よありてふき世を示すうふ炎も法のほらよやハある  
 述懐うき事のきこえぬ山の奥よしてふと世中のこひしかるらむ

残の夢

高橋残夢

お此を若りしより萬さちあき身あて世中いとむつかしう心苦しき事多  
 ろる中おも不幸お患へああへる事子ばかりも十人おまぎて大うさの悲し  
 るのうち月日へあなるけあや年三十ぢをおゆるやめて白髪みえ初て我  
 世の早くふなあなるを今の六十ぢ近く身あつまるうき秋此形見の霜年々  
 お置きそはりてみるのげ此まはす乃月よりもまさまじなまば早く拂ひま  
 てゝんと思ひはてたりきさらん後あの名を残夢とよばればやとまで思ひ  
 定然てあるほしう

朝夕の露此間ばあり残る夜の夢の何のまえんどまらん  
 など思ひやらまし事もあましさをさはるあどいで来てえはたさいりたりこ  
 へお残夢とよばれんと思ひし我世乃今ハわづのさる汝乃と思ひやれる  
 此まかりなるを其後一年ばかり経て思ひかた老眼をわづらふ事いで來お



なり。ある薬師に見せさるふ、おのうみそこひといへるも此ふて薬のをさむべき道あり。たゞ時残まちて、うみのうまく濃たらん時針おのりてかき落せ乃外ありとぞ。さるお驚きて、おのりしこおなまゝる薬師尋ねてみれるお、皆同じさまおいふゆえまば、力あき時まちて、今の五年おぞ成おたる。されば物なる事、日おろふうとく成行く。今の夢より外おのりさやかお見ゆるも乃おく、おのよばまんど思ひつる名、やめて此さがなりたりと思ひ知れば、いとゆゝしき名おれば、猶かへもやせんと思へど、前乃世乃宿世ありせば、いのでこの此がるべきと、再び思ひ定免たる、文政十二年神無月十六日あり。妻子おもえらせでと思へば、さる事多くて、今日にくれぬ。あくる日も、けさの間と思ひて、とくおき出さるお、有明乃月牙渡りて、世中猶静あり。

あはれけさ拂はんとおもふ元結此霜おのりさある月此影のあかくいひしかど、なふもえはたさ暮おたり。

十八日曉、まぐるゝ音お寐覺たるお、眼やおにぞちて、燈火の影もほのかなり。夢よゆめふままと思へ曉のまぐれ此おどのさやかにぞ聞く今朝ぞ思ふまゝに拂ひ果たる。知る人もなかりたり。

はかなくもかはる吾身此影をせてまづ朝鏡おどろかさばやなふよりぞ残夢といよびそめたる。およひねごめに、

見る事、夢ばありあそ残りたれわが名ははれど月や聞らむ

初冬 風

初時雨さそひ來おたるゆふかぜのはて木枯となりおたる哉

曉 霜

我宿の松の木がらし覺束なよそ此もみちやちらしはつらむ

森熊夫が象頭山奉納千首和歌満詠の祝したる日

はのくゝと有明の濱の朝汐のまつる人の糸がひなまけり  
糸がひさへ満ちぬる千々の言此葉の數おそ君が齡なりたま  
森床子のまはかりける頃

此おりあく灰にかりぬとさくものをなど俵にたち残るらむ  
老ぬるを若きにかふる物なうバ世のかくばのりはうあからむを  
寒山月 まづままし嵐の底おさえおたり松の葉まろき山の端のつき  
朝千鳥 日影さき佐保の川邊の朝霜のけぶりの中おちどりあくなり



閑居殘菊 置く霜の色おまじりてきえ果ぬあさ月夜も鳴く千鳥かな  
 山あげれくさのいやまの冬かけてさくの花こそ盛なりけれ  
 雪朝眺望 葛城の峯と雲とのさかひまでさやかみゆる今朝の雪かな  
 去る雪のつもる朝けお立いでて静ある世のけしきをぞとる  
 歳暮 今さらおはらひし雪もあひしくて鏡のかけにをしむ年かな  
 と渡せば山おも雪のあかりなりわが身お似たる年のくま哉  
 歳暮 松 雪つもる松の木かげに隠れても暮行く年お福はじぞ思ふ  
 除夜の曉お 冬の夜をさがくもねざめく来て終お今朝にも成おなる哉

春歌

正月元旦試筆 萬代もろふとさだめし大君の春此ひかり乃此どかあるかな  
 長閑おもかはまる御代の景色かな昨日のこぞと今日の今年と  
 若水結ぶとして 今朝毎お結びくしむか水のつもりて老乃ふちとなりぬる  
 又元旦お としの内お雪のさえさる山松乃梢此どかおはるの來おなり  
 といへるの去年の冬剃髪さるればあり

隣を聞ての へびておく聞えけるか春さぬとつぐる隣のおはとり此聲  
 夕ぐれお はつ春のはつ日も山お傾きぬかくるもの此初めあるらむ  
 所々立春 朝がらまおの山々鳴く聲お春をわけてもさつかまをか  
 須磨のかしお此が浦々よるなみの立わかれても霞むさ哉  
 初春 鶴 とけそめて今朝の水も流ま江お根芹つむとや鶴もさつらむ  
 初春 野 打むまて鶴も摘むある芹川の竹田のはらみどりありなり  
 江戸ある斐雄がもと本年のはじめの文つかはまついであり  
 子日 松 さぐひあき富士此高根此雪の上に立ちむ春を思ひこそやま  
 ねの日まる物といふしお百千鳥はやくもあそぶ小松原か  
 はつ春のはつねの今日と鶴のさく聲さかしをか此邊のまつ  
 正月七日聽松軒の茶事およばれて其むしるおてよ然る  
 今こそいあらはれおま埋火おかねてかおひしはるの光も  
 野外朝霞 霞まての山あき野邊の朝日かげ海より此ぼる心地こそまれ  
 すい菜さく野べはるかおも福くる夜を猶立おむる朝霞か  
 海上霞 立わさる霞のやがて海おれど波お似さるも此あかりなり



竹裏鶯 朝日かげ竹のはやしの出ぬれと猶こもりさるうぐひまの聲

尋梅聞鶯 おぞ見つる岡邊の庵の梅の花問へば變らせうぐひすも鳴く

野外朝鶯 朝日うげ手おとるばかりちうき野北山かゝほきて鶯此さく

閑居鶯 鶯のさかざりたり春風のまづかおひやくまばの戸北おと

雪中若菜 浅みどり春のわか菜の萌さらば雪のそこまで誰うおもはむ

正月五日濱墓源光寺やけさるふ六日北野にたり若菜つとけるついで源光寺のやけ跡さふ

まかりなるふ法師のさくくたてるをそとよと侍りなる

若菜つとふいでたる人々の歌少さかりなれば

山残雪 よめ菜つむ梅田の里の春めきてむおがねさむく残る雪かか

あたらしきやけ野の原おきてこれバ涙の外にかく物もさし

春の野北雪問おつみし言の葉の若菜よりこそ少さかりなれば

山居余寒 鶯もいまいはんとまつの戸を研かへりてもさくかせ哉

さか／＼小嵐の雪お埋もれてさえかへりさるたき此音かか

二流館兼題余寒月

さえかへりつさかげ寒し天漢岸のやあざもつらゝぬらむ

二月廿日ばうり雪のふりたるわし

老おたり今朝も夜床おうづもまて春珍らしき雪をだおま

霞中梅 梅此はあほまゝ咲らむ朝がまゝ薫りもちたる此やま路かか

不見洛陽花 我ごとや都のはおも見ざるらむおもり果さる谷のうぐひま

縁柳枝弱不勝鶯

さか／＼お雪おも折れぬ青柳の枝あやぶまてうぐひま此鳴

咽霧山鶯啼尚少

霧ふかさ山のおくこそ中々お鳴くうぐひまのこゑも稀きれ

花枝 處芳紛々

梅此花一枝をるとうごかせば匂ひぞさわぐむせぶばかりお

雨中落梅 梅の花こぼれしものを春さ染の雫のみともおもひなるかか



紅梅の色よさをつとかりとて光賑貞幹兩子の給へりたるお

おゝろざし深きつとわの梅此花つきくしくも見ゆる色哉

鶯此うらまにかへて嬉しくも手折おたりおうめのひとえど

夕柳 山里此ゆふけ此煙さえしよりやあざもえを成おなるうあ

わが菴のやあざの梢くれ初て山おかゝれる三日づきのかげ

風前柳 梅が香をさそひてもゆく春風のあと追ふも此の柳なりなり

長閑ある日影とともお此びそ死て短うかり多り野邊の若草

春草短 雲雀立つ岡への道を折かへしわらびさづぬるまやお人かな

おが岡のつゝじがくれ此初らび都少女おをらせてしがあ

岡早蕨 さいまちく春の岡邊の初らび萌るわさりも人おまれつゝ

さいまちく春の岡邊の初らび萌るわさりも人おまれつゝ

夕春月 いつ暮れていつかりぬとも知られぬの花のあさりの月夜となり

暁更春月 玄らむふのまぶひまありと見ゆる哉花此木の間に在明此月

春月入簾 おくふかくさし入る影も霞となり波の外山の春のよの月

江上春曙 釣舟もあゝるありてや浮ぶらむ難波わたりの春のほけば此

春光只是有明朝

梓弓はるの光とまることおほまのあさ日やかざりあるらむ

春夢 月おさる物ちらくお春此よの夢おおるある此ねざめかあ

旅宿春月 花ゆるお今日の日くまで宿りつる里あつうしき春此夜此月

ゆふ雲雀とくさが原お落はてゝ月おそおほへさらしきの里

かまきていあつかしからぬ里もあし草の枕の春のよ此つき

關路春雨 春雨もおびしき物う逢さかのせき路のゆきゝ今日い少あき

まゝか山今朝ゆく駒のたつぐみも露をえ初て春さめぞふる

鈴鹿山はきの雫もええそ死て關路まづかおはるさ死ぞふる

ふり増る音といあしお春雨のもらぬかげあき不破のせき山

樹陰春雨 松かか此いはお此終おぬれ初てまづくひまあき春雨ぞふる

花間春月 わが宿の花の木の間お成しより行くともえぬ月の影かあ

眼の病いまいとおぼえたる頃二月十日ばかり月を見て

おぼるおもむが世の限えもせば嬉しからまし春の夜の月

聽松軒の主大井河の名を得て獅を擬とあづたる茶煎じて人々とあそびたるお涌蓮法師

の事おと語りいでて



嵯峨山此まゝの巖やふるし人のゆ先さましらん水の音はも  
又清瀧の水も得たり

あたひ山今や雪消の水まきてかど清たきとおちまさるらむ  
こよひ月いと長閑あかせ静あり庭此松を

夕 歸 雁 もとより乃まつのおゝる此まづさを臘月夜此光おを見る  
歸る雁とめまほしき春雨のそぼふりそむる夕べありたり

墨染の夕山さくらほのくくと暮ゆくまねをかりぞ越えさる  
はるくくと鈴菜さく野茨行く雁の猶暮まどや急がざるらむ

雲間歸雁 山吹のはち先はるゝ春雨のくもまお見ゆるかりのひとむら  
歸雁作字 さく花此上といふ文字お似さるか奇山此端おゆる雁此一列

ゆく雁の文字の關守言とはん入どかきし浪おや有るらむ  
はどもちく秋の又くどかきけちて雲おいりぬる雁の一つら

春 山 君が代の千年の山の花見おもむれてゆかんと思ふどちあり  
尋花不問春淺深 さくらばち尋ぬる山の春の色あさしとやせん深しとや見ん

對 花 春此夜のあくれバ花おむかひゐて此ごる物ぞ思はざりたる  
山 花 呼子鳥よべどよべどもおく山の花のかげお人おざりけり  
あさ見まど夕べおそれと櫻花くもといふべき外おかりたり

山暖山花處々開

山此端の花のまら雪あゝかふにはふ春日とありおたる哉

鶯聲誘引來花下

鶯の誘はざりせば山ざとをたゞちおはちのかげおこましや  
櫻さく片山おげのわかれ道うぐひすの音おまおせてぞこし  
出嶋氏の別荘の花まおまかりて庭上櫻といふおどを人々よまたるお

庭の面此花の木の間をおつるどもまらで過ぐらん淀の川舟  
松かおの春のちとせと思ふらん長閑おもさく庭ざくらか奇  
塙東庵の花見おまかりて花のあるじといふ事を人々よみたるお

おはざくらささみつ春此一時やはちのあるじの命あるらむ  
老眼花前晴 るる事のかまこがち飛る老の眼も花此前おはまおたる哉  
花下忘歸因美景



嵐山おつる夕日乃けしきおもたゝまんもの花乃まゝかけ  
 歳時春猶少 うべしおそ短うかり々を櫻ばあさきてちる間を春と思へば  
 花 便 句ふやと先あつかしくお不ゆるの花のたよりの袂ありたり  
 山花 盛 嵐山花のさかり乃一ときを松や千世までねしと見るらむ  
 暮山花 暮るくもゆふべの雲とありはてゝ山の櫻のくれおなる哉  
 井上喜尚の家の花見おまかりたる日松風たえ吹て花やうやくちりそめなれば  
 松風の音の千とせも聞きてゝ庭のさくらよちりいそぎまあ  
 櫻此宮茂遙おまやりて  
 雲のうちふいまま神かどみゆるかな鳥のの一字欠き花お隔てゝ  
 ある所の花のかけお鶏の鳴くをきいて

晚歸多是見花巡

山ざくら見ゆるかざりのかへりきて歸る野道を暮渡りたる  
 櫻柳交枝 ぬひと絶てちらさぬ花の春もがさ柳おまじる青やぎのいと  
 春雨のふりかゝるともとゆるかさ花よりたかさわ茂柳の糸

暮春花

わが宿此花此木の間おかゝりたり向ひの岡此青やぎ此いと  
 さき残る山路の花おかな過て暮れゆく春ぞつれおかりたる  
 はるくるゝおげき此色もなきもの哉(下句欠)  
 やよひ山かさある春をりて咲く花此心も長閑けからまし  
 今年三月お聞ゆればのくひいへるあり

長田馬子が家の花見おまかりたるおうゑ並ぶる花のよふ山吹咲亂して花散おたる

山吹の枝たむむまで降かゝれどもちるべきは春のまら雪  
 落花 花 おだありといひはさされて櫻ばあ年々はやくちる心地まる  
 落花 風 おまりおもれどなき花此心との誘ふ風さへおもふべらあり  
 稻荷 詣 おまかさかんさくららゝらる稲荷山々ふも花こそ盛ありたり  
 いかりやまとの高根も霞むまで都をど絶が袖かをるあり  
 志賀山 越 日ぐらしおあえはつくもおもはえな花蔭多しまが此山道  
 春 風 白雲とをゆる高嶺の花までいとゝかざるらむ野邊此はる風  
 は春の香をさそふ力もあさばり此どかおありぬ春の夕風



春

旅

あしより夕べをかけて春風いふほど霞もはれを有る  
 々さこゆる鈴鹿の山の花ぐもり旅の今こそさかりありま  
 ともちひし雁のまきて、行くとも花の蔭の休らひてまし  
 花故み出し旅もあらなくおきど木此本此たちうかるらむ  
 山ざくらまらめバ宿を立出て花のかげおもくらまをちか  
 曉 更 雉 なの花の色ぶみまぶわ々乗てくらき門田おきいまさくこ  
 池 邊 山 吹 池水おうつる山吹今朝こればきのふのかげの寂しかりなり  
 藤 花 掛 松 藤波のうゝれる松の枝おこくれゆく花此はるのええま  
 としくにのぼりくして山松此千世ゆかゝらん藤おま此花  
 藤 花 隨 風 藤の花あらそひうねて靡くかきたのまはてたる松の風おの  
 暮 春 日 菅此根の長しと思ひし春の日の今日おあつめて短きやあぞ  
 瀧 邊 藤 雲よりおつるとまゆる瀧つ瀬おすがひて此ぼる藤浪の花  
 儉閑何處無尋春  
 春盡涙易出 呼子鳥よぶかひかくて春くれぬ花さきやまの谷此まといは  
 ほろくゝとわが涙さへおぼれなりさじもさく野の春の別お

惆悵春歸不留得

送春那得不感慙

兩所春光同日盡

一歲唯殘半日春

人皆のさげく々しきもまゆるらんをまらま顔おもまぐる春哉  
 ねもおろお別るゝ時も送りてん立歸りこぬ春おやの隔らぬ  
 都おの都のまとやあまくらんあおはの春も今日ぞくまゆく  
 一年おけふばうりなる春の日のひまゆく影もうま過おたり

夏 歌

水 邊 卯 花 かくこそい雪此中おもあがれま卯花さけるたお河のまづ  
 雪ほもる山のとかげとうの花の移る河瀬をおもひたるかあ  
 社 頭 卯 花 みともしの影消そえていかり山うの花月夜かげまらむあり  
 曉 杜 鵑 さく聲此まらむ物といあなれとも曉まらさほとゝまらうあ  
 霧 中 子 規 ほとゝまらひる鳴く山を越かねてきこりが宿お一夜寐し哉



郭公數聲 やま松の月もる梢さ夜更てまばくさのるほととぎまかき  
 郭公頻 ほととぎま打まきまてもさく夜哉いがある月の驚かまらむ  
 をちかへりうへりくして郭公鳴くおるまなり月此不るらし  
 西行上人影供お杜宇といふ事を

忍びえぬときや來ぬらん杜宇さうぬ夜も眠く成おなるうな  
 ひと皆夢さたたるをほととぎま獨きつと思ひたるかき  
 くらべ馬 めささまくれもふおるも二方お別れてまゆる馬くらべ哉  
 雨中早苗 あやふくおいこへバをやむ梅雨此ふる間ぬれてもとる早苗哉  
 早苗多 うる餘る早苗の道お捨されどひろふも此さき君が御代かき  
 我門の垣根のさきま水ひろしわまりしさ苗うるばうゑてむ  
 眼此病かもり侍りたる頃思ひついでよめる  
 おくるより我おにくらき日の影の幾度とへどくませざるらむ  
 あけぬとて向ふともあき日此影おぼつかなくも長き頃哉  
 大方もわびしかる世おふる雨の五月雨おさへ成おたるかき  
 さらでぶお物むつかしくまゆるよの空かき曇り梅雨ぞふる

五月雨晴

ほととぎまさく一聲お雲消てはまわさりぬるさまざれば此空

月前水雞

誰が門ぞたたく水雞此音まははかられぬべきこ此月夜か眠

雨後夏月

梅雨のおもふがまお降つらんなご雲さき月のかげかき

夏夜短

ゆふ立此さむり此露のやどりともまらま良なる月のうか哉

鳥中螢

夏の夜の夢さる間おあかるらんさめぬ内おも明果おたり

夕顔

まいみまとお舟よせさる島山の松かげくれて飛ぶはさる哉

夕立

月だおも消て影さき五月雨のほ光の中おもとぶはたるかき

關夕立

さまたれお猶晴かねてくらき夜の野邊をゆく火の螢さき  
 露此中にまじる螢もとび初てくまおんとまゆるゆふがほの花  
 何のおれど蓮の葉お置く露をおそ露の玉といふべうりなれ  
 やま風おきはひて過る夕立も移りゆく世のなしきさるかき  
 關此戸お涼しき風おどめおきて夕だちまぎぬるふさかの山  
 ぼふ坂此關のいはかざたくなり山さちいつる夕立のおめ